県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業（梅原地区）
に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(5)

富山県福光町

梅原落戸遺跡群 II

1995年3月

福光町教育委員会

梅原落戸遺跡4地区　中世道路跡　右上は建物跡

序

福光町の東部に位置する北山田地区は山田川と大井川にはさまれた水田地帯でありますが、東海北陸自動車道関連の発掘調査等で、縄文時代から近世までの様々な遺跡が発見され、多くの歴史遺産が埋蔵されていることがわかりました。

今回の調査は、県営ほ場整備事業（梅原地区）の実施に伴う梅原落戸遺跡の発掘調査です。遺跡の大半は盛土により保存することになりましたが、用排水路用地及び水田部分の一部について本調査を実施しました。

調査の結果、平城宮跡出土の木簡に記載がある川上里にあたるとみられる奈良時代の建物群や、室町時代の道路跡が発掘されるなど多くの成果がありました。本書は、その調査結果をまとめたものです。出土品とあわせて郷土の歴史の解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

この調査の実施にあたり、富山県埋蔵文化財センター・福光町シルバー人材センター・富山県農林水産部・ほ場整備事業梅原地区委員会を始め、地元住民の方々に多大なご協力を賜りましたことに対し、深く感謝するものであります。

平成７年３月

福光町教育委員会
教育長　吉江　正二

例　言

1　本書は、県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業（梅原地区）に伴う富山県福光町梅原落戸遺跡並びに梅原胡摩堂遺跡の発掘調査概要である。調査は、平成６年６月13日から同年10月28日までである。梅原落戸遺跡３か所の調査面積はあわせて3,450㎡、梅原胡摩堂遺跡の調査対象面積は約130,000㎡である。

2　調査は、富山県農林水産部の委託を受け、福光町教育委員会が実施した。地元負担金については、福光町教育委員会が国庫補助金・県費補助金を受けた。調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。

3　調査事務局は福光町教育委員会生涯学習課におき、文化係長鳥越知証が調査事務を担当し、教育次長兼生涯学習課長飯田滋が総括した。調査担当者は以下のとおりである。

梅原落戸遺跡（本調査）富山県埋蔵文化財センター主任久々忠義・同文化財保護主事境洋子

梅原胡摩堂遺跡（試掘調査）富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事島田修一・同河西健二

本書の執筆は、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て調査担当者が行なった。執筆分担は各文末に記した。

4　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表する。

伊藤隆三・井口善三・上野章・往蔵久雄・越前慶祐・片田良治・片山昌夫・狩野睦・木本秀樹・佐伯安一・斎藤隆・寒川旭・新藤正夫・神保孝造・太嶋勇・中澤喜義・西井龍儀・橋本米次郎・林敏三・前田廣・前田敏久・松本透・溝口博文・宮田進一・桃野真晃・山本伸正・吉田敏信・吉本俊一（敬称略・五十音順）

5　本書で使用した方位は真北である。土層の観察には、小出正忠・竹原秀雄編著1967『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社を用いた。

目　次

Ⅰ　位置と環境……1

第１図　位置と周辺の遺跡……1

Ⅱ　調査にいたる経過……2

第１表　事業計画地内遺跡一覧……2

第２図　遺跡の範囲と発掘調査位置……3

Ⅲ　調査の概要……4

1　調査の経過……4

2　調査方法……4

3　３地区の概要……4

第３図　３地区の基本層序……4

第４図　古代の遺構配置図……6

第２表　古代建物計測表……7

4　４地区の概要……10

第５図　４地区の基本層序……10

5　５地区の概要……12

Ⅳ　まとめ……14

参考文献……14

Ⅴ　試掘調査の概要……15

第６図　竪穴状土坑を伴う古代掘立柱建物と近世土台立建物…16

付載　梅原落戸遺跡周辺の古植生……17

第７図　３・４・５地区の地形と区割……25

第８～11図　３地区の遺構……27

第12～14図　４地区の遺構……31

第15・16図　５地区の遺構……34

第17～22図　３地区の遺物……36

第23～26図　４地区の遺物……42

第27図　５地区の遺物……46

第28図　試掘調査位置と遺跡範囲……47

図版１～22

付図１　梅原落戸遺跡３地区遺構配置図

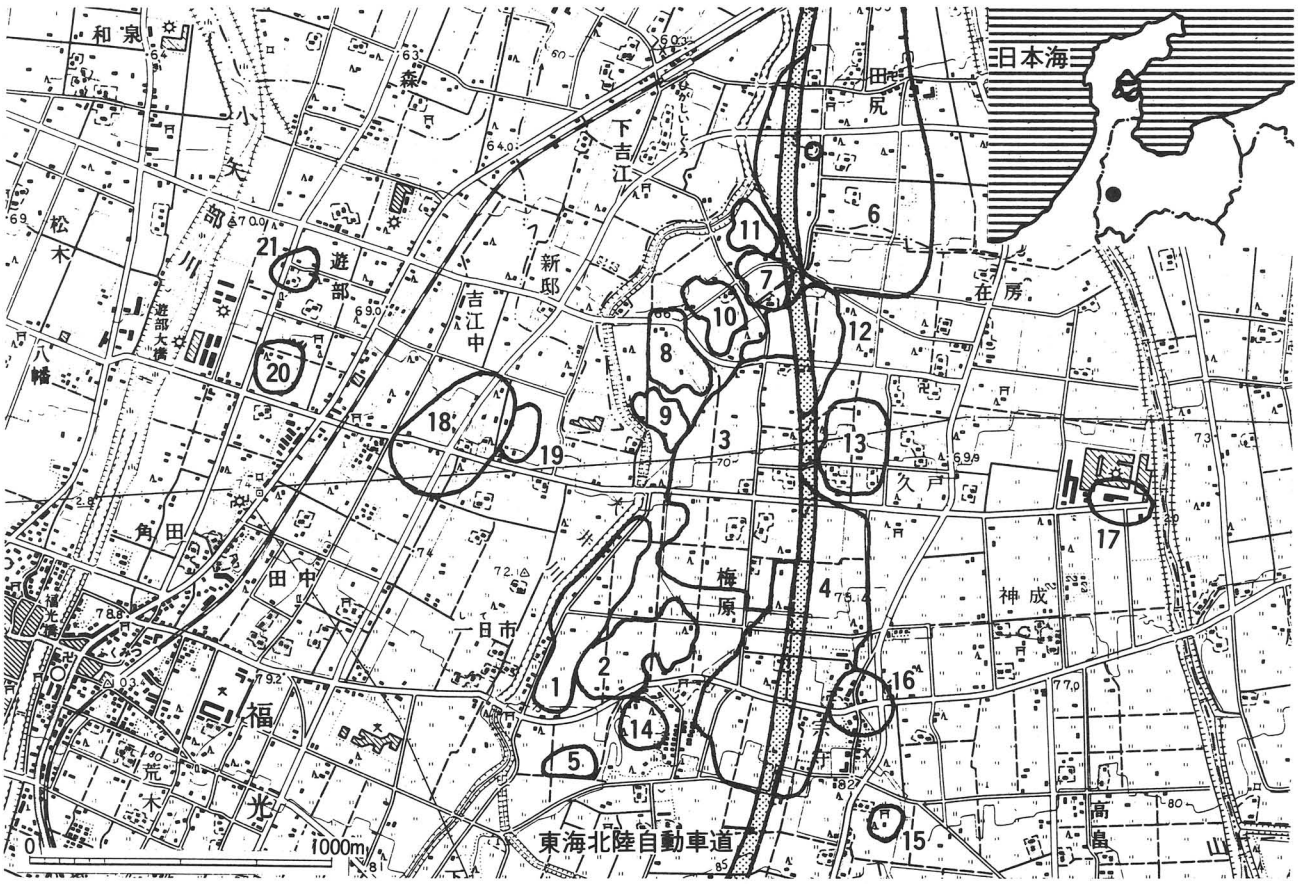
付図２　梅原落所遺跡４地区遺構配置図

付図３　梅原落戸遺跡５地区遺構配置図

Ⅰ　位置と環境

梅原落戸遺跡は、富山県西砺波郡福光町梅原地内に所在する。福光町は、富山県の西南端に位置し、西には719年（養老３年）に泰澄大師によって開かれたと伝えられる医王山がそびえ石川県との境をなし、南は大門山が石川県と東砺波郡上平村との境をなす。この大門山を源として富山県の７大河川の一つ小矢部川が同町を南北に貫流する。梅原落戸遺跡は、その支流である大井川と山田川に挟まれた山田川左岸段丘端に位置し標高は67～72ｍである。その周囲には梅原安丸・梅原出村・梅原胡摩堂・梅原上村・梅原加賀坊・久戸・田尻の各遺跡が近接している。(第１・２図)

周辺には縄文時代の遺跡である竹林Ⅰ・竹林Ⅱ・うずら山・東殿・徳成遺跡があり、南後方の立野ヶ原台地には旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡群がある。弥生時代のものは、梅原胡摩堂遺跡６・７地区より弥生時代中期の土器・石鏃・管玉が出土している。古墳時代のものは、梅原安丸Ⅲ遺跡で竪穴住居跡が１棟検出されている〔福光町教委1991・1994〕。古代には、福光町の一部が礪波郡川上郷に含まれていたとされている。この川上郷に関しては、平城宮東院の南東隅付近の坊間大路の西側溝から出土した木簡に「（表）越中国利波郡川上里鮒雑」、「（裏）腊一斗五升和銅三年（710）正月十四日」とあり、川上里（霊亀元年（715）に川上郷に改称）から鮒などの干し肉を貢納していたことがわかっている。その後11世紀には円宗寺領石黒庄が成立し、当地域はそのうちの山田郷の一部に比定される。当遺跡と東で接する梅原胡摩堂遺跡では東海北陸自動車道建設に伴う発掘調査により12世紀中頃～18世紀の大集落跡が発見された〔富文振1994〕。その後は閑静な農村地帯として続き、大正12年～昭和初期には、ほ場整備が実施された。このような歴史的経過を経て梅原地区の地形は大きく変化している。　（境　洋子）



第１図　位置と周辺の遺跡

１．梅原出村Ⅲ遺跡　２．梅原上村遺跡　３．梅原落戸遺跡　４．梅原胡摩堂遺跡　５．梅原出村Ⅱ遺跡　６．田尻遺跡　７．梅原安丸遺跡　８．梅原安丸Ⅱ遺跡　９．梅原安丸Ⅲ遺跡　10．梅原安丸Ⅳ遺跡　11．梅原安丸Ⅴ遺跡　12．梅原加賀坊遺跡　13．久戸遺跡　14．うずら山遺跡　15．宗守城跡　16．宗守遺跡　17．久戸東遺跡　18．仏道寺跡　19．田中遺跡　20．常楽寺跡　21．遊部城跡

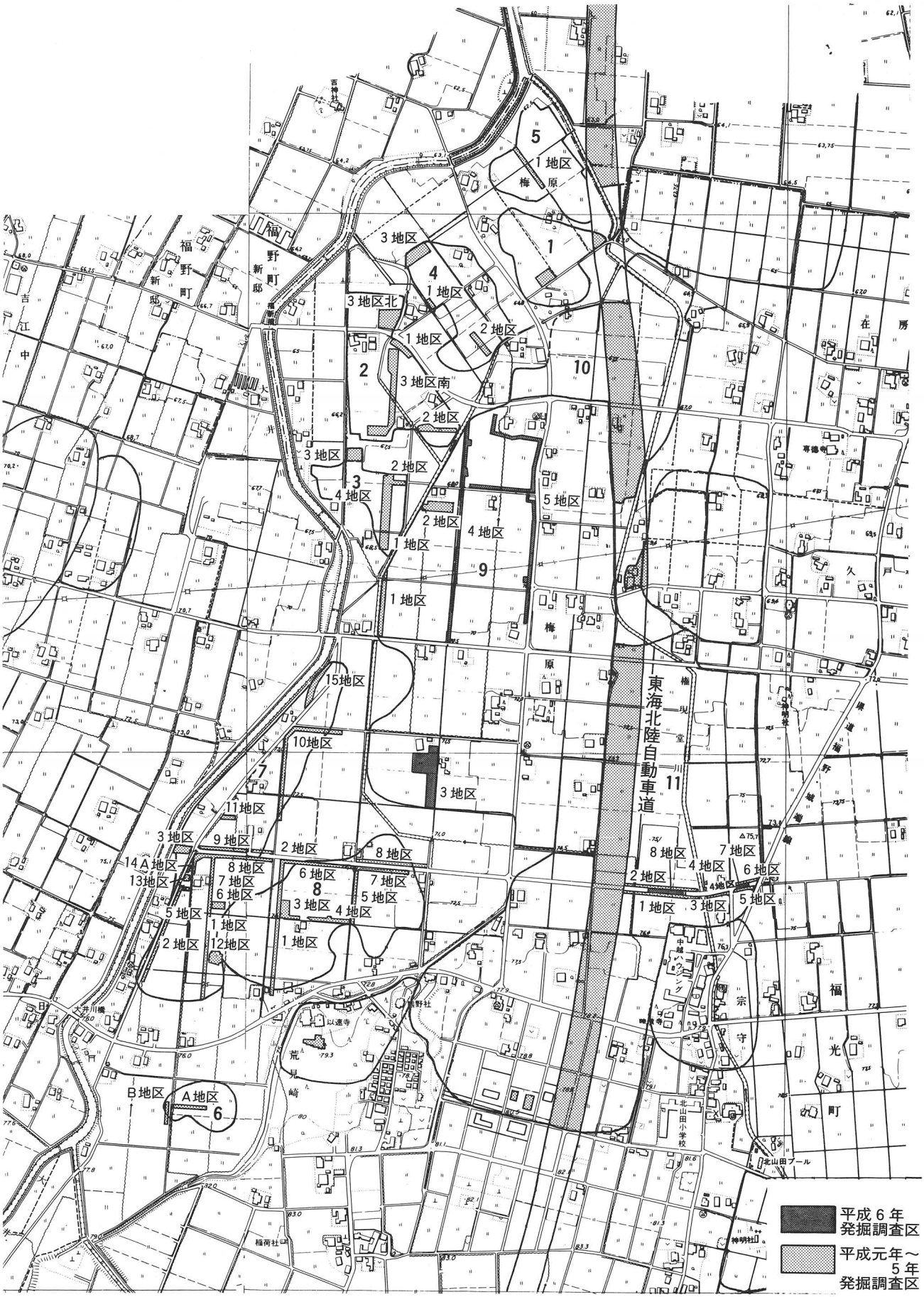
II　調査にいたる経過

遺跡の所在する梅原地区においては、平成元年度（1989）に21世紀に向けての大型農業に対応するための「低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業計画」が策定された。同事業は平成２～９年を事業年度とし梅原地区93haを対象とする計画であったが、計画範囲内ではすでに東海北陸自動車道建設に伴い梅原加賀坊遺跡などの存在が知られていたことから周辺への遺跡の広がりが懸念された。これを受けて町教育委員会は、県埋蔵文化財センターより調査員の派遣を得て平成元年度に計画地内のうち約20haの分布調査を実施し、10地区（内８地区が新発見）の散布地を確認するにいたった。平成２年度には国庫補助を受け試掘調査を行いその範囲を確認し、県農地林務部・県教育委員会・地元土地改良区と遺跡の保護措置の協議を重ねた。その結果、遺跡群の大半は水田下に保存する計画に変更し、一部の面工事・農道建設・用排水路部分については本調査を実施することとなった。

その後、平成２年度に残り73haの分布調査を実施し12地区（内９地区が新発見）の散布地を確認するとともに、前年度の試掘調査の結果をうけて本調査を開始し、現在にいたるまで毎年試掘調査および本調査を実施してきた。その結果の概要とこれまでの調査位置は第１表および第２図に掲げるとおりである。　（境　洋子）

第１表　事業計画地内遺跡一覧（No.は第２図の番号を示す）

No.	遺跡名	所属時代	立地	発見された遺構	発見された遺物	備考
1	梅原安丸	縄文、中世、近世	水田・畑地	掘立柱建物柱穴、穴、溝、竪穴状遺構、井戸、池状遺構	土師質土器、珠洲焼、磁器、漆器、五輪塔、石臼、下駄	Ｈ．３、１地区本調査
2	梅原安丸II	縄文（後期）、古代、中世、近世	水田	掘立柱建物、同柱穴、溝、井戸、土器溜まり	縄文土器・石器、須恵器、漆器碗、土師質土器、珠洲焼、陶磁器	Ｈ．２、Ｈ．３ ４地区本調査
3	梅原安丸III	縄文（後期）、古墳、古代、中世、近世	水田	竪穴住居跡（古墳）、掘立柱建物、柱穴、穴、溝、井戸	縄文土器・石器、須恵器、土師器、土師質土器、珠洲焼、陶磁器	Ｈ．２、Ｈ．３ ４地区本調査
4	梅原安丸IV	縄文か、古代、中世、近世	水田・宅地	掘立柱建物柱穴、穴、溝、竪穴状遺構、井戸	縄文土器、須恵器、珠洲焼、土師質土器、陶磁器	Ｈ．２ ２地区本調査
5	梅原安丸V	縄文か、古代、中世、近世	水田	掘立柱建物、掘立柱建物柱穴、穴、溝、井戸	縄文土器、須恵器、珠洲焼、土師質土器、陶磁器、曲物底板	Ｈ．２ １地区本調査
6	梅原出村II	縄文（晩期）、古代～中世	水田	柱穴、穴、溝	縄文土器・石器、須恵器、土師質土器、珠洲焼、銅貨、銅製キセル	Ｈ．４ １地区本調査
7	梅原出村III	旧石器、縄文（前・後・晩・中期？）、古墳～中世、近世、近代？	水田・宅地	柱穴、穴、竪穴住居跡、溝、井戸、遺物包含層（縄文・古代）	縄文土器・石器、須恵器（墨書土器）、土師器、土師質土器、珠洲焼、越前焼、陶磁器、銅貨	Ｈ．４ ２地区本調査
		縄文（前・中・後期）古墳、古代～中世、近世、近代	水田・宅地	穴、溝、井戸、遺物包含層(縄文)	縄文土器・石器、須恵器、土師器、土師質土器、珠洲焼、土師質土器	Ｈ．５ ３地区本調査
8	梅原上村	縄文、古代～中世、近世	水田・宅地	柱穴、穴、溝、遺物包含層(古代)	縄文土器・石器、須恵器、土師器、珠洲焼、越前焼、八尾焼？陶磁器、古銭	Ｈ．４ ２地区本調査
		縄文（中・後期）、古代～中世、近世	水田・宅地	穴、溝	縄文土器・石器、須恵器、土師器、珠洲焼、越前焼、石臼、陶磁器	Ｈ．５ ６地区本調査
9	梅原落戸	縄文（後・晩期）、弥生、古代、中世、近世	水田・宅地	川、穴、遺物包含層（縄文）、掘立柱建物（含倉庫）土坑（古代）掘立柱建物、道、土坑、溝(中世)溝（近世～近代）、柱穴	縄文土器・石器、弥生土器、内黒土器（古墳）、須恵器、土師器、土製品、鉄滓、馬歯、炭化米、種子、骨片、木製品（古代）、土師質土器、珠洲焼、越前焼、瀬戸・美濃焼、輸入陶磁器、土製品、木製品、小柄、鉄滓、銅貨（中世）陶磁器、鉄製品	Ｈ５ ２地区本調査 Ｈ６ ３地区本調査
10	梅原加賀坊	縄文、古代、中世、近世	水田・畑地・宅地		縄文土器、須恵器、土師器、土師質土器、珠洲焼、磁器	
11	梅原胡摩堂	縄文（後・晩期）、弥生、古墳、古代、中世近世	水田・畑地・宅地	穴、遺物包含層（弥生）、掘立柱建物、溝（古代）、井戸、溝、穴（中世）、柱穴、穴	縄文土器・石器、弥生土器、石鏃管玉、剥片（弥生）、須恵器、土師器、灰釉陶器（古代）、土師質土器、珠洲焼、越前焼、輸入陶磁器、砥石、石臼、石鍋、漆器、木製品、骨片（中世）、陶磁器	Ｈ５ ６地区本調査 Ｈ６ ２地区本調査



第２図　遺跡の範囲と発掘調査位置（Ｓ＝1/10，000）遺跡番号は第１表に対応

III　調査の概要

1　調査の経過（第２・７図）

今回の調査は、平成４年度の協議に基づき、田面削平工事並びに用排水路付け替え工事に伴う本調査である。調査遺跡は梅原落戸遺跡で、調査地点は３か所にわかれる。

遺跡は、当該工事に先立つ平成２年に行なった分布調査で発見された。平成５年度及び今年度には試掘調査を行い、その範囲はこれまで梅原胡摩堂遺跡に含まれていた所を一部合わせて東西約430ｍ南北845ｍ面積約279,000㎡となる（Ⅴ　試掘調査の概要参照）。本調査は、平成５年度に田面削平工事並びに用・排水工事にかかる２か所（１地区・２地区）合わせて1,710㎡の調査を実施した。

これまでの調査では、縄文時代後期・晩期、奈良時代、鎌倉～江戸時代の遺物が出土し、それぞれの時期に遺跡が形成されたことがわかったが、遺構については柱穴・溝・土坑が発見されているが、その性格についてはあきらかでない。

今回の調査地点は、平成５年度の本調査に続くので、３地区・４地区・５地区と呼ぶこととした。３地区は、遺跡の南端に位置する。田面削平工事にかかる2,450㎡を発掘した。４地区・５地区は遺跡の北部中央に位置する。４地区は排水路付け替え工事にかかる550㎡、５地区は用水路付け替え工事にかかる450㎡を発掘した。

2　調査方法

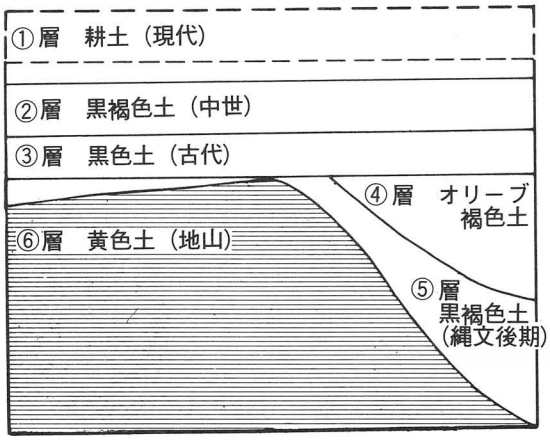
調査は、まず重機により耕作土の掘削を行った。その後、地区ごとに基準杭の設置及び調査区割を行った。調査区割は、調査区の形に応じておおむね南から北方向にＸ軸、西から東方向にＹ軸をとり、それぞれ２ｍを一区画としてアラビア数字でその位置を示した。

包含層の掘削・遺構検出・遺構掘削等は人力で行い、遺構平面図の作成は、ラジコンヘリ及びヘリコプターにより撮影した写真から図化した。

3　３地区の概要

(1)地形と層序（第３図）

３地区は海抜約70.3ｍである。南方と西方は長川が流れ、地形はその方向へ傾斜している。試掘調査では東方に埋没した川跡が発見されており、３地区は大井川の氾濫原の中の島状の微高地であることがわかる。地表から黄色土の地山面（遺構確認面）までの深さは30～60㎝で、その間は大きく４層に分かれる。さらに調査区北側中央には縄文時代の川跡があり、その埋土には他にない１層があり、これを含め５層に区分する。①層は現代の耕作土、②層は灰黒色土で中世の遺物が含まれる。③層は黒色土で奈良時代の遺物が含まれる。④層は黄灰色土で、縄文時代の川跡の埋土であるが遺物は含まれない。⑤層は黒色土で縄文時代後期の土器が含まれる。奈良時代の遺構は、④層・⑤層を地山面としている。



第３図　３地区の基本層序

(2)遺構（第８～11図、付図１）

縄文時代後期の川跡、奈良時代の掘立柱建物６・土坑２・溝１・穴、中世の溝２、明治時代以降の溝・土坑などある。

A．縄文時代の川跡と土器集中区（第11図、図版３・４）

川跡は、調査区中央東側から流れ込み、調査区中央で北へ流れを変え北流する。幅は約７ｍ深さ約50cmである。川底近くから後期前葉の縄文土器が出土した。調査区北側の左岸は地山が礫層で微高地となっている。その西側・南側から、微高地をとりまくように縄文土器が出土した。微高地には風倒木痕があり、そのなかからも縄文土器が出土した。縄文時代の遺構は残っていないが、この微高地上に住居などの遺構があった可能性が高い。後世の削平で失われたものであろう。

B．奈良時代

掘立柱建物（第２表、第４・８～10図、図版３・４）

ＳＢ01～06の６棟があり、調査区全体に広がる。建物の棟方向はほぼ南北にあるが、真北に対して３～22度の幅で西へふれている。建物の形態から、ＳＢ01～04・06は土間の住居、ＳＢ05は高床倉庫にあたると推定される。

ＳＢ01（第８図上、図版３）

建物群の中央にある３間（6.6ｍ）×２間（4.7ｍ）の南北棟建物である。床面積は約31㎡で、６棟の建物の中で最も広い。柱間寸法は桁行梁行とも平均2.2ｍであるが、ばらつきが大きい。妻側の中柱にあたるＰ５・Ｐ６は外へ飛び出ている。Ｐ６は棟通りより西側へ寄っている。また建物中央には、Ｐ５に対応するようにＰ28、Ｐ６に対応するようにＰ29がある。そのようなことから、この建物は南側へ１間拡張されたか、あるいは間仕切りがあったことが想定される。

柱穴の掘方は30～40cmの丸いもので、深さは20～30cmである。柱は残っていないが、柱穴の土層の違いから柱の太さは直径16cmほどであったと推定できる。遺物は、Ｐ７から鉄滓が出土した。

ＳＢ02（第９図上、図版４）

建物群中央にある２間（4.8ｍ）×２間（3.9ｍ）の南北棟建物である。床面積は約19㎡である。柱間寸法は梁行２ｍであるが、桁行は３ｍと1.8ｍで北側の柱間が長い。北妻側の中柱にあたるＰ４は外へ飛び出している。

柱穴の掘方は25～30cmの丸いもので、深さは10cm前後である。柱は残っていないが、柱穴の土層の違いから柱の太さは10～20cmほどであったと推定できる。この建物の西側に1.5ｍの間隔を置いてＳＫ04がある。その主軸が建物とほぼ同じで並んでおり、相互に関連のある遺構とみられる。ＳＫ04の出土遺物には、煮炊き用の土師器甕・鍋などが多く、建物に伴う煮炊き場にあたるものと推定される。遺物は、柱穴から出土しなかった。

ＳＢ03（第８図下、図版４）

建物群中央にある２間（4.4ｍ）×２間（3.4ｍ）の南北棟建物である。床面積は約15㎡である。柱間寸法は桁行2.2ｍ梁行1.7ｍである。

柱穴の掘方は30～40cmの丸いもので、深さは10～40cmである。地山が西側へ傾斜しているので西側柱列の残りが悪く、北西角の柱穴は検出できなかった。柱は残っていないが、柱穴の土層の違いから柱の太さは16cmほどであったと推定できる。遺物は、Ｐ６から土師器片が出土した。

ＳＢ04（第９図下、図版４）

建物群中央にある２間（４ｍ）×２間（2.9ｍ）の南北棟建物である。床面積は約12㎡で建物のなかで最も狭い。柱間寸法は桁行2.2ｍと1.8ｍ梁行1.5ｍと1.4ｍでばらつきが大きい。

柱穴の掘方は30～50cmの丸いもので、深さは５～35cmである。柱は残っていないが、柱穴の土層の違いから柱の太さは径16cmでやや方形であったかもしれない。

この建物の東側1.5ｍに直径約20cmの３本の柱（Ｐ７・Ｐ８・Ｐ９）が並んでいる。柱間寸法は北側が1.4ｍ南側2.2ｍ深さ５～20cmで不揃いであるが、柵であるかもしれない。遺物は、Ｐ５とＰ６に接するＰ11から土師器甕が出土し

た。

ＳＢ05（第10図上、図版１）

建物群の南端にある。西側が明治時代以降の排水路で破壊されているが、２間（4.4ｍ）×２間（3.6ｍ）の南北棟建物である。建物中央にも柱穴があり総柱構造である。高床倉庫になるものであろう。床面積は約16㎡である。柱間寸法は桁行2.2ｍ梁行２ｍと1.6ｍである。

柱穴の掘方は長辺0.9～１ｍ短辺0.6～0.9ｍの方形であるが、南側中柱のＰ６だけは直径0.6ｍのやや丸くて小型の柱穴となっている。柱穴の深さは30～45cmである。柱は残っていないが、柱穴の土層の違いから柱の太さは直径25～30cmほどであったと推定できる。

この建物の北西角にＳＫ01がある。この土坑は長軸が東西にあって建物とはややずれているが、柱穴とは直接重なっていないことや、出土遺物に炭化米が多く含まれていたことなどから、関連する遺構と考えられる。遺物は、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ５・Ｐ６から土師器甕が出土した。

ＳＢ06（第10図下、図版３）

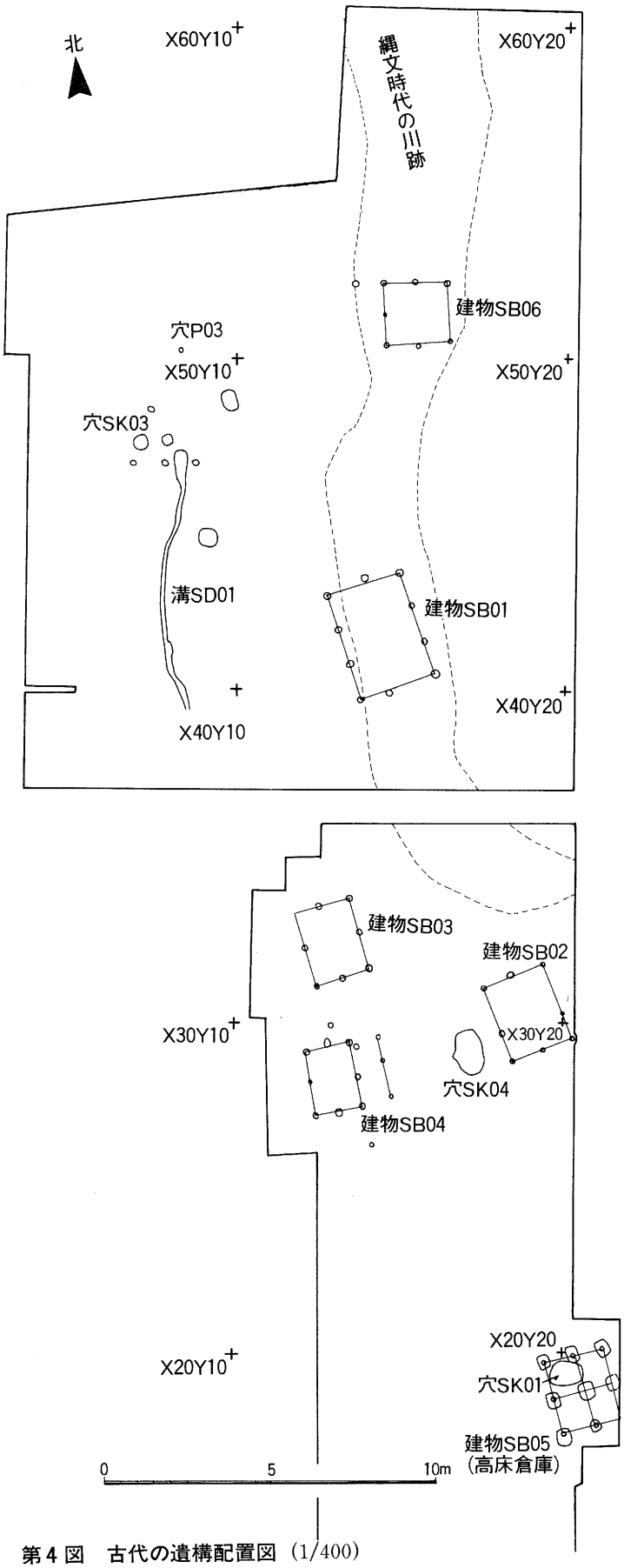
建物群の北端にある２間（3.6ｍ）×２間（3.9ｍ）の南北棟建物である。床面積は約14㎡である。柱間寸法は、桁行1.8ｍ梁行1.9ｍである。梁行が桁行より少し長いが、南妻側の中柱にあたるＰ５は外へ飛び出しているので、棟は南北であったと考える。柱穴の掘方は20～30cmの丸いもので、深さは５～20cmである。柱は残っていないが、柱穴の大きさから柱の太さは10～15cmほどであったと推定できる。東側桁行の中柱は検出できなかった。遺物は、Ｐ３から土師器片が出土した。

土坑（第８～10図、図版１・４・５）

出土遺物や覆土から古代の土坑とみられるものは、ＳＫ01～04である。

ＳＫ01（第10図上、図版１・５）

ＳＢ05と重なってある長辺約２ｍ短辺約１ｍ深さ約30cmの土坑である。隅丸長方形で壁面の立ち上がりは急である。周囲に径20～50cmの柱穴（Ｐ13・14・16・30・31）がとりまいている。この柱穴についてはＳＢ05に関連することも考えられるが柱並びが異なり、土坑に伴うものかもしれない。覆土には、中間に焼土・炭の土層を含む。



第４図　古代の遺構配置図（1/400）

遺物は、土師器の甕、須恵器の杯・杯蓋・甕、土製勾玉、炭化米、ヒョウタン・マクワウリその他の種子がある。土製勾玉は、この土坑と高床倉庫が廃棄された時に、祭祀が行われたことを推測させる。

ＳＫ02（第９図）

調査区北側西寄りにある。長辺1.2ｍ短辺0.9ｍ深さ10cmの長円形の土坑である。そのなかには長さ10～20cmの川原石が９個入っていた。遺物は土師器片が出土した。

ＳＫ03とその周辺の柱穴（第８図中央、図版５）

調査区北側西寄りにある長辺85cm短辺80cm深さ20cmの隅丸方形の土坑である。覆土には焼土・炭化物が多く混じっていた。遺物は出土していないが、覆土の感じから奈良時代の土坑と考える。この土坑の周囲には、Ｐ１・３・23～26の柱穴がある。

Ｐ１はＳＫ03の北側に隣接する径40cmの穴で、なかから土師器の甕・内黒土師器蓋が出土した。Ｐ３はＳＫ03の北約５ｍのところにある径約30cmの穴で、その中から土師器小型甕の底部が出土した。その他の穴から遺物は出土しなかった。Ｐ26は径45cm深さ60cmの穴でＳＫ03の東に隣接する。Ｐ23～25は径30cm深さ20～40cmの柱穴で、ＳＫ03の南側に東西に並んでいる。その長さは3.9ｍ柱間寸法は1.95ｍである。この柱列はＳＫ03を囲む柵のようである。このようなことから、ＳＫ03の周辺では奈良時代において、なんらかの施設があったことが推測される。

ＳＫ04（第９図、図版４・５）

ＳＢ02の西側に並ぶ長辺2.7ｍ短辺1.6ｍ深さ20cmの土坑である。隅丸長方形で、壁面は残りが悪いが、壁面の立ち上がりは急であるらしい。南東隅に白色粘土のかたまりがあった。床面中央北寄りに径20cm深さ18cmの柱穴状の穴があったが、覆土の色が縄文時代の土層に近いのでこの土坑に伴うものとは考えられない。それ以外に周囲に柱穴は見あたらない。

遺物は、縄文土器、土師器の鍋・小型甕、須恵器の杯・杯蓋、炭化米、マクワウリの種子、クルミ殻、馬のものと思われる歯、焼けた骨などが出土した。

ＳＤ04（第８図下、図版３）

ＳＫ03を中心とする遺構群から、南にのびる幅30～60cm深さ15～20cmの溝である。ＳＫ03付近で行われた作業に伴う排水溝とみられる。遺物は土師器片が出土した。

Ｃ．中世

中世の遺物は多いが、遺構としては溝２（ＳＤ02・07）がある。

ＳＤ07

古代の掘立柱建物ＳＢ05の北側にある幅20cm深さ５cmの溝である。溝は東から西にのびて途中でとぎれる。調査区東方に中世の遺構が多いのかもしれない。遺物は土師質小皿片が出土した。

第２表　古代建物計測表

遺構名	桁行方位	柱間数 桁×梁	規模 m 桁×梁（尺）	柱間（m）		平面積	棟方向
				桁	梁		
ＳＢ０１	Ｎ－19°－Ｗ	３×２	6.6×4.7 (22)	2.2+2.3+2.1	2.2+2.5	31.02m²	南北棟
０２	Ｎ－22°－Ｗ	２×２	4.8×3.9 (16)	3.0+1.8	2.0+1.9	18.72m²	〃
０３	Ｎ－16°－Ｗ	２×２	4.4×3.4	2.1+1.8	1.7+1.7	14.96m²	〃
０４	Ｎ－11°－Ｗ	２×２	4.0×2.9	2.2+1.8	1.5+1.4	11.6m²	〃
０５	Ｎ－15°－Ｗ	２×２	4.4×3.6 （総柱）	2.2+2.2	1.6+2.0	15.84m²	〃
０６	Ｎ－３°－Ｗ	２×２	3.9×3.6	1.8+1.8	1.9+1.9	14.04m²	〃

ＳＤ02（付図１）

調査区南端西寄りにある幅1.5ｍ深さ10cmの溝である。溝は南から北へ流れる。現代の溝ＳＤ03と重なりがあり、近世遺物の混入があるが、遺物は16世紀代の珠洲すり鉢や木製品が出土している。

Ｄ　その他（付図１）

昭和初期に行われたほ場整備前の用排水路（ＳＤ01・03）、土坑（ＳＫ05）、井戸（ＳＥ01）など、明治時代以降の穴や溝がある。

(3)遺物（第17～22図、図版13～16）

縄文時代後期・晩期、奈良時代、中世のものが整理箱（長さ65cm幅40cm深さ10cm、以下同じ）で約60箱ある。

Ａ　縄文時代（第17・18図、図版13）

縄文土器・打製石斧・削器がある。

縄文土器（１～19）　１は肥圧した口縁部に斜めの沈線が巡る深鉢である。胴部は縦縄文を施す。２は口縁部が内湾する浅鉢である。胴部には磨消縄文がある。磨消縄文は、二本の沈線で作る帯状の区画内に縄文を残す。３は胴部がそろばん玉の形をした注口土器である。胴上部に注口とその反対側に把手が付くものとみられる。把手の周りを３条の弧状沈線がとりまく。４は胴部が膨らんだ深鉢である。口縁部を欠くが外反するものとみられる。頸部と胴部４か所に刻みつけた隆起線がある。隆起線の交点には８の字状貼り付け文とみられる隆起体がある。また胴部には縄文地に３条を１単位とした沈線で、８の字状の文様や平行線が描いてある。５は深鉢とみられる。胴部に平行沈線が巡り、それを孤状沈線が上下につないでいる。６・15・16は無文の深鉢である。８・９は口縁部に縄文帯がある深鉢である。９は羽状縄文である。10～13・17～19は胴部に縄文のある深鉢である。10・12は口唇部にも縄文があり、11～13の口縁部内面には指頭圧痕のような刻みが巡る。７・14は外面に条痕文とみられる擦痕・砂粒の移動がある深鉢である。14は口縁部が外反する。15は胴部中央で屈曲する深鉢である。屈曲部に細い沈線が巡る。以上の土器は、15・20は後期後葉（八日市新保式・井口第Ⅳ期）、６・７・14は晩期中葉（中屋式）にあたると考えられるが、その他は後期前葉（気屋式）であろう。気屋式の分布は調査区北側に集中している。

気屋式については、米沢義光氏が古段階のⅠ式と新段階のⅡ式に区分する考えを示している。Ⅰ式は三角形連続刺突文、幾何学的な文様などをおもな特徴とする段階、気屋Ⅱ式は堀之内Ⅱ式が伴う段階としている〔米沢1989〕。近年福野町安居五百歩遺跡で気屋式の土器群が発掘されたが、調査者である山本正敏氏は、その土器群を気屋Ⅰ式（新段階のⅠｂ式）の良好な一括資料として報告している〔福野町教委1990〕。当遺跡の土器群は、三角形連続刺突文のものがなく、幾何学的な文様ではなく８の字状の文様である。８字状の貼り付け文は、関東の堀之内Ⅱ式の特徴とされる〔西田1989〕。そのようなことから、当遺跡の気屋式土器群は、米沢氏のいう気屋Ⅱ式の段階にあたると考えられる。

石器（21～29）　打製石斧13点、削器１点がある。打製石斧は砂岩・花崗岩・泥岩の石材を用いており、砂岩が多い。片面あるいは両面に川原石であったときの自然面が残る。形態は基部にくらべ刃部が広い撥形で、28のように側辺部の湾曲が強いものがある。基部や刃部を欠くものが多く、側辺部に着柄のためとみられる敲打があるものが多い。刃部に使用痕とみられる擦痕や摩滅がある。そのようなことから、石斧はこの場所で使われ廃棄されたものと推定される。刃部の刃縁は湾曲しており、刃幅は4.5～10cmで一定していない。出土場所は調査区全体にわたるが、X21・22Y19・20からは22・25など４点がまとまって出土した。このあたりでは６・14の晩期の土器が出土していることから、その時期であろう。

削器29は鉄石英のものである。長さ13cmの菱形をしており、石槍のようにみえるが、表面は自然面、裏面は剥離面のままである。先端部左側辺に細かな剥離がある。

B　奈良時代（第18・19・20・22図、図版14～16）

須恵器・土師器・土錘・土製勾玉・鉄滓・自然遺物がある。自然遺物はＳＫ01・04の覆土を水洗して得た。

ＳＫ01（30～40・152）

須恵器の杯蓋・高台杯・甕41、土師器の甕・小型甕・鍋か甑の把手55、土製勾玉、炭化米・ヒョウタン・マクワウリの種子がある。杯蓋30～32は口縁端部が三角に尖るものである。高台杯33は高台が外側へ張り出す。土師器甕34・35小型甕37～40は胴部内外面ハケ目で、甕の口縁端部は角張るが、小型甕は丸い。小型甕の底部は平底である。土製勾玉152は長さ2.8cm、穴は無いがノ字状の形態から勾玉と考える。X16Y18の包含層からも長さ4.6cmの153が出土した。炭化米は約50粒がある。完全なものを測ると幅２～3.1mm長さ４～5.1mm長幅比の平均1.73の短粒米である。

ＳＫ04（42～51）

須恵器の杯蓋・杯・高台杯、土師器の小型甕・甕・鍋、炭化米、マクワウリの種子、クルミ殻、馬のものと思われる歯（図版16上）、焼けた骨がある。杯蓋42は口縁端部が三角に尖るものである。偏平なつまみがつく。内面にはつの字状のヘラ記号がある。杯43は底部と体部の境は丸い。杯44は底部を欠くが高台杯とみられる。土師器小型甕45～48甕49・50は胴部外面上半と内面はハケ目、胴部下半はヘラケズリである。小型甕は口縁部が短く外反し端部は丸い。甕は口縁部が外反し、端部はやや丸い49と三角に尖る50がある。小型甕の底部は平底の48とやや丸みがかった47がある。鍋51は胴部が丸底で、胴部外面上半と内面はハケ目胴部外面下半はヘラケズリである。口縁部は強く外反し端部は三角に尖る。炭化米は２粒が出土した。詳述できないが、ＳＫ01・04の須恵器・土師器は、東江上遺跡や長岡杉林遺跡に類例があり、８世紀第一四半期（平城宮Ｉ段階）にあたるものと考える〔上市町教委1982・富山市教委1987〕。

その他の遺構と包含層（52～88）

ＳＢ05Ｐ２から土師器の小型甕52・口縁端部が角張る甕53、Ｐ１から土師器甕54・内面黒色の土師器杯蓋55、Ｐ３から土師器小型甕56、ＳＢ01Ｐ７から鉄滓162、砥石169が出土した。包含層からは、須恵器の杯蓋57～62・杯63～66高台杯67～73・壺74～76・甕77・78、土師器の高杯79・高台杯80・甕81・82・小型甕83～86、接合痕を残す厚手土師器87・88、土製勾玉153、土錘154・155が出土した。杯蓋は口縁端部が短く立つ57・58、細長く伸びる60・61、角張る59、突出しない62がある。杯には底部が湾曲し体部の立ち上がりが急な64、底部が平坦で体部との境が角張る66がある。59・62・66は奈良時代後半に下るものであろう。高台杯は高台が外へ張り出す67・68・70・71、下を向く69・72・73がある。底部と体部の境が角張る73は奈良後半に下るものであろう。74は長頸壺の口縁部、75はその底部である。土師器の高杯79・高台杯80は内黒土器である。80は平安時代末のものかもしれない。87・88は粘土接合痕をとどめる厚手の土器である。平底の製塩土器と呼ばれるものに似ている。88はかまどで甕の底を支える土製支脚であろう。88はＳＫ04付近から出土した。土錘は太さ1.6cmの細長い154と４cmの太い155がある。砥石169は凝灰岩製で細く深い研ぎ溝がある。ＳＢ01付近から出土した。鉄滓161もそのあたりから出土しており、ＳＢ01で鉄器の加工が行われていたことが推測できる。

B　中世（第20～22図、図版15・16）

調査区南側を中心として、土師質小皿、珠洲、越前、瀬戸美濃、青磁、白磁、瓦器火鉢、瓦器香炉、小柄、銭、土鈴、木製品などがある。ほとんどが包含層からの出土である。調査区東側に遺構があり、そこから流れ込んだものと推定される。

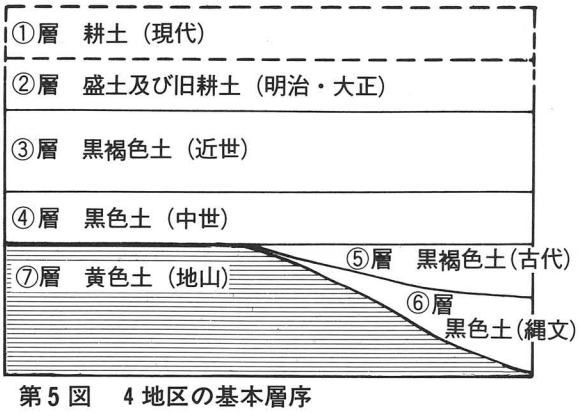
土師質小皿は、底部ナデで口縁部が内湾する89～91・95・97～99（１類）、底部ナデで口縁部がやや外反する93・94（２類）、底部ナデで口縁部が大きく外反する100～104（４類）、底部糸切りの96がある。１類は梅原胡摩堂遺跡Ａ地区に類例があり13世紀、２類は薮田薬師中世墓に類例があり14・15世紀、４類は井口城や弓庄城跡に類例があり15・16世紀のものと考える〔富文振1990・氷見市教委1985・上市町教委1985・井口村教委1990〕。珠洲はすり鉢・甕・小型壺があり、すり鉢は口縁部が角張る105～108（珠洲編年第Ⅲ期・13世紀）、肥厚する109～112（同第Ⅳ期14世

紀）、肥厚部が内傾し櫛描をするものがある113～116（同第Ⅴ期15・16世紀）がある。珠洲甕はやや角張る117～119（同第Ⅲ・Ⅳ期）、丸い120～122（同第Ⅴ期）がある。127は越前甕の底部である。瀬戸美濃は、灰釉碗128・129・134・瓶子130・灰釉おろし皿131・132・灰釉香炉133・鉄釉天目茶碗135～137・灰釉皿138がある。139は黒釉天目茶碗の底部であるが、胎土が黒灰色であることから中国製と思われる。これらは15世紀から16世紀にかけてのものとみる。青磁は、内面に文様がある碗140、外面に蓮華文のある141・142・145、その他の碗143・144・146・148、口縁部が外反する皿147・149、香炉150がある。151は白磁皿である。青磁140は13世紀、141は13～14世紀、その他は15～16世紀代とみる。156は土鈴、157は方形の土製品で穴が通っている。158は瓦器の香炉、159は瓦器の火鉢である。160は小柄で銅製の柄、163～168は北宋銭で、景徳元寶２枚、天聖元寶１枚、熙寧元寶１枚、元祐通寶１枚、政和通寶１枚がある。木製品は、箸170、曲物底板171・172、栓または把手とみられる173がある。

４　４地区の概要

(1)地形と層序（第５図）

４地区は南北に細長い調査区である。現況は南端は海抜約69.6ｍ北端は海抜約67.3ｍで北へ向かってゆるやかに傾斜しているが、調査の結果、かっては調査区を南南東から北北西へ向かう川があったことがわかった。そのため、遺構は北部と南部で発見された。南北に長いため場所により異なるところがあるが、地表から黄色土の地山面までの深さは30～100cmで、その間は大きく６層にわかれる。①層は現代の耕作土、②層はほ場整備前の耕作土と盛土、③層は灰黒色土で江戸時代の堆積と考えられる。④層は黒色土で中世の遺物が含まれる。⑤層は黒色土で古代の堆積とみられる。⑥層は黒色土で縄文時代の堆積とみられる。⑤層・⑥層は川の中に堆積しているもので、遺構が発見される高台では認められない。



第５図　４地区の基本層序

(2)遺構（第12～14図、図版６～９）

北部では、中世の掘立柱建物１・道路１・溝５・噴砂１などがある。南部では、縄文時代の穴１、中世の溝４・土坑・柱穴などがある。

Ａ　北部の遺構（第12・13図）

ＳＤ01・02・03（第12図、図版６～９）

ＳＤ01・02はいずれも幅約50cm深さ10～15cmで約40cmの間隔をおいて北から南へゆるやかに蛇行しながら並走している。ＳＤ03は幅約40cm深さ３cmで残りが悪い。ＳＤ01から土師質小皿片、ＳＤ02から須恵器杯、ＳＤ03から高台杯が出土した。出土遺物から13世紀の遺構と推測される。

ＳＢ01（第12図、図版７・８）

ＳＢ01は西側の端が不明であるが、南北の柱間間隔が長いことなどから４間（9.5ｍ）×４間（8.8ｍ）の南北棟建物と考える。床面積は約84㎡である。棟方向は真北に対して10度東へふれている。建物の内側にも１間ごとに柱があり総柱構造である。柱間寸法は梁行が東から２ｍ・2.4ｍ・2.4ｍで、不明な一間は２ｍと推定される。桁行は南から２ｍ・2.9ｍ・2.6ｍ・２ｍである。外側の柱間寸法は２ｍと狭い。また外周りの柱穴が径30～40cm深さ約20cmと浅いのに対し、建物内側の６本は40～50cmと一回り大きく深さも50～70cmと深い。このようなことから、内側の２間×２間は身舎、周りの１間は庇部分にあたると推定される。Ｐ１・２・３の上が棟通りとなるであろう。建物の南にＰ10～16からなる柱穴がある。建物であれば２間（2.8ｍ）×２間（4.6ｍ）の東西棟が復元される。庇部分で重なる

が建物の軸は同じであることから、ＳＢ01に付属するものであろう。Ｐ３とＰ６東の柱穴には柱根が残っていた。Ｐ３の柱は残りが悪いがＰ６東の柱は長辺10cm短辺８cmの針葉樹の角材である。柱穴の土層の観察では一辺15～20cmの柱が使われていたものと推定できる。

遺物はＰ１から須恵器杯・糸切り痕のある土師器片、Ｐ４・５・10～12から土師質小皿、Ｐ10から砥石が出土した。建物の時期は、ＳＤ01・02が埋まった後から建てられていること、柱穴の出土土器が13～15世紀代であること、包含層④層上面から16世紀の土器が出土することなどから、14世紀後半から15世紀前半であったと推測する。

噴砂（第12図、図版９）

ＳＢ01の北で、東西方向に幅約１cmの黄色砂の吹き出しが認められた。砂は地山面から深さ約30cmの地層に含まれているものである。噴砂は鎌倉時代の溝を割り、中世の包含層を突き抜け江戸時代の堆積層の下で止まっている。

道路跡（第13図、図版６・７）

ＳＢ01の南方約40ｍのところで発見されたが、その北への進路は道の西側が川跡であることから、ＳＢ01の西側をかすめるように通っていたと思われる。道路は、北東から南西へ緩やかに傾斜するところにある。道の西側は川跡であり遺構も認められないことから、生活立地としては適さない湿地であり、道路はその境に設けられたものと考えられる。道路面は、地形が高い方で約10cmほどの段をなすほど削り幅約３ｍの平担面とし、その上に厚さ約15cmの砂を盛り上げてある。地形が高い方は幅約30cm深さ約20cm、低い方で幅約20cm深さ10～20cmの側溝があり、実際の道路面は2.1ｍ前後であったものと考える。砂の盛土を取り除くと削平面には進行方向に直交して幅30～50cm長さ1.5～２ｍ深さ５～10cmの溝が20cmほど間隔をおいて並ぶ。溝の中には路面の盛土と同じ砂が詰まっていた。砂は黄色であるが、道路表面はやや黒く、溝の中は青くなっている。溝は調査区北側で認められるが、南端にはない。砂の盛土も南側では少ないようである。道路面の高さは南から北へ向かって20cmほど下がっている。またゆるやかであるが、蛇行している。側溝・盛土・路床の溝から出土遺物はなく、道路の作られた時期を直接知る手がかりはないが、道路面の上を覆う土層から16世紀代の遺物が出土しており、それが道路の上に重なるＳＤ20の関連遺物と考えられることから、その頃には道路として使われていなかったことがわかる。路床の溝は古代の道路でしばしば認められるものであるが、道路周辺から古代の遺物は出土していない。ＳＢ01のそばを通ることなどから、14・15世紀に使われていたものと推定する。

Ｂ　南部の遺構（第14図、図版８・９）

ＳＤ10～13・15、ＳＫ01・02、Ｐ５・６などがある。ＳＤ10は幅約70～100cm深さ10～15cmで南北に伸びる。南側でＳＤ11と合流するものと思われる。溝底は高低差は少ないがＳＤ11から北へ流れる水路と考えられる。ＳＤ11は東西幅約5.8ｍ深さ3.6ｍの大溝である。東側で南にＬ字に曲がるらしい。堀の一隅にあたるかもしれない。ＳＤ12・13はその南側に約１ｍの間隔をおいて並走する溝である。いずれも幅約50cm深さ５～15cmである。この溝の南側に柱穴とみられる穴や土坑がある。Ｐ５は径30cm深さ30cmで、その覆土は径15cmの柱根跡とみられる黒褐色土をその埋土とみられる黄灰色がとりまいていた。しかしそのまわりに対応する柱は見つからず建物を復元できない。ＳＫ01は幅60cm長さ1.6ｍであるが深さ３cmで残りが悪い。遺物はＳＤ12･13付近の包含層から13世紀とみられる土師質小皿が出土しているだけであるが、その頃の屋敷がこのあたりにあったことが推定できる。Ｐ６は径約30cm深さ10cmの穴である。中から縄文の深鉢底部が出土した。後期と思われる。この南にも多くの穴があるが、性格は不明である。

(3)遺物（第23～26図、図版16～18）

縄文時代中期・後期、奈良時代、中世のものが整理箱で21箱ある。

Ａ　縄文時代（第23図、図版16）

縄文土器174～180・打製石斧181～184がある。174は中期中葉（古府式）の深鉢、175・176は後期中葉の浅鉢と注口

土器か、178は凹線文があり後期後葉（井口式）である。出土は散発的である。

B　奈良時代（第23・24図、図版17）

須恵器185～206・土師器207～222がある。須恵器は杯蓋185～187・杯188～192・高台杯193～201・壺202～205・横瓶206がある。土師器は碗207・甕208・211～219・小型甕209・210・220・甑221・鍋222がある。須恵器杯蓋は口縁端部が角張るもの、土師器甕・鍋は口縁端部が角張るものとやや立つものがあり、その時期は８世紀後半である。奈良時代の土器は全体に出土するが、Ｘ６～34区に比較的多く、その西側に古代集落が存在する可能性が高い。

C　中世（第24～26図、図版17）

ＳＢ01とその周辺（223～259）

土師質小皿223～250、珠洲254～258、越前259、瀬戸美濃251・252、白磁253、砥石260・261がある。土師質小皿は、高台のつく234・235・238・245・246・250（１類）、底部ナデで口縁部が内湾ぎみの227・230・236・237・241～243（２類）、底部ナデで口縁部が外反ぎみの223・226・233・244（３類）、口縁部が大きく外反し端部で少し屈曲する248・249（４類）、底部糸切りで碗形の224・225・239・240（５類）、底部糸切りで外反度の強い228・231・232・247（６類）、小壺型の229（７類）がある。１・２類は13世紀、３類は14・15世紀、４類は15・16世紀のものと考える。ＳＢ01の柱穴から出土した土師質小皿は、４類を除いてすべてあり、このうち１・２類はＰ８（236・237）、ＳＤ03（238）などＳＢ01以前の遺構に伴う土器と考える。珠洲の甕254・すり鉢258、白磁碗253も同様である。珠洲壺255、越前のすり鉢259、瀬戸美濃の灰釉皿251・252は15・16世紀とみる。

道路跡周辺（262～296）

土師質小皿262～265・珠洲のすり鉢266・267・273・壺269～272、瀬戸美濃灰釉瓶子274、土師質すり鉢268、白磁碗275、青花（中国製染付）276がある。土師質小皿は２類（262）、３類（263）、４類（264・265）がある。珠洲はすり鉢266・壺269は13世紀、すり鉢267・273は16世紀、白磁碗275と青花碗は16世紀とみる。13世紀と16世紀の遺物が多い。

ＳＤ11周辺（277～280）

土師質小皿（277～280）があり２類（277）、３類（278）、１類（280）がある。

その他の包含層（281～315）

土師質小皿281～297、瀬戸美濃碗298～301、青磁碗302、白磁皿303、珠洲甕304～306・309・すり鉢307・308・311～314、越前甕315がある。瀬戸美濃碗は灰釉の298～300、鉄釉の301がある。越前甕315は胴部に格子目の押印がある。

５　５地区の概要

(1)地形と層序

５地区は南北に細長い調査区である。現況は南端は海抜約69.5ｍ北端は約67ｍで北へ向かってゆるやかに傾斜している。南北に長いため場所により異なるが、地表から黄色土の地山面までの深さは20～50cmで、その間は大きく３層にわかれる。①層は現代の耕作土約20cm、②層は黒褐色で江戸時代の堆積と考えられる。③層は黒色土で中世の遺物が含まれる。③層は４地区道路跡付近の調査区で残っているが、その他の地区ではほとんど認められない。調査区の地山面は全体に平坦で川跡などはなかった。

(2)遺構（第15・16図）

調査区南部と中央西部で、中世の掘立柱建物とみられる柱穴列２・土坑２・溝５・道路跡１が発見された。北側では江戸時代末から現代までの穴・井戸・用排水路がある。

南部の遺構（第15・16図、図版10・11）

柱穴列２（Ｐ５～８・Ｐ15～17）、溝３（ＳＤ07・15・16）、土坑２（ＳＫ04・05）がある。柱穴列は、いずれも調査

区南側にある。Ｐ５～８は深さも柱間寸法もバラバラであるので建物の柱穴にはならないが、このあたりに柱穴状の穴がまとまっている。Ｐ５～８はいずれも径約40cm深さ20cm前後の穴である。掘立柱建物であるとすると、柱間寸法は３ｍと3.1ｍで、一般的な大きさとくらべ長いから桁行にあたるかもしれない。西側で対応する柱穴を探したがみつからないので、東側の道路下にあるのであろう。ＳＤ07は、幅約50cm深さ30cmでほぼ東西方向の溝で、北端は浅くなってとぎれる。ＳＤ15は、Ｐ15～17の北側にある幅約３ｍ深さ約50cmの東西方向の大溝である。ＳＤ16はＰ５～８の北側にある幅1.1ｍ深さ20cmの東西方向の溝である。ＳＫ04はＳＤ15の北にある一辺約1.3ｍ深さ約30cmの方形の土坑である。ＳＫ05はＰ５～８の西に一辺約70cm深さ20cmの方形土坑である。南側の遺構はＳＤ07・15・ＳＫ04から鎌倉時代の土師質小皿が出土したことから、その時期につくられたものとみられる。ＳＤ15は、その南側に柱穴列があることから、屋敷の北側を画する堀の可能性がある。

中央西側の遺構（第16図、図版10）

道路跡１、溝２（ＳＤ03・04）がある。道路跡は、４地区の道路跡の南側の延長にあたるところで、つながる道である。道路は幅約２ｍにわたって厚さ約６cmの砂の盛土があった。側溝や路床の溝はないが、地山は硬く締まっている。ＳＤ03は道路跡の東にある幅70cm深さ20cmの溝で道路跡と並走するが関連は不明である。ＳＤ04は道路跡の西にある幅１～1.5ｍ深さ20cmの溝で、４地区で道路跡の上に重なっているＳＤ20と同じ溝である。16世紀の遺物が出土した。

(3)遺物（第27図、図版18）

縄文時代後期、古墳時代、奈良時代、中世、近世のものが、整理箱で７箱出土した。

Ａ　縄文時代

縄文土器316～320・打製石斧321がある。316は口縁部と胴部に２条の沈線が巡る深鉢、317は楕円圧痕と凹線文がある深鉢、319は外面縄文、口縁部内側に楕円圧痕を連続させる深鉢である。いずれも井口遺跡に類例があり、後期後葉である〔井口村教委1980〕。318は２条の沈続間に縦沈線を連続させる深鉢である。本郷広野新遺跡に類例があり、後期後葉とみる〔滑川市1979〕。320は縄文の深鉢である。縄文時代の遺物は調査区全体に散在する。

Ｂ　古墳時代

土師器碗322がある。口縁部は内湾、内面は黒色である。内湾器形の碗は、若宮Ａ遺跡や辻坂の上遺跡で類例があり、５世紀後半のものと考えられる〔県教委1984〕。Ｘ61Ｙ70から出土した。

Ｃ　奈良時代

須恵器の杯蓋323・324がある。323の口縁端部は角張るので、８世紀後半とみる。調査区北側で出土した。

Ｄ　中世・近世

珠洲の甕335・336・甕か壺の胴部337～340・すり鉢341、土師質小皿325～334、羽釜342、土師質鉢343（４地区出土である。訂正する）、青磁碗344、白磁碗345、瀬戸美濃鉄釉天目茶碗346、越中瀬戸皿347、唐津皿348、永楽通寶349がある。珠洲は335・341が珠洲編年第Ⅲ期（13世紀後半）、336が珠洲編年第Ⅴ期（15世紀）である。341はＳＤ15の所の包含層から出土した。土師質小皿は、高台のある325・326（１類）、口縁端部が内屈する327・328・331（２類）、口縁部がやや外反する330・332・333（３類）、口縁部が大きく外へ開く329・334（４類）がある。１・２類は13世紀、３類は14世紀、４類は15・16世紀と考えられる。羽釜342は土師質で内外面に刷毛目がある。調査区北側の近代の溝ＳＤ05の混入であるが、珠洲335と一緒に出土しており13世紀のものと推定される。土師質鉢343は外面にカキ目がある。青磁碗344は蓮華文がある。瀬戸美濃鉄釉天目茶碗346は、口縁部でくびれる。唐津皿348は内面に灰色釉がかかり黒色の文様と胎土目がある。越中瀬戸皿・唐津皿は江戸時代前期とみられる。

土師質小皿325・327・331はＳＫ04から、土師質小皿328・333はＳＤ07から出土した。４類はＳＤ04とその付近から出土した。土師質小皿329・永楽通寶349はＳＤ04から出土した。

（久々忠義）

Ⅳ　まとめ

1　縄文時代中期・後期・晩期、古墳時代中期、奈良時代、中世の遺物が出土し、縄文時代後期の川跡、奈良時代の集落跡、中世の用水路・住居跡・道路跡が発見された。３地区の縄文時代後期の川跡と４地区の川跡は、遺跡のある一帯が中世までは大井川が氾濫していて、川の中に島状の微高地が点在する複雑な地形であったことを物語る。古代・中世の住居はそのような微高地上に立地する。

2　３地区では、縄文時代後期前葉（気屋式）の土器群が出土した。土器群は、口縁部に斜めの沈線を巡らす深鉢、胴部に８の字状の文様がある深鉢、帯状の磨消縄文のある内湾する浅鉢、注口土器などからなる。関東の堀之内Ⅱ式に併行するとされる気屋Ⅱ式の土器組成を知るうえでよい資料である。

3　３地区では、奈良時代の掘立柱建物群が発見された。また梅原地区では、これまでの調査でも多くの古代遺物が出土している。平城宮跡出土木簡に記載されている利波郡川上里や「和名抄」に記載がある川上郷は、小矢部川上流域に推定されているが、梅原地区はその中心地と考えられる。「越中国官倉納穀交替記」によれば、川上村には不動倉があったことがわかる。梅原地区周辺に存在したことが予想され、その発見が今後の課題である。

4　３地区の掘立柱建物群は、住居と考える側柱建物５棟と、高床倉庫と考える総柱建物１棟がある。側柱建物は床面積約30㎡の大型と、床面積12～18㎡の小型があるが、これまでに北陸で発掘された古代建物のなかでは最も小さい。土器は、食器である杯・杯蓋が18点、煮炊き・貯蔵用の甕・鍋が19点で、その比率がほぼ同じである（官衙遺跡では煮炊き用具が少ないといわれる）。そのようなことから、建物群は一般的な集落であり、建物床面積から居住人員を推定すると27～30人となる。古代の家族については、戸籍などから郷戸と呼ばれる複数家族の集合体で、その平均人数は25人ほどであったといわれており、ほぼそれに合う。大型の建物は戸主の家で、そこでは鉄器が管理されていたらしい。小型の建物付近には、煮炊きを行った土坑がある。土坑のなかから、クルミ・マクワウリ・ヒョウタン・炭化米・馬と思われる歯などが出土した。また魚網の重りである土錘が出土した。これらから、暮らしの様子をうかがうことができる。高床倉庫は、この家族だけのものであったかどうかわからないが、一般的な集落に高床倉庫が伴うことを示している。高床倉庫の下の土坑から土製勾玉が出土した。倉が廃棄された時に祭祀が行われたらしい。奈良時代の土製勾玉は、東北北部で発見されているが、北陸ではこれが初めてのようである。

5　４地区と５地区で室町時代（14・15世紀）とみられる道路跡が発見された。道路は幅約２ｍで砂の盛土をしている。道は自然の川縁を蛇行しながらほぼ南北に進む。路床には古代の道路跡に認められる波板状凹凸面と呼ばれる溝がある。水はけの悪いところに設けられていることから、ぬかるみを防ぐための工夫と考えられる。

（久々忠義・境　洋子）

参考文献

福光町教育委員会1991『富山県福光町梅原安丸遺跡群Ⅰ』
福光町教育委員会1994『富山県福光町梅原上村遺跡群Ⅱ・梅原胡摩堂遺跡群Ⅰ』
富山県文化振興財団1994『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』
福光町教育委員会1994『富山県福光町梅原出村遺跡群Ⅱ・梅原上村遺跡群Ⅱ・梅原落戸遺跡群Ⅰ』
米沢義光1989「気屋式土器様式」『縄文土器大観第４巻』小学館
福野町教育委員会1990『安居五百歩遺跡Ⅰ（縄文時代編）』
西田泰民「堀之内・加曽利Ｂ式土器様式」『縄文土器大観第４巻』小学館
上市町教育委員会1982『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町土器・石器編―』
富山市教育委員会1987『長岡杉林遺跡』
富山県文化振興財団1990『東海北陸自動車道関連発掘調査概要(1)梅原胡摩堂遺跡』
氷見市教育委員会1985『富山県氷見市薮田薬師中世墓発掘調査報告書』
上市町教育委員会1985『富山県上市町弓庄城跡第５次緊急発掘調査概要』
井口村教育委員会1990『井口城跡発掘調査概要』
井口村教育委員会1980『富山県井口村井口遺跡発掘調査概要』
滑川市1979『滑川市史　考古資料編』
富山県教育委員会1982『北陸自動車道遺跡調査報告　立山町土器・石器編』
富山県教育委員会1984『北陸自動車道遺跡調査報告　立山町木製品・総括編』
鬼頭清明1985『古代村』古代日本を発掘する６　岩波書店
赤崎敏男1991「祭祀具 鏡と玉」『古墳時代の研究 第３巻』雄山閣

V　試掘調査の概要

1　調査対象地　分布調査で確認された梅原加賀坊遺跡・梅原胡摩堂遺跡（旧称梅原No.11・同12遺跡：平成７・８年度工事区域）の推定範囲全体及びその隣接地もあわせて調査対象地に含めた。ただし、当該ほ場整備事業に同意を得ていない区域の水田（主に県道金沢・井波線沿いの段丘上に集中する。）は、試掘区域から除外した。

2　調査期間　平成６年９月19日～平成６年10月14日（実働17日間）

3　調査面積　調査対象面積は約130,000㎡、発掘面積は約3,440㎡である。

4　調査の方法　調査は幅約１ｍの試掘トレンチを109箇所で設定し、重機および人力によって地表面から最終的な遺構確認面となる黄褐色粘質土ないし青灰色粘土層（地山）まで段階的に掘り下げ、遺構・遺物の有無および遺存状況を確認した。なお、部分的ではあるが任意に地山下層の深掘りを行いその状況を確認した。

5　調査の結果　対象地は、大井川と山田川に挟まれた低位段丘および開析平野部にあたり、標高は67～72ｍを測る。その規模に対して河川の氾濫等の影響は少なく、旧ほ場整備の整地痕を除けば土層の堆積は全域にわたって安定した状況を示した。

一帯の基本層序は、１層黒褐色粘質土（耕作土）、２層黒色粘質土（遺物包含層）と堆積し、遺構検出面となる黄褐色粘質土（地山）に至る。ただし、地点によっては１層耕作土直下に旧ほ場整備時の整地盛土が認められたり、逆に削平を受けて１層直下に礫層が露呈する箇所もあった。また、谷等にあたる箇所では２層下は低湿帯特有の青灰色粘土と化していた。

遺構（第28図、図版19～21）　調査区北端の14Ｔ～16Ｔや調査区南側106Ｔなどごく一部を除いた広範な区域で確認された。その大半が古代～中近世に属する掘立柱建物・竪穴状土坑・土坑・溝状遺構・川跡と考えられる。ただし、いずれも包含層・遺構確認面を同じくし、また、その覆土も様々で各遺構の時期を特定することは困難であった。

特徴的な点としては、27Ｔ～29Ｔ・42Ｔ～45Ｔでは中世期と考えられる掘立柱建物・土坑群を確認するとともに54Ｔ～79Ｔでは旧権現堂川跡と推定される幅10ｍ前後の川跡を確認した。92Ｔ～94Ｔでは地表下約80cmで８世紀後半に属する掘立柱建物・竪穴状土坑・溝状遺構などが集中する。注目すべきは、この掘立柱建物が付帯施設として方形竪穴土坑を伴っていた点であった。さらに103Ｔ～109Ｔでは、遺物包含層となる２層は遺存せず耕作土直下で土台立建物等の濃密な中近世遺構群を確認した。（注目された遺構群の詳細については後述のとおり。）

遺物（図版22）　遺構を確認した区域を中心に調査区のほぼ全域にわたって様々な遺物の出土が認められた。その内容は縄文土器（後期・晩期）、須恵器・土師器（古代：主に８世紀後半）、灰釉陶器、土師器（中世：主に13～15世紀）珠洲・越前・瀬戸美濃・青磁・白磁（中世）、越中瀬戸・伊万里ほか近世陶磁器などである。

小結　調査結果から対象地のほぼ全域で古代～中近世の遺跡の広がりを捉えることができた。本来、時期・内容を同じくするこの大規模な遺跡を区分することは極めて困難であり、却って混乱をきたす恐れがある。しかし、昨年度までの調査成果ならびに遺構群の分布状況や遺物の出土状況・所属時期等を考慮して敢えて以下の３遺跡に区分した。一方は調査区南側の段丘上を中心に広がる中近世を主体とする遺跡であり、これを従来の知見どおり梅原胡摩堂遺跡に含めた。これに対して13Ｔ・21Ｔライン以南から82Ｔ・106Ｔラインまでの広範な一帯を梅原落戸遺跡として捉えた。これは、今年度同遺跡３地区の本調査において発見された８世紀前半の古代川上郷とも推定される集落跡と、前述した８世紀後半期の遺構・遺物との関連性を重視した事由による。さらに、調査区北端の比較的遺構・遺物の希薄な一帯を梅原加賀坊遺跡に含めた。各遺跡の面積は梅原胡摩堂遺跡が約61,000㎡、梅原落戸遺跡が約105,000㎡、梅原加賀坊遺跡が約18,500㎡となる。数値は、ほ場整備工事区域以外の箇所を含んだ平成６年度調査区全体における面積を示し、昨年までの調査成果をあわせると梅原落戸遺跡約279,000㎡、梅原加賀坊遺跡約28,500㎡となる。　（島田修一）

6　検出された遺構について

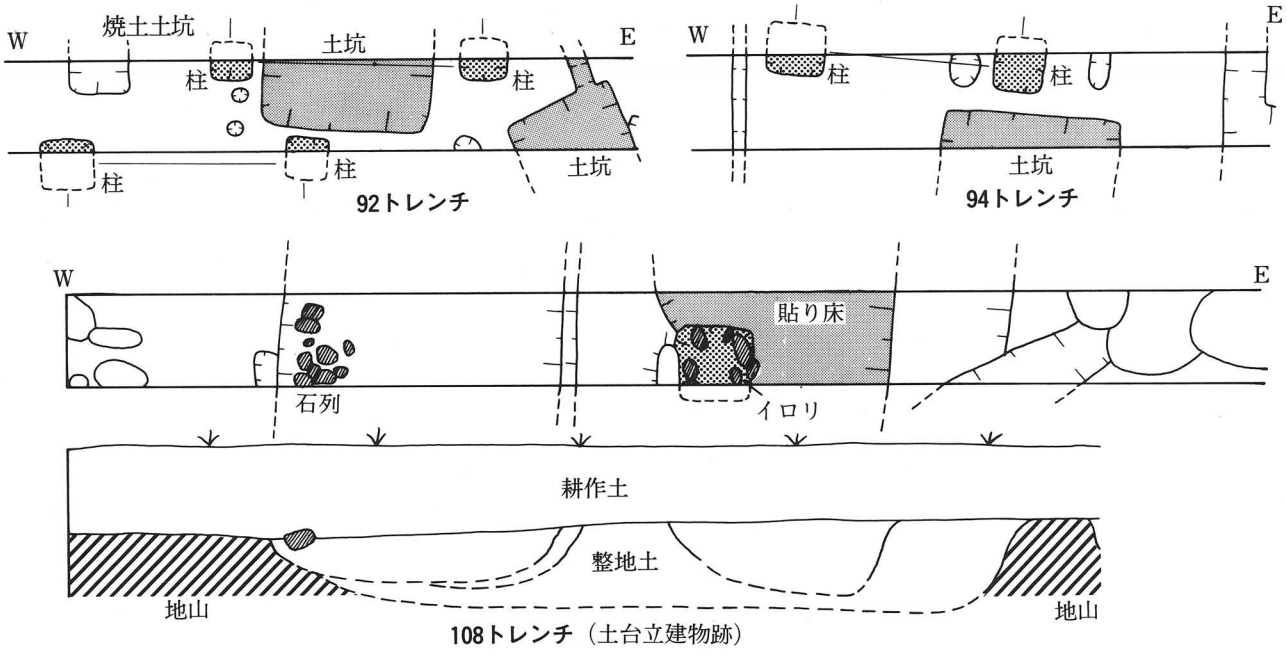
(1)竪穴状土坑を伴う古代掘立柱建物

92から94トレンチにかけて８世紀後半を主体とする古代遺物・遺構が集中して検出された。掘立柱建物は長軸70cmから100cmの方形掘方の柱穴をもつものが主体で、１間から２間が確認される。この建物で特徴的なのは、柱列の間もしくは脇に並列する竪穴状土坑が付帯する点である。第６図の92・94トレンチはその様子を図示したもので、この他にも数例みられる。竪穴状土坑は一辺２ｍから2.5ｍで、一部試掘したところ10cm前後の浅いものであることが確認されている。竈や焼土などは確認されず、焼土土坑は別に存在する。なお、掘立柱列は柱間３ｍから3.5ｍで梁行方向のものを検出したものと思われる。

県内での同類の検出例はまだ少ない。本書で報告されている梅原落戸遺跡３地区で２例ある他に、富山市吉倉Ｂ遺跡でＳＢ57とＳＫ135・136があるが共伴性については論論がある。いずれも竈・焼土はみられず、規模も２ｍから３ｍで竪穴住居的な様相はきわめて薄い。竈機能については吉倉Ｂ遺跡のＳＢ50に焼土土坑ＳＸ39が伴うように竪穴外に移行している可能性が高い。竪穴状土坑と掘立柱建物の並立という点でみると、上市町東江上遺跡ＳＢ24とＳＫ19の例もある。しかし、この場合は竪穴規模が大きく、掘立柱建物と竪穴状土坑の対等なレベルでの機能分離とみられるのに対し、今回の事例は掘立柱建物に従属する機能限定された竪穴状土坑という印象を強くするものである。中世になると富山市南中田Ｄ遺跡などでみられるような掘立柱建物内部に取り込まれる竪穴状土坑が多くみられるが、今回の竪穴状土坑そのものをみれば、むしろ中世的である。古代竪穴住居規模が縮小化し、竈が消え、機能限定されていく過程の中で掘立柱建物に取り込まれていく過渡的な段階例と評価したい。

(2)近世土台立建物

108トレンチで確認された長さ約10ｍの土坑について土台立建物痕と認識した。土坑は10ｍ規模の基礎的掘方と3ｍ程の二次的掘方があり、基礎的なものは汚れた土で埋め戻され、二次的なものは黄褐色シルトで丁寧に埋め戻される。中央には一辺１ｍの方形石組を伴う土坑、西端には直線的な石列がある。時期の確定できる遺物はない。県内の例では梅原胡摩堂遺跡のＳＢ6390・6665・7101・8680があり、特に方形石組はＳＢ8680と同様で囲炉裏跡と推定される。東側貼り床は上面が丁寧に整地されており、地面が露呈した空間と想定される。　（河西健二）



第６図　竪穴状土坑を伴う古代掘立柱建物と近世土台立建物（1：100、断面の垂直方向のみ１：20）

付載

梅原落戸遺跡周辺の古植生

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

梅原落戸遺跡（富山県西砺波郡福光町に所在）は、複合扇状地である富山平野の西端部に位置し、小矢部川とその支流である大井川によって形成された扇状地上に立地する。周辺には、古代・中世の集落の遺跡が多数検出されており、本遺跡はその中心部にあたる。発掘調査では、縄文時代後期、弥生時代、奈良・平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代の遺構・遺物が確認されている。

本報告では、縄文時代後期前葉から江戸時代の古植生復元を目的として、花粉分析を実施する。本遺跡は古代から中世の集落跡が中心になるため、特に室町時代の周辺植生の変化に注目する。

1　試料

試料は、梅原落戸遺跡3地区と4地区の2ヵ所の土層断面より採取された土壌は合計8点である（図1・図2，表1）。3地区は縄文時代後期の河道埋積物、4地区は室町時代に敷設された道路遺構上に埋積した自然埋積層から採取された。

表1　分析試料一覧

地区	サンプル番号	土質	時代
3地区	No.1	極暗褐色砂質シルト	縄文時代後期前葉以降奈良時代以前
	No.2	黒褐色砂質シルト	縄文時代後期前葉
	No.3	褐色砂混じりシルト	縄文時代後期前葉以降奈良時代以前
	No.4	黒褐色砂質シルト	縄文時代後期前葉かやや古い時期
	No.5	黒褐色砂混じりシルト質粘土	奈良時代前半
4地区	No.1	黒褐色砂質シルト	江戸時代前期
	No.2	黒色砂質シルト	室町時代（16世紀）
	No.4	黒褐色砂質シルト	室町時代（16世紀）

2　花粉分析の方法

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して、出現する全ての種類（Ｔａｘａ）について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し、花粉化石組成図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。なお、総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を＋で表示する。

3　結果

結果を表２・３、図３に示す。地区ごとに花粉化石の産状について述べる。

３地区の花粉化石の産状は、全試料とも保存状態が悪く、検出される花粉・シダ類胞子の数も少ない。保存状態のやや良かった試料番号５では、イネ科、スギ属、カヤツリグサ科などが検出されている。

４地区の花粉化石の産状は、試料番号１は良好、２はやや良、４は不良であった。

全体の構成比は、草本花粉が70％前後と高率を占め、そのほとんどがイネ科である。木本花粉では、ブナ属、スギ属、マツ属が高率に出現し、コナラ属コナラ亜属、ハンノキ属を伴う。草本花粉では、イネ科が高率で、カヤツリグサ科、ヨモギ属、アリノトウグサ属などが検出される。

4　考察

花粉分析の結果より推定される古植生について記す。

縄文時代後期前葉から奈良時代前半にかけては、花粉化石の保存状態が悪いため、当該期の植生を推定するのは難しい。

室町時代および江戸時代では、ブナやコナラ属コナラ亜属などを中心とした冷温帯性の落葉広葉樹林が推定される。スギ属は、天然林としてブナと混交していた可能性と植林の可能性が考えられる。また、イネ科が多産し、水田雑草の種類を含む水生植物を伴うことから、周辺での稲作が示唆される。

以上の分析結果から推定される植生と、現在の植生調査結果を比較・検討する。本地域の潜在自然植生は、常緑広葉林のヒメアオキ－ウラジロガシ群集で、後背山地は山地夏緑広葉樹林のチシマザサ－ブナ軍団である（宮脇，1985）。それに対し、現在の植生は富山平野は山麓から全域が水田で、低山と丘陵地はほとんどがコナラ、アカマツの二次林かスギ植林地である（宮脇，1985）。したがって、中世～江戸時代は、平野部は水田や集落として開発され、周辺山地はほぼ現在と同様の植生であったと考えられる。

また、屋敷林としてスギを植える慣習は、砺波平野に特徴的な景観である。室町時代から江戸時代にかけて検出されたスギについては、本遺跡周辺の後背山地のみならず、当時の集落の屋敷林として植栽されたのかもしれない。この点は、絵図や文献史料の面から検証できれば、明らかになるかもしれない。

〈引用文献〉

宮脇　昭（1985）日本植生誌　中部．Ｐ．585.，至文堂．

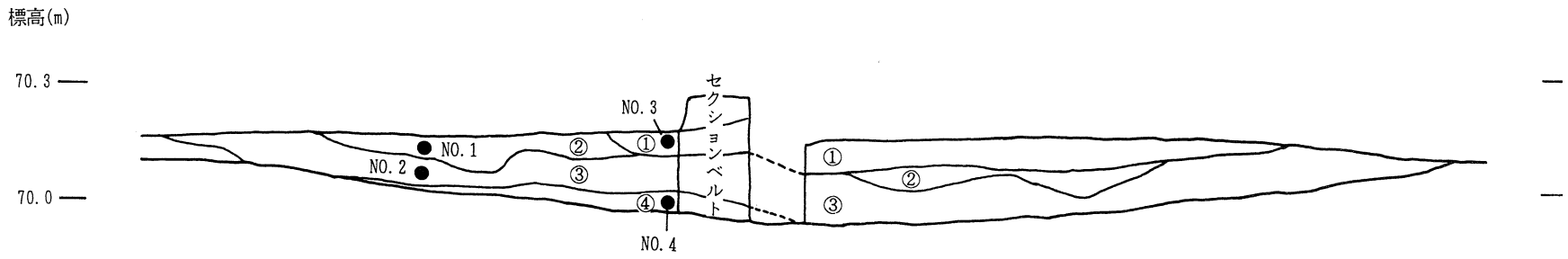


図１　３地区縄文河道セクション試料採取断面図
○数字は層名を、●印は試料採取位置を示す。

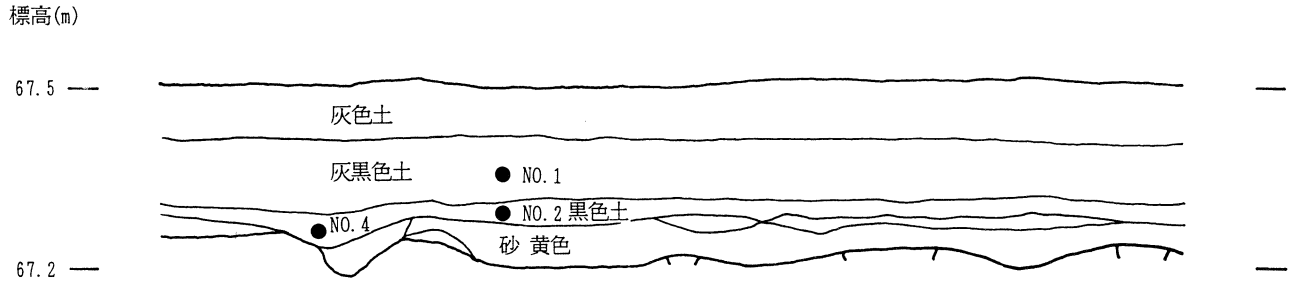


図２　４地区道の西側セクション試料採取断面図
○数字は層名を、●印は試料採取位置を示す。No３は欠番

表2　3地区の花粉分析結果

種　類（Taxa）	試料番号				
	5	3	1	2	4
木本花粉					
マツ属	1	—	1	4	—
コウヤマキ属	2	—	—	—	—
スギ属	7	—	—	—	—
ヤマモモ属	1	—	—	—	—
サワグルミ属	1	—	—	—	—
クマシデ属—アサダ属	1	—	—	—	—
ハンノキ属	2	—	—	1	—
ブナ属	2	—	—	—	—
コナラ属コナラ亜属	2	—	—	1	—
クリ属—シイノキ属	1	—	—	—	—
草本花粉					
サジオモダカ属	1	—	—	—	—
イネ科	52	3	—	12	—
カヤツリグサ科	4	—	—	—	—
サナエタデ節—ウナギツカミ節	1	—	—	1	—
ソバ属	—	—	—	2	—
ナデシコ科	—	—	—	1	—
アリノトウグサ属	—	—	—	6	—
オミナエシ属	2	—	—	—	—
ヨモギ属	1	—	—	—	—
不明花粉	3	1	1	4	—
シダ類胞子					
シダ類胞子	15	2	6	19	2
合計					
木本花粉	20	0	1	6	0
草本花粉	61	3	0	22	0
不明花粉	3	1	1	4	0
シダ類胞子	15	2	6	19	2
総花粉・胞子	99	6	8	51	2

試料番号5はX25Y13区の古代相当層のサンプル

表３　４地区の花粉分析結果

種　類（Taxa）	試料番号		
	1	2	4
木本花粉			
モミ属	1	4	—
ツガ属	6	7	—
トウヒ属	1	—	—
マツ属	48	49	5
コウヤマキ属	2	5	2
スギ属	13	57	6
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	2	3	—
ヤナギ属	1	—	—
ヤマモモ属	4	1	—
サワグルミ属	3	—	—
クマシデ属—アサダ属	12	3	—
カバノキ属	7	7	—
ハンノキ属	35	7	—
ブナ属	81	48	6
コナラ属コナラ亜属	36	10	3
コナラ属アカガシ亜属	2	7	—
クリ属—シイノキ属	3	1	—
ニレ属—ケヤキ属	7	5	—
エノキ属—ムクノキ属	2	1	—
アカメガシワ属	1	—	—
ウルシ属	1	—	—
トチノキ属	—	1	—
ノブドウ属	—	1	—
ウコギ科	—	2	—
ミズキ属	1	—	—
ツツジ科	—	1	—
イボタノキ属	—	1	—
タニウツギ属	1	—	—
スイカズラ属	1	2	—
草本花粉			
サジオモダカ属	—	—	1
オモダカ属	2	1	—
スブタ属	5	—	—
イネ科	1035	461	16
カヤツリグサ科	22	44	2
ミズアオイ属	—	3	—
サナエタデ節—ウナギツカミ節	3	1	—
タデ属	1	1	1
ソバ属	7	2	—
アカザ科	2	1	—
ナデシコ科	2	—	—
キンポウゲ科	2	2	—
タケニグサ属	1	—	—
アブラナ科	5	3	—
トウダイグサ科	—	1	—
キカシグサ属	4	—	—
アリノトウグサ属	22	3	—
セリ科	2	3	—
オミナエシ属	5	2	1
ヨモギ属	18	41	5
他のキク亜科	2	6	—
タンポポ亜科	5	5	—
不明花粉	9	3	3
シダ類胞子			
シダ類胞子	31	84	105
合計			
木本花粉	271	223	22
草本花粉	1145	580	26
不明花粉	9	3	3
シダ類胞子	31	84	105
総花粉・胞子	1456	890	156

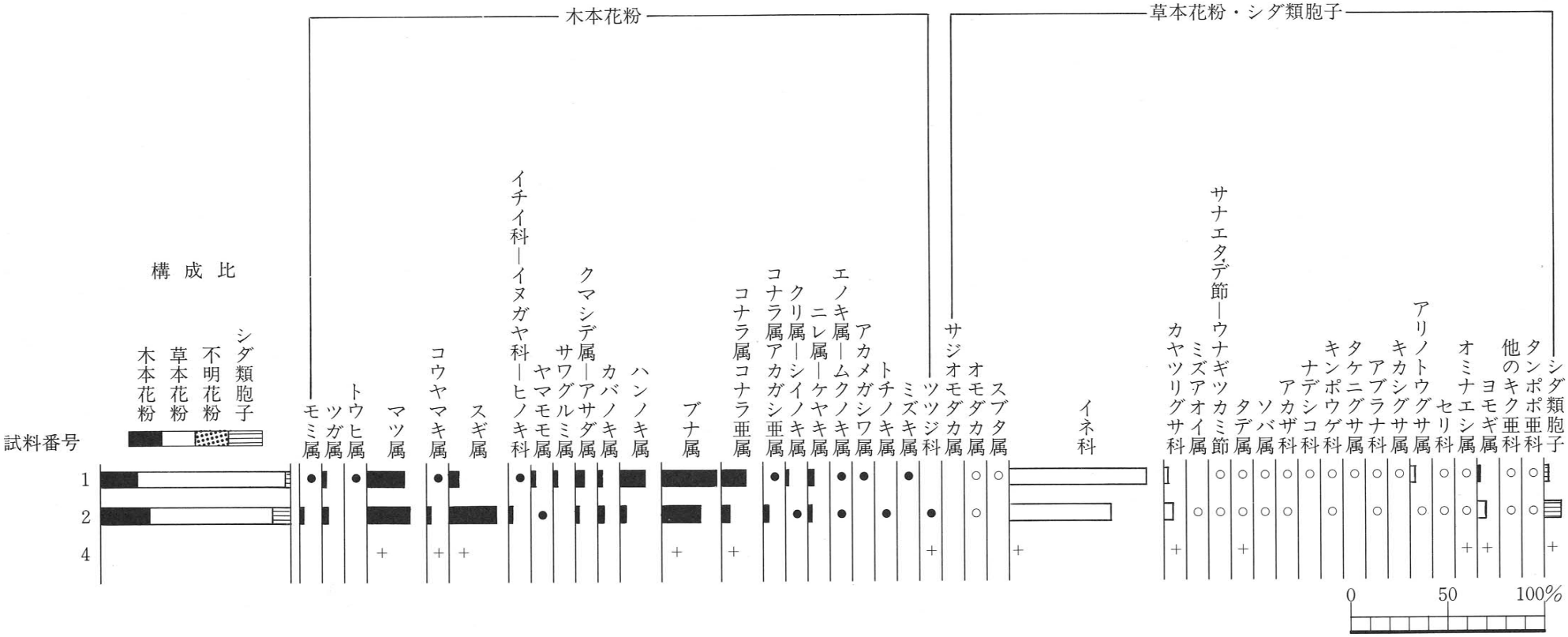
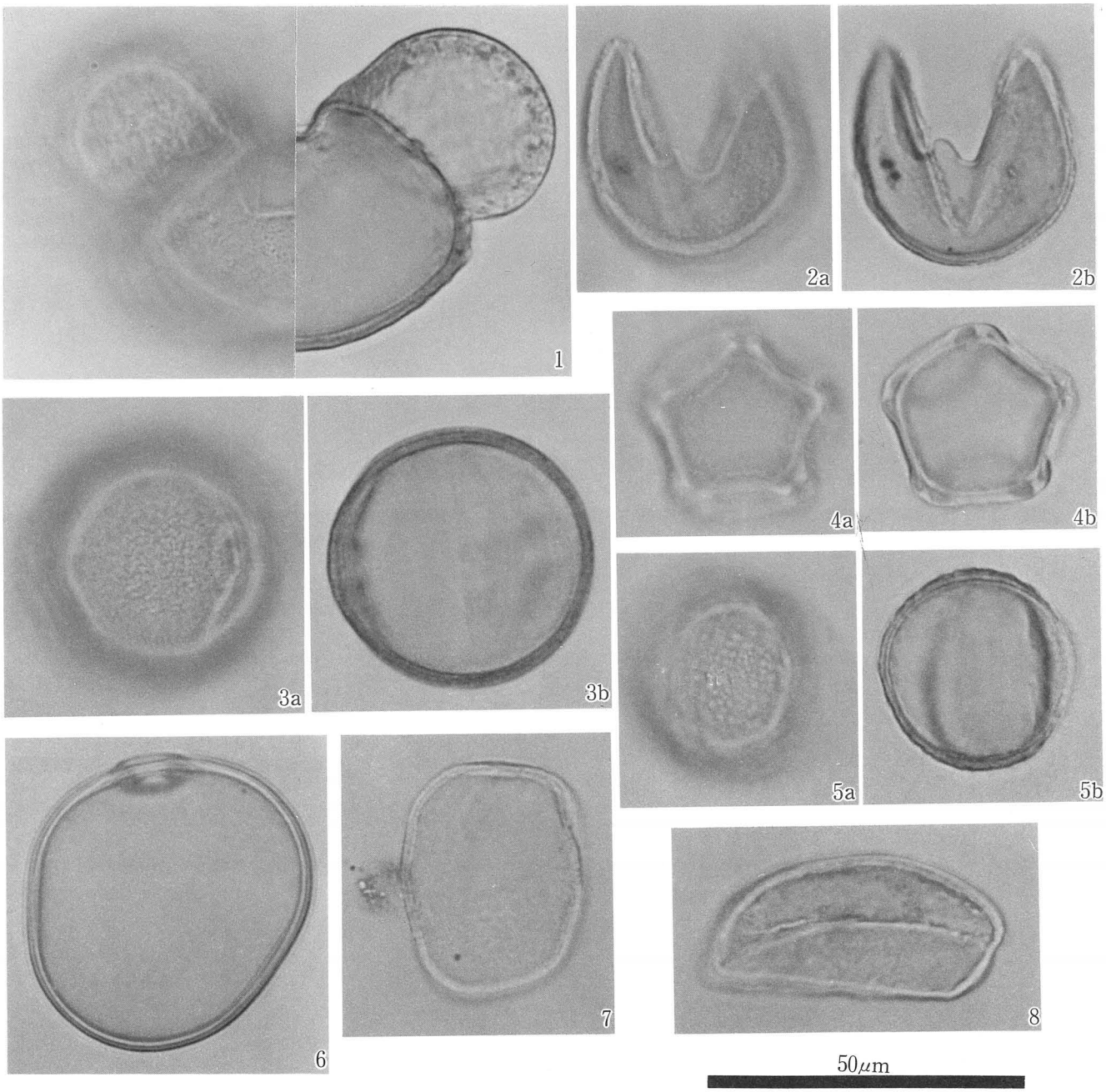


図３　４地区の主要花粉化石組成図

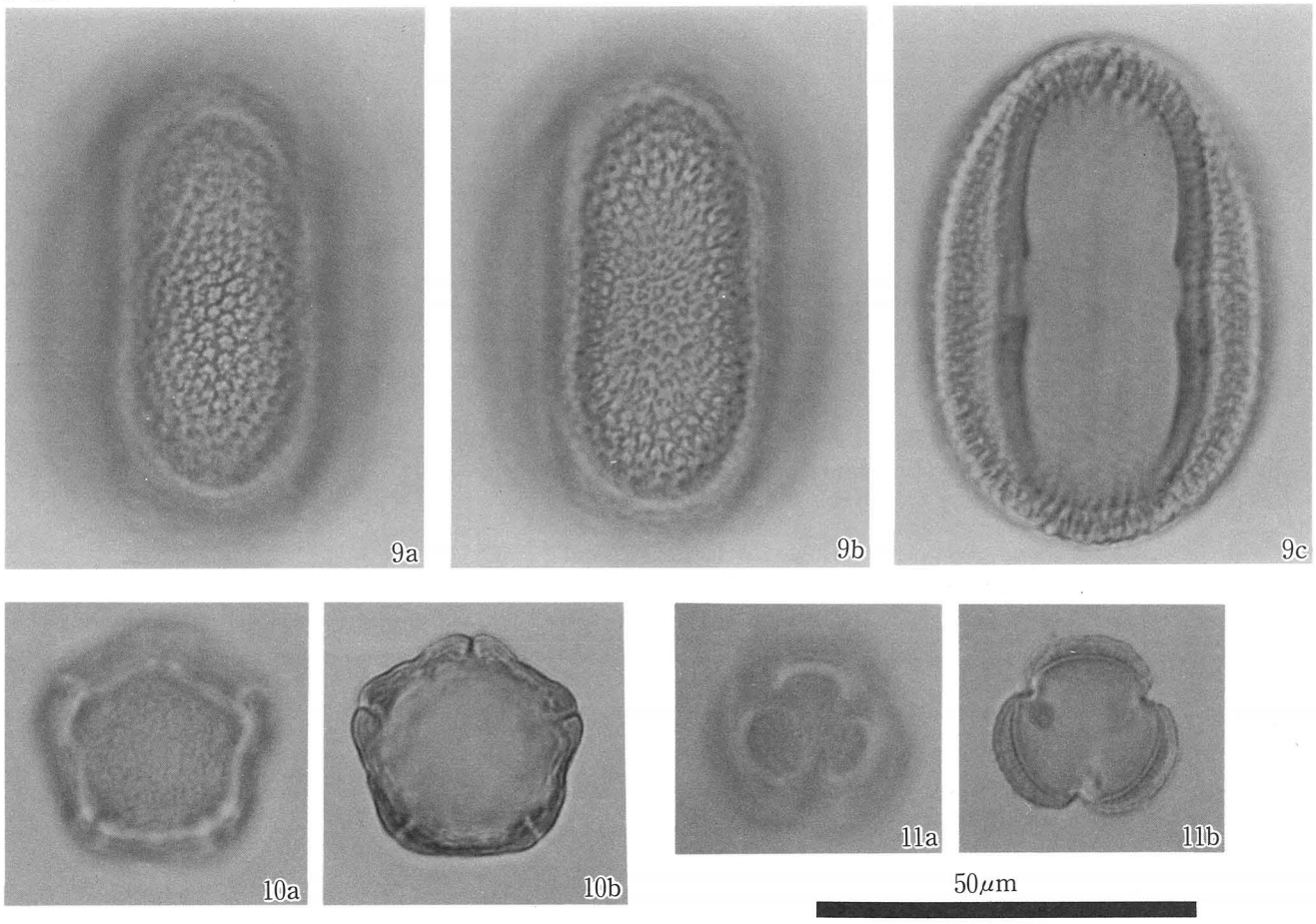
出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料において出現した種類を示す。

図版 1　花粉化石



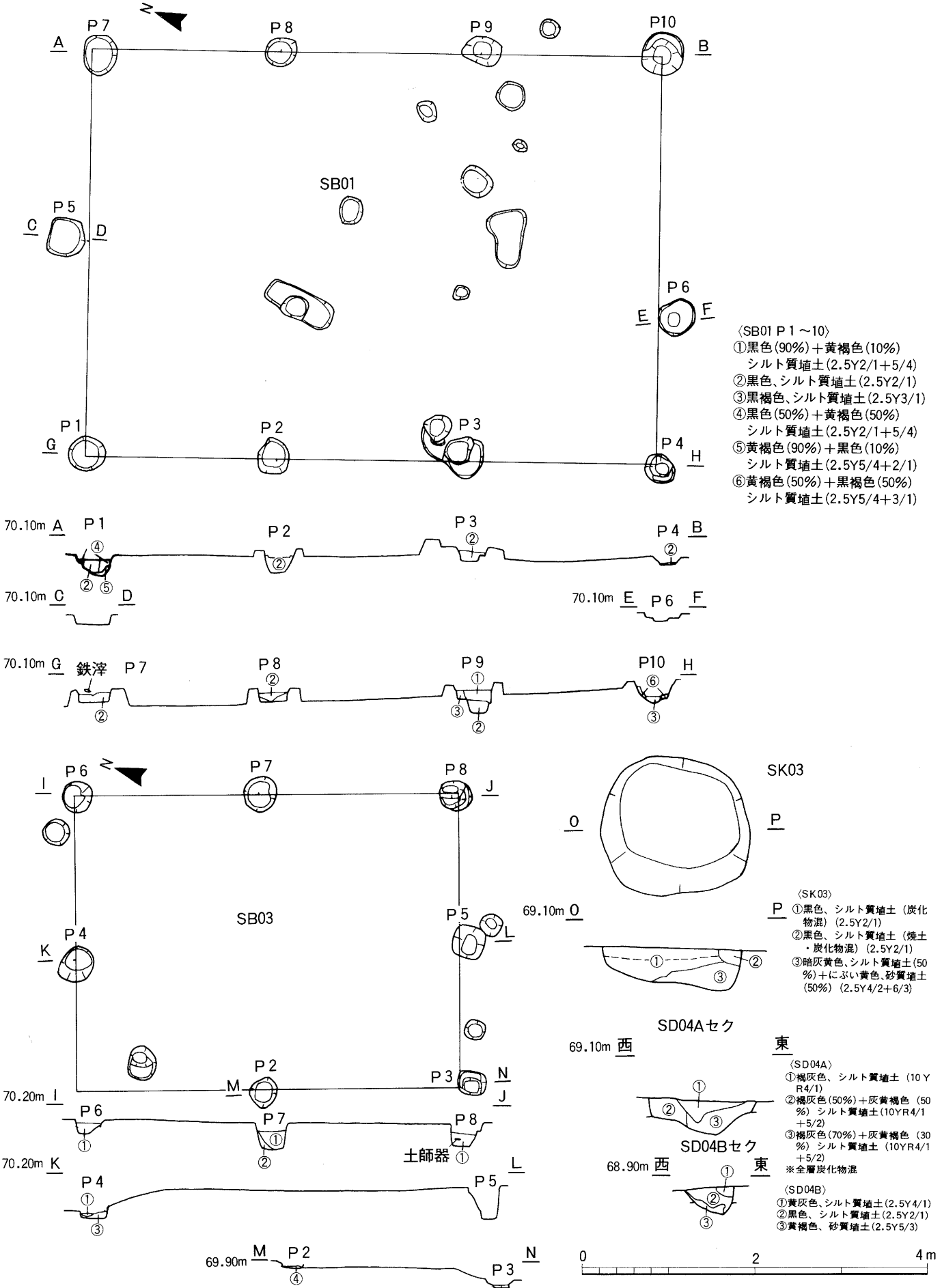
1.マツ属複維管束亜属（4地区；試料番号1）
2.スギ属（4地区；試料番号1）
3.ブナ属（4地区；試料番号1）
4.ハンノキ属（4地区；試料番号1）
5.コナラ属コナラ亜属（4地区；試料番号1）
6.イネ科（4地区；試料番号1）
7.カヤツリグサ科（4地区；試料番号1）
8.ミズアオイ属（4地区；試料番号1）

図版 2　花粉化石

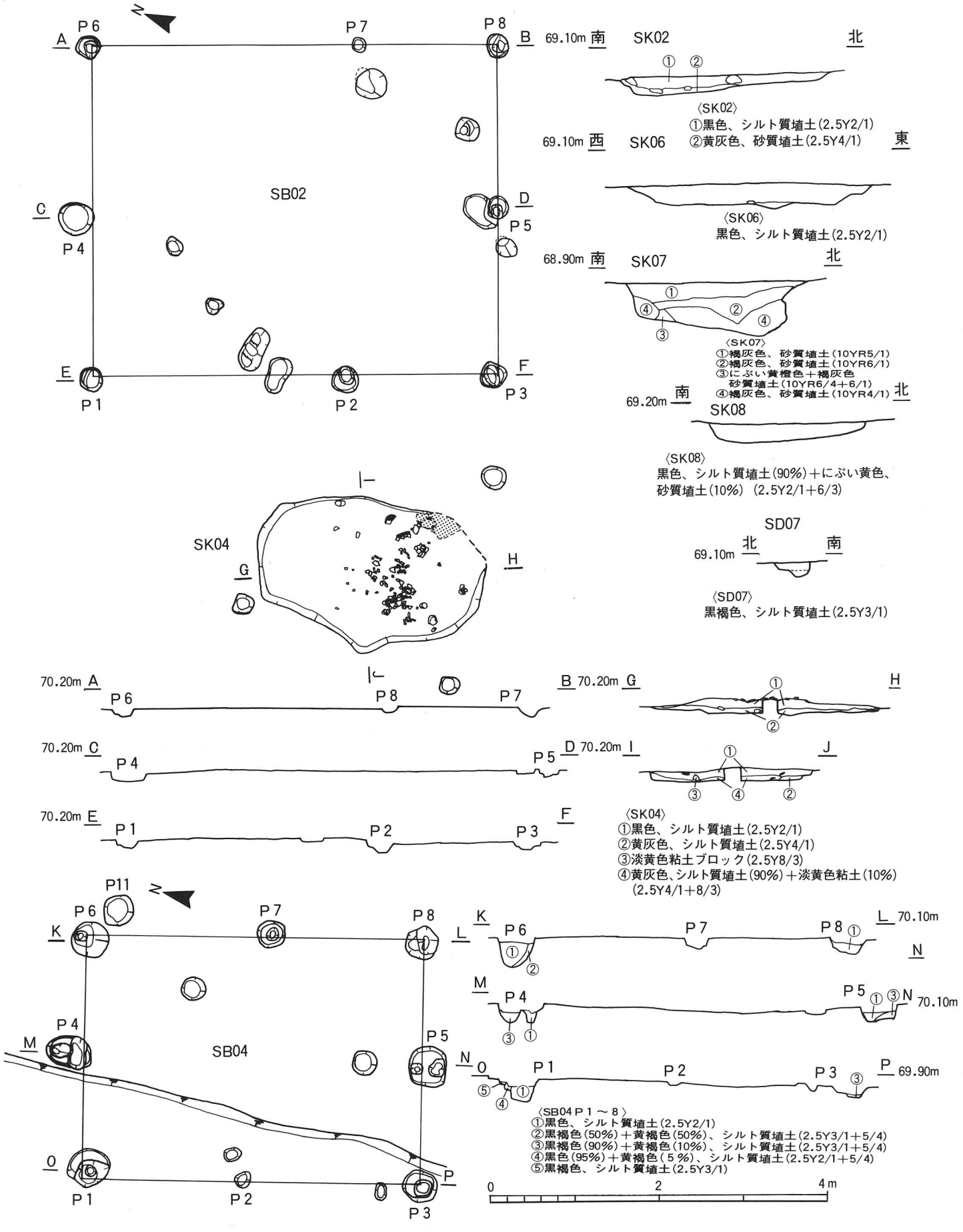


9. ソバ属（4 地区；試料番号1）
10. アリノトウグサ属（4 地区；試料番号1）
11. ヨモギ属（4 地区；試料番号1）

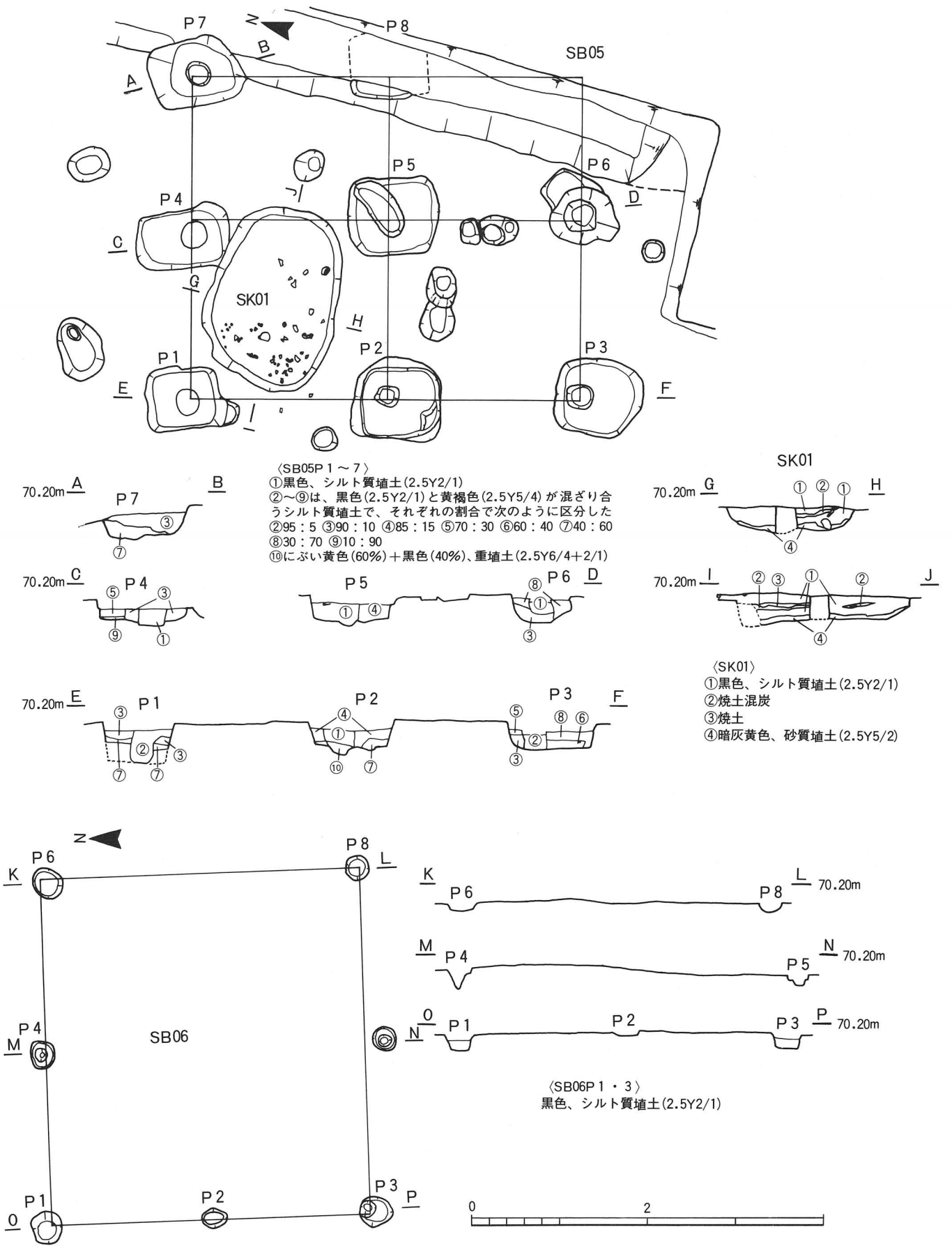
第7図　梅原落戸遺跡、3・4・5地区の地形と区割 (1/2,000)



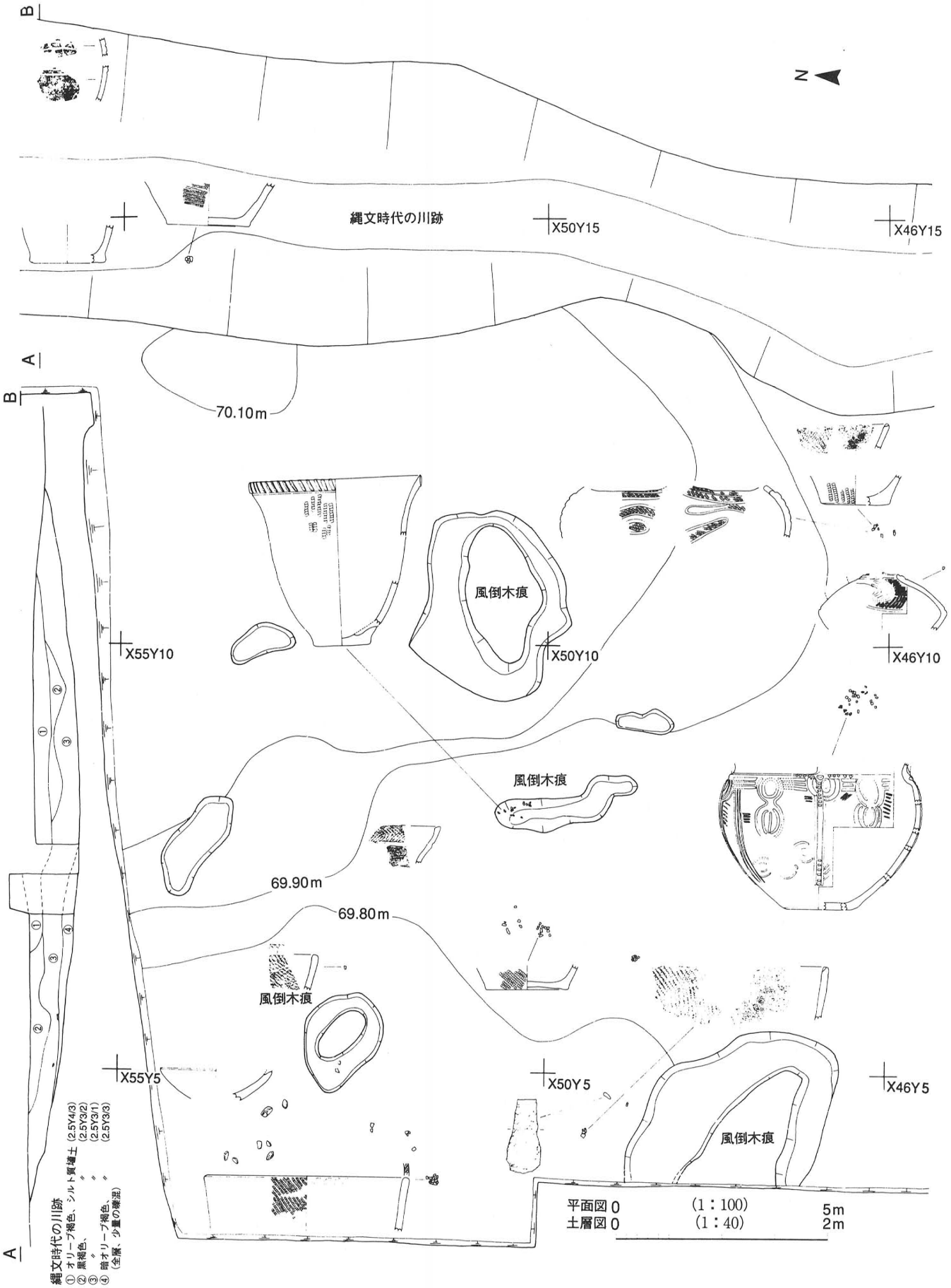
第8図　SB01・02・SK03・SD04遺構図



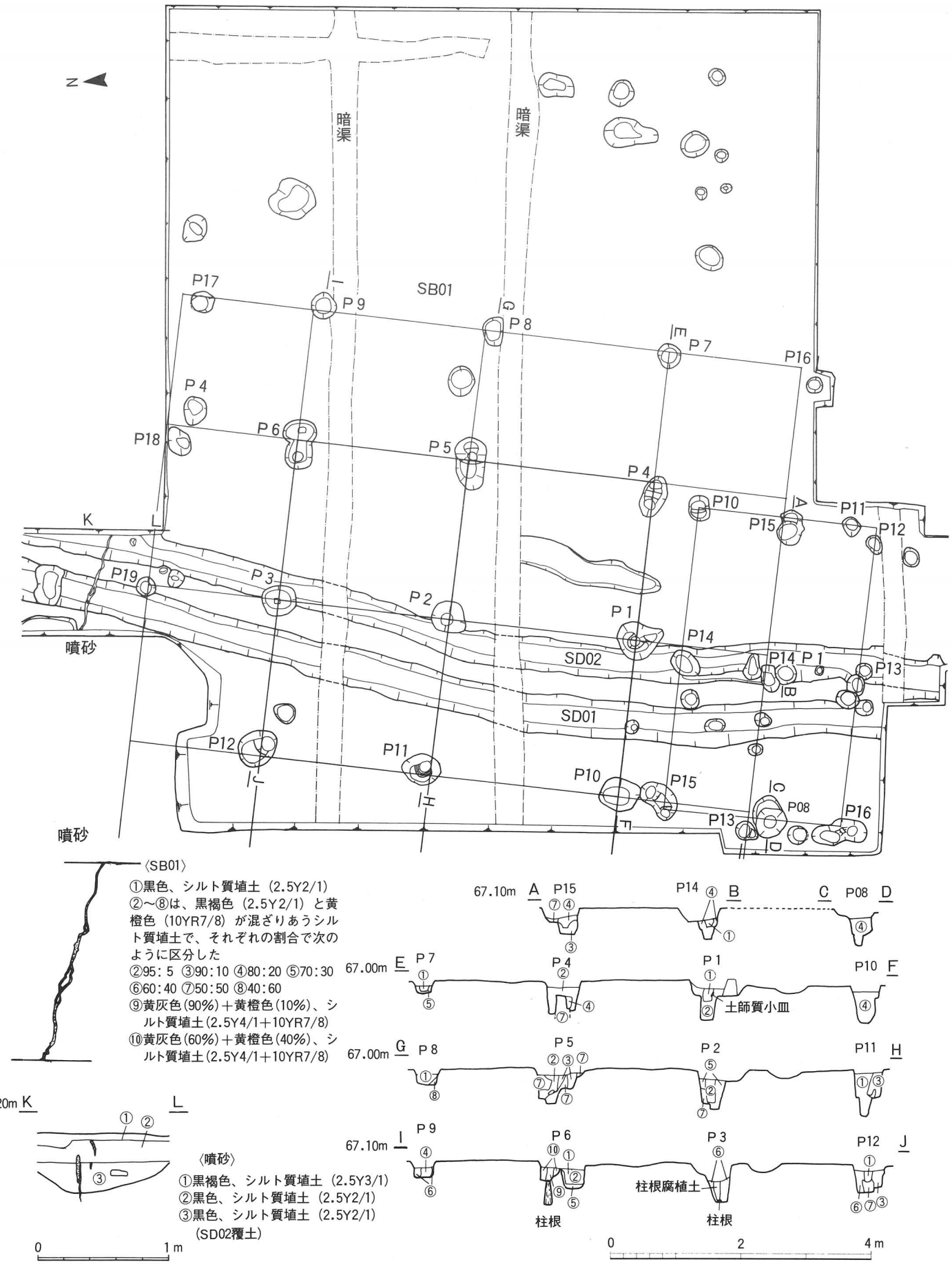
第9図　SB02・04・SK02・04・06・07・08・SD07遺構図



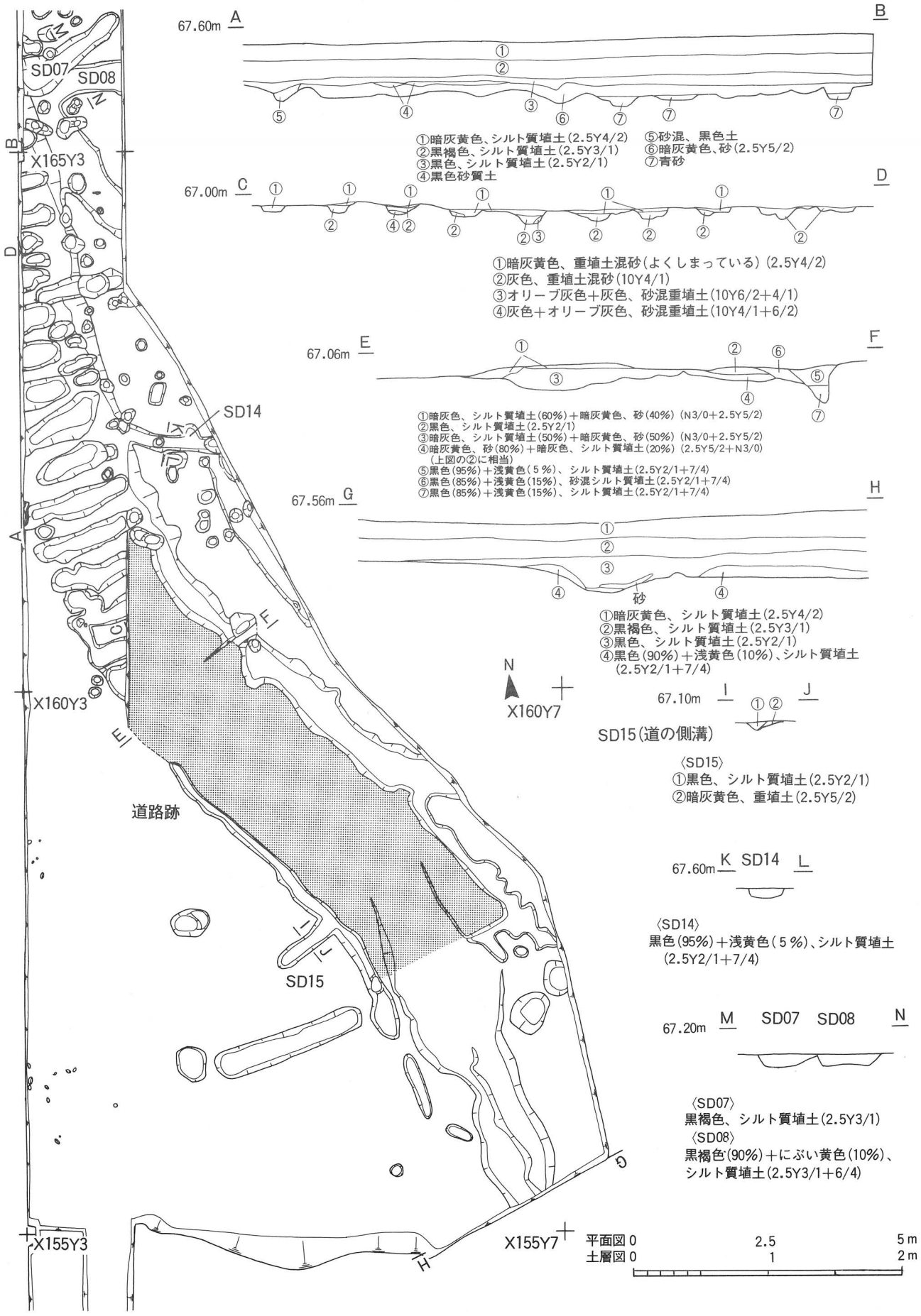
第10図　ＳＢ05・06・ＳＫ04遺構図



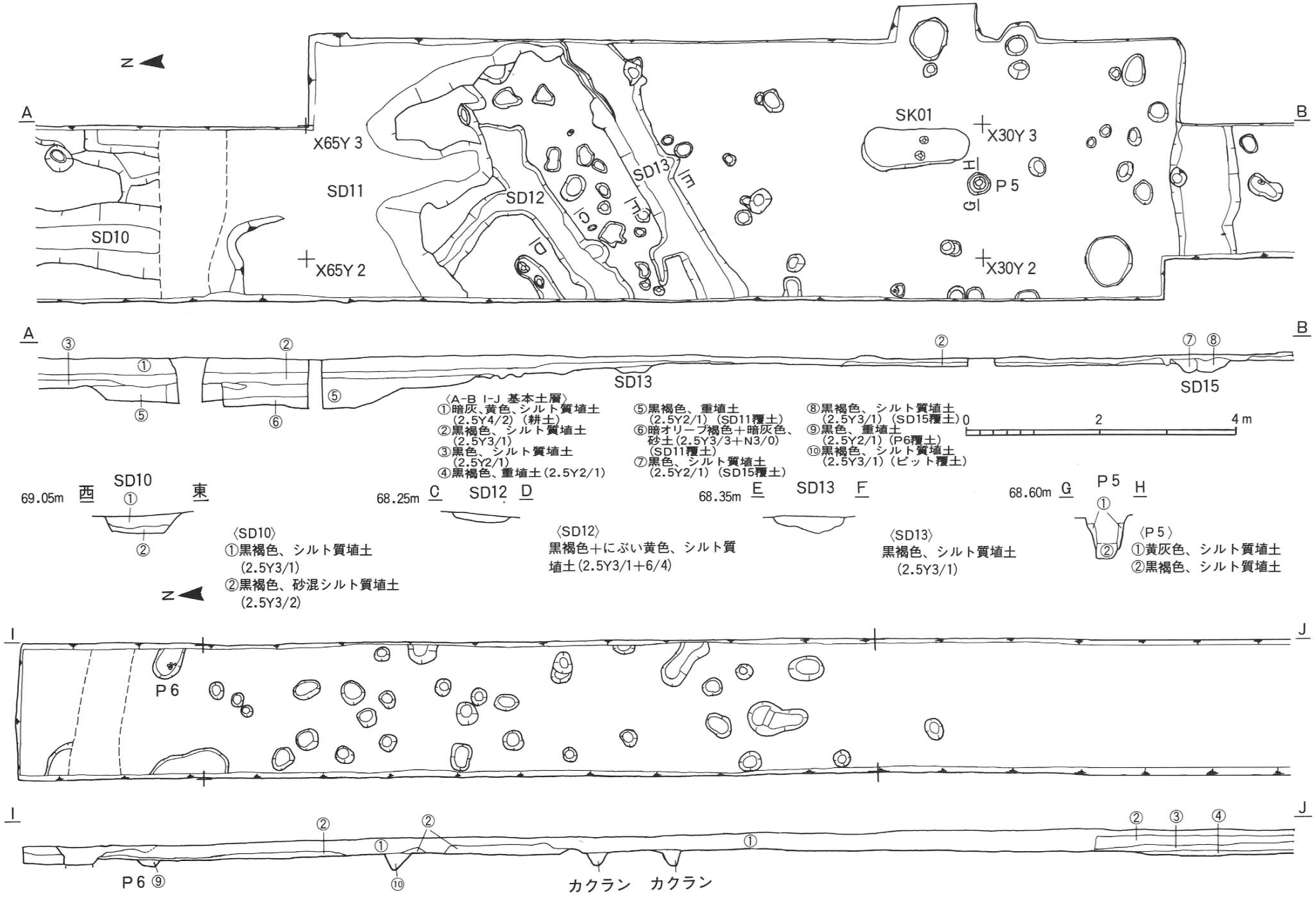
第11図 縄文土器の分布状況



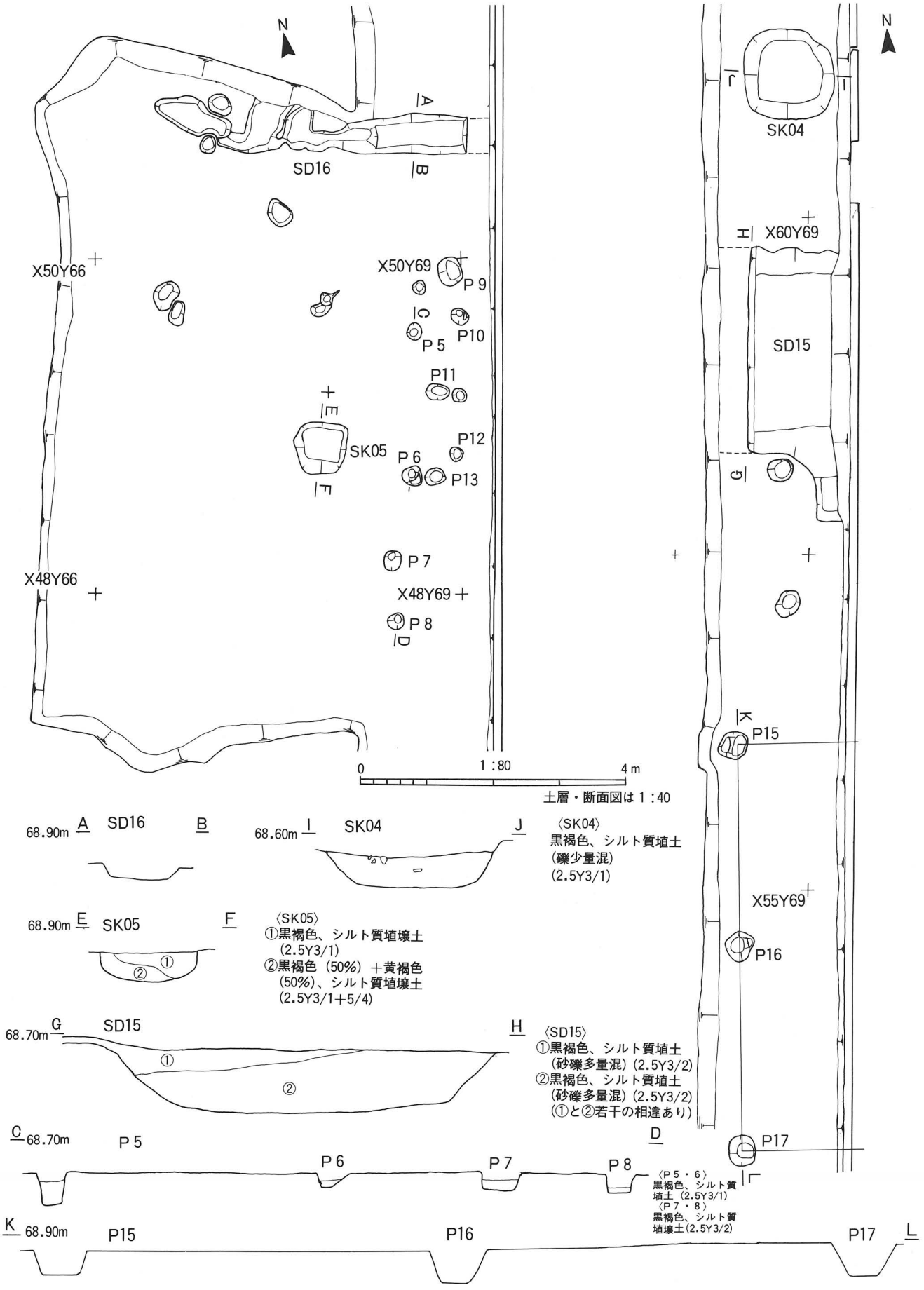
第12図　4地区ＳＢ01・ＳＤ01・02・噴砂遺構図



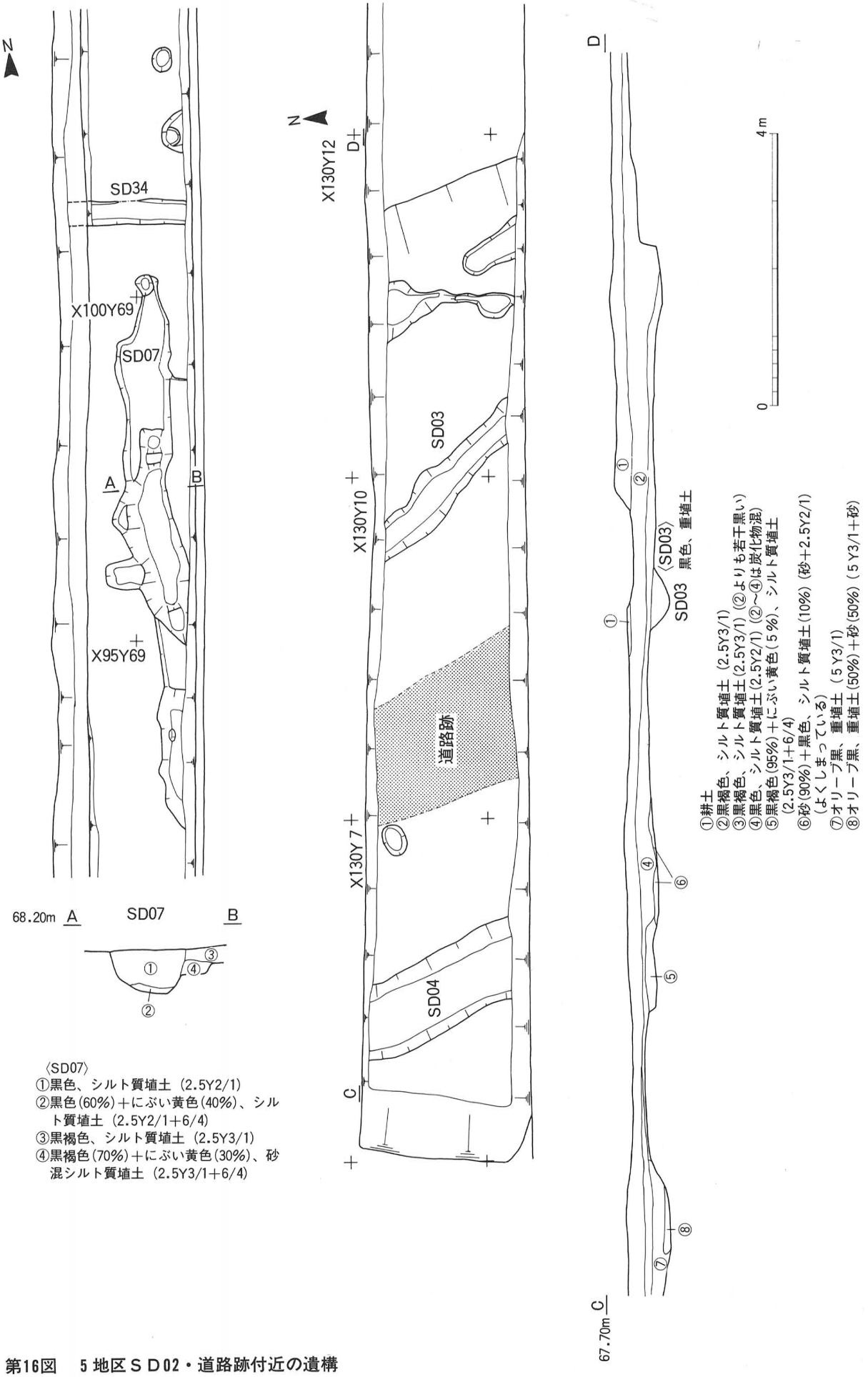
第13図　4地区道路跡遺構図（網点は砂の範囲）



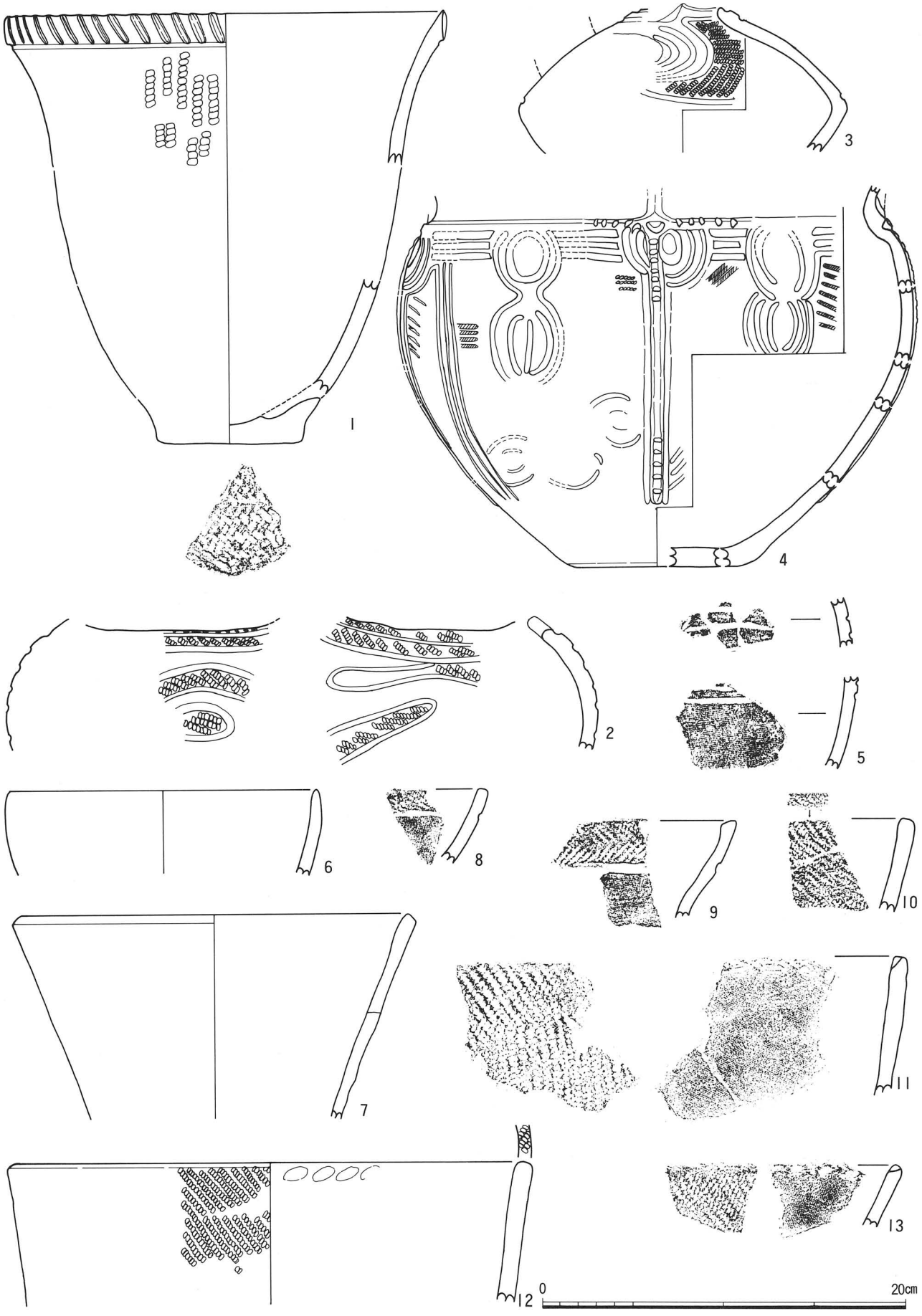
第14図 SD10・11・12・13・SK01・P5・6遺構図



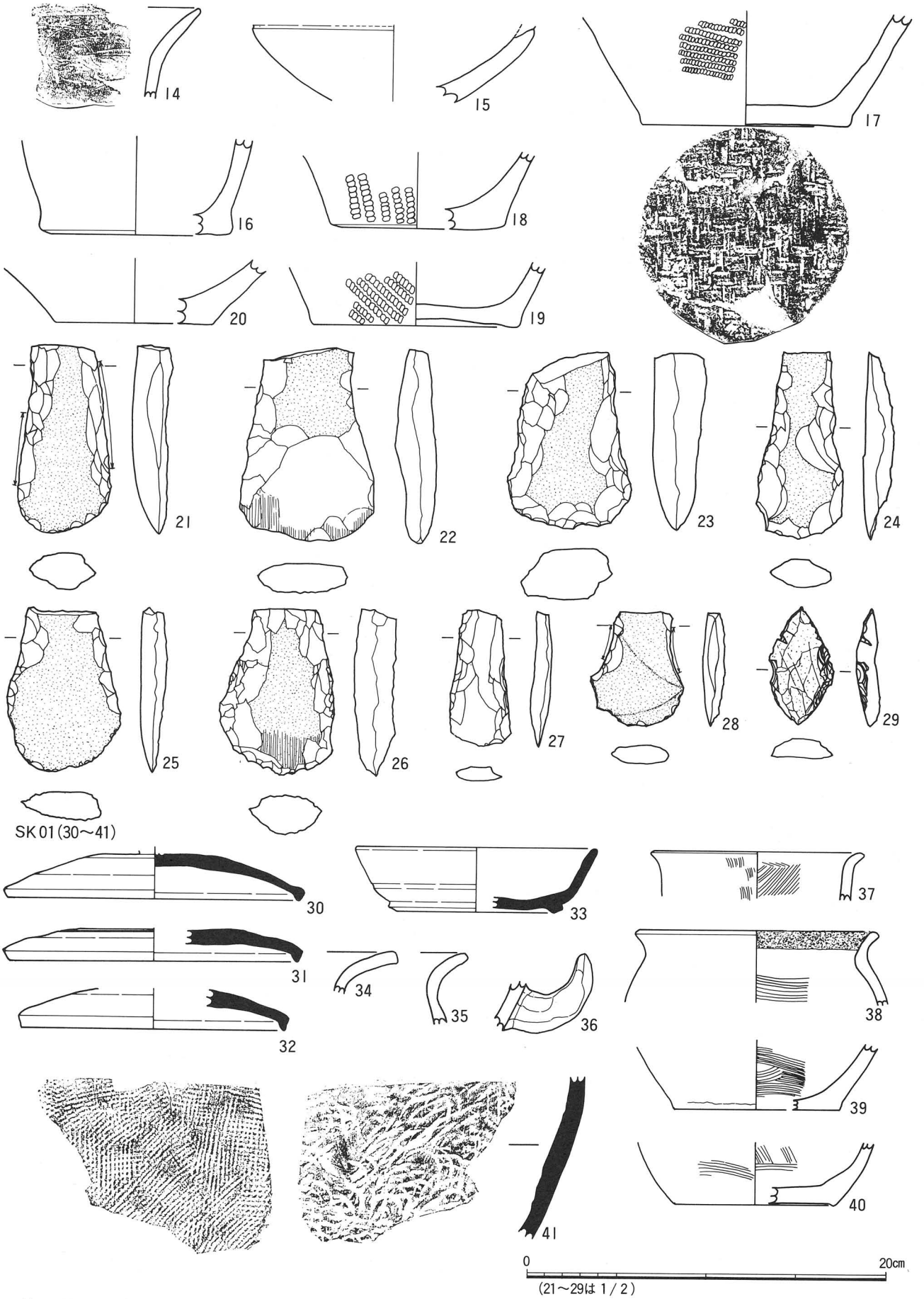
第15図　5地区ＳＤ16・ＳＫ05・ＳＫ04・ＳＫ15付近の遺構



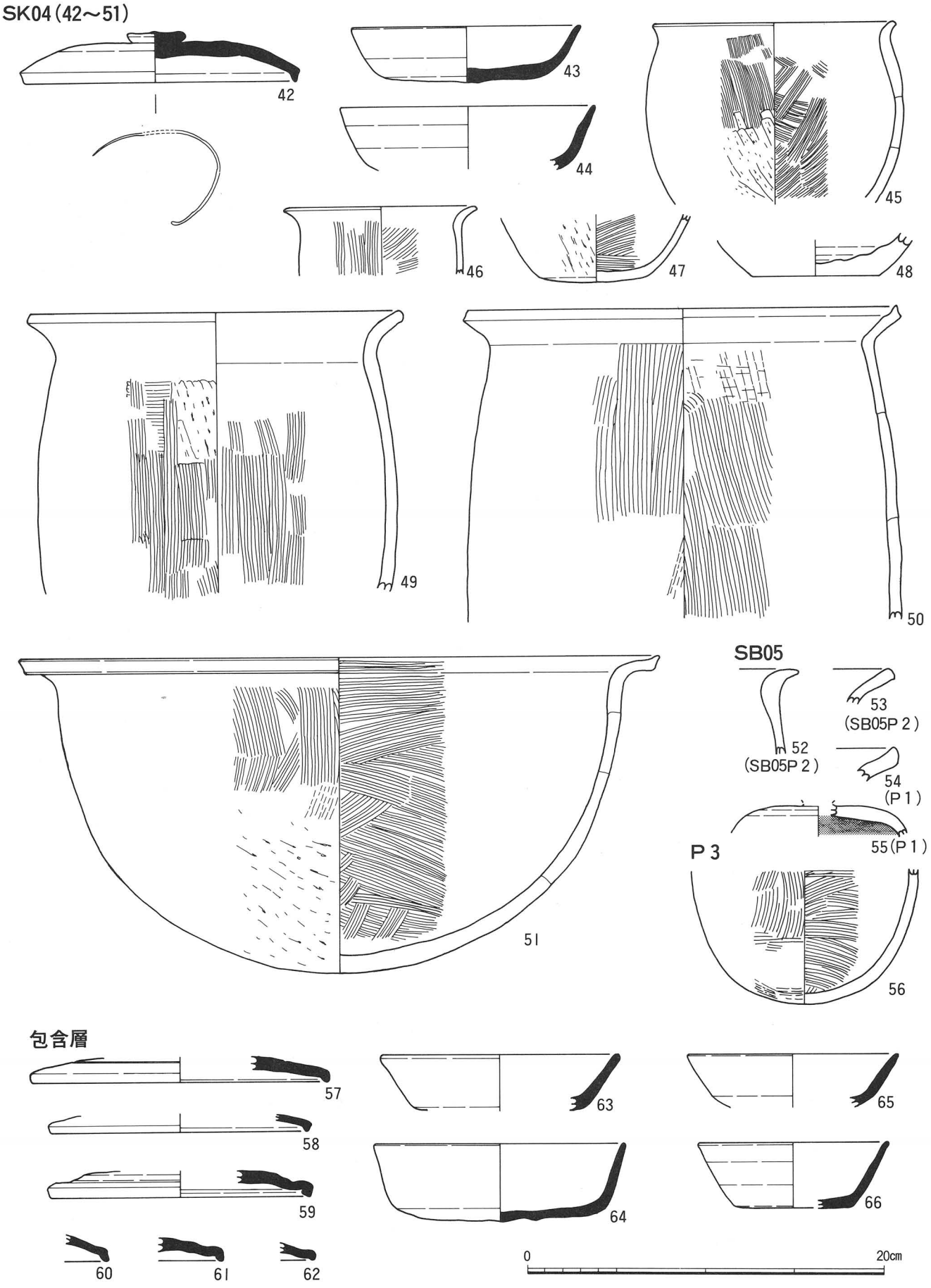
第16図　5地区ＳＤ02・道路跡付近の遺構



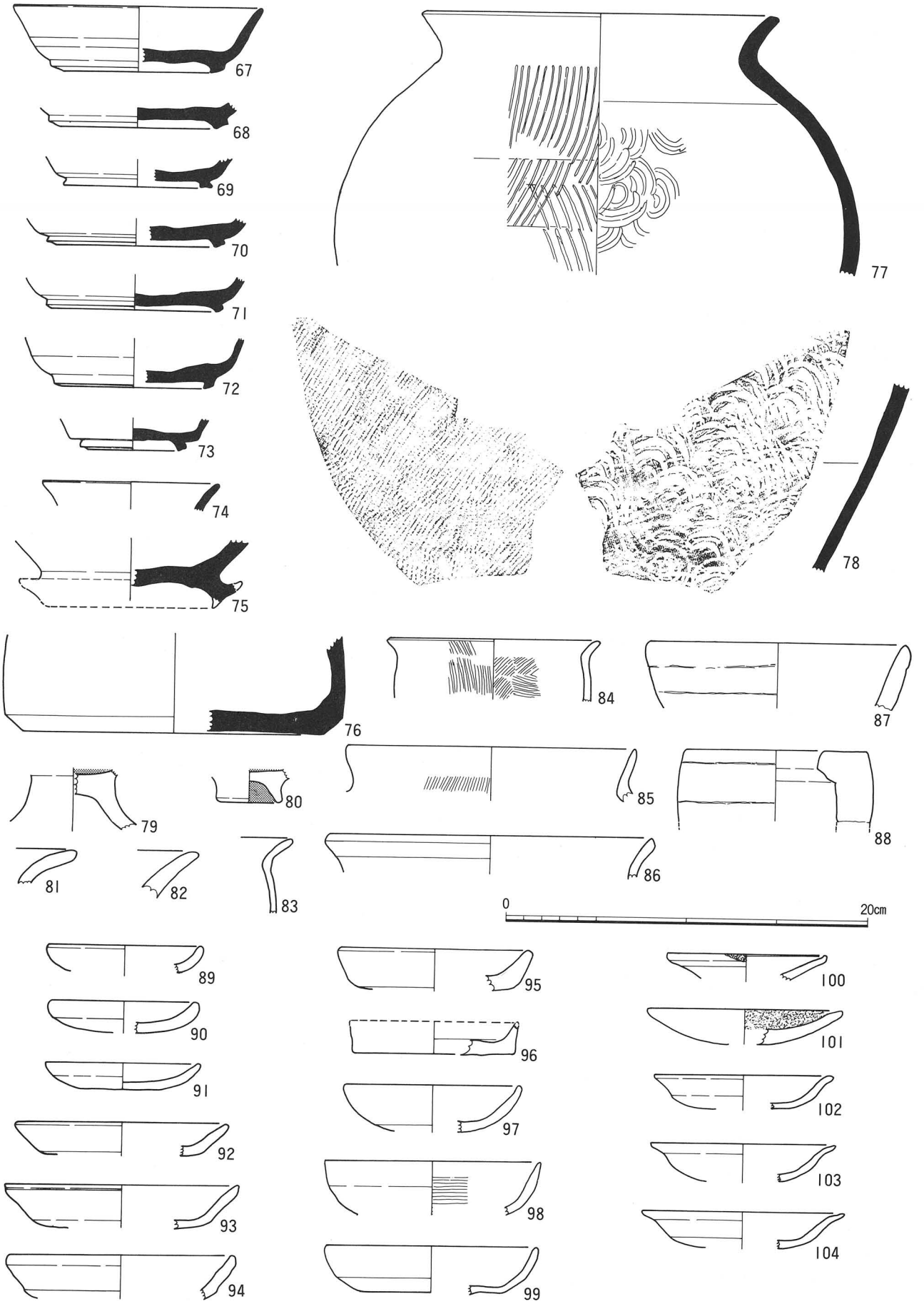
第17図　3地区出土遺物図(1)



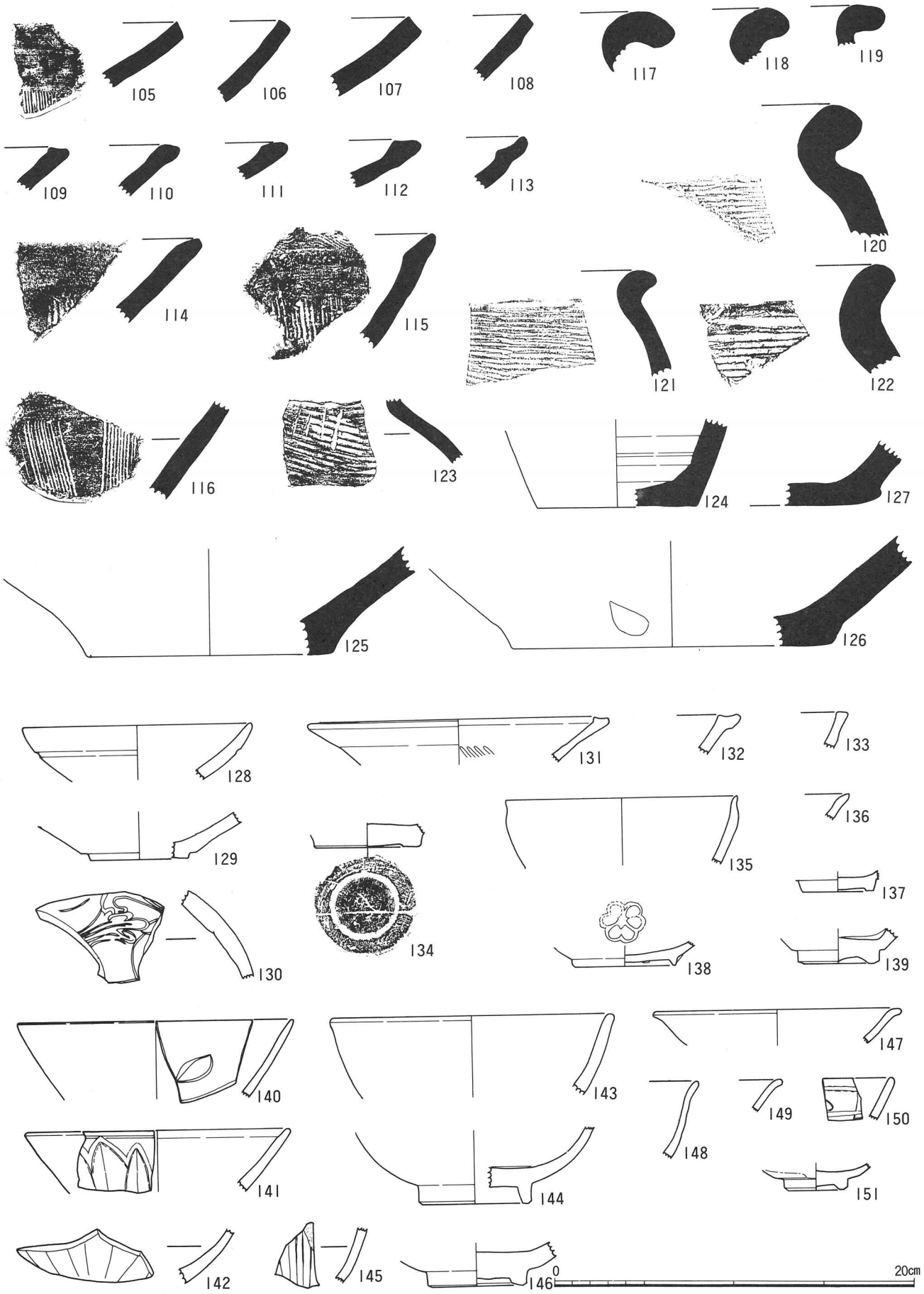
第18図　3 地区出土遺物図(2)



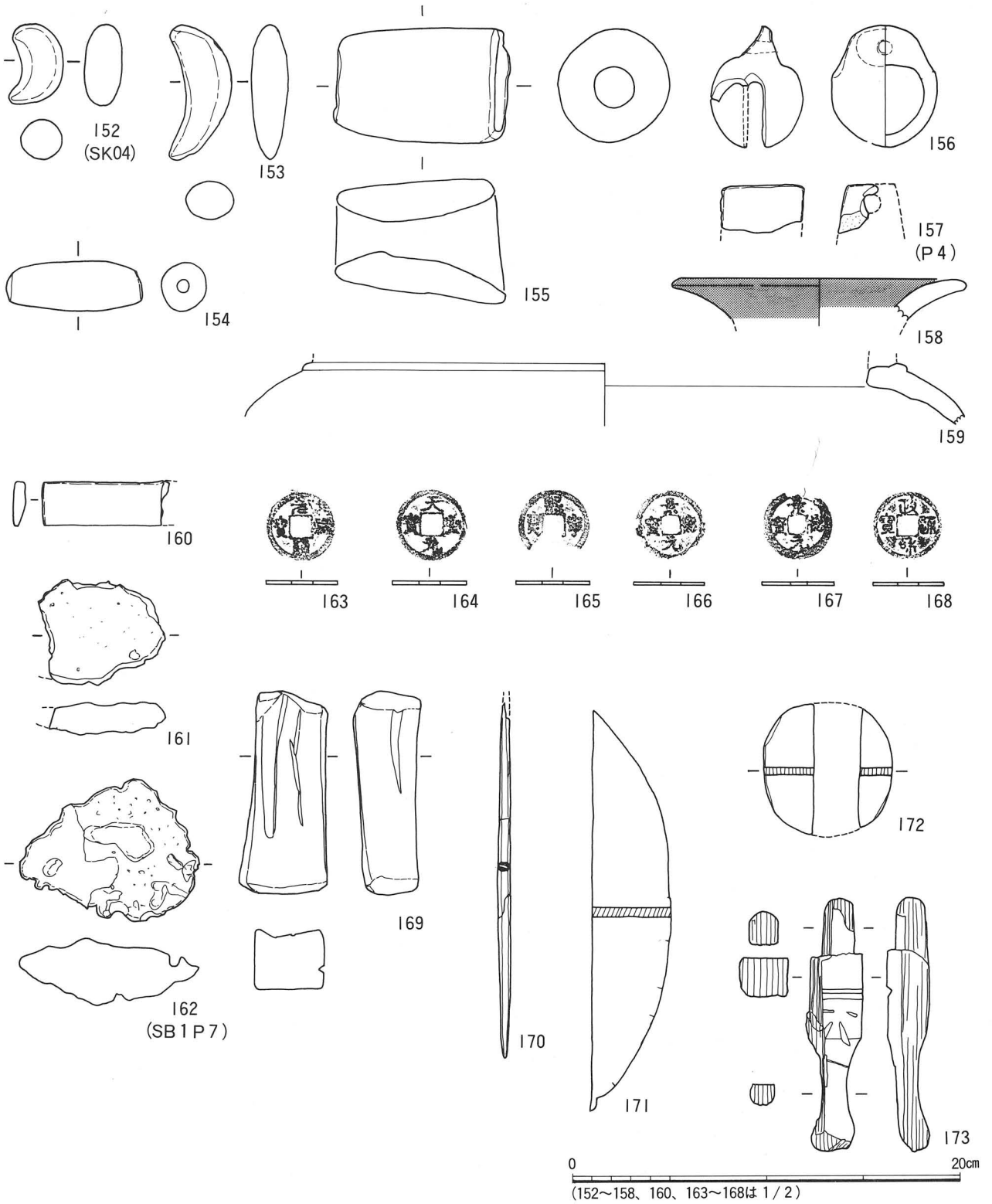
第19図　3 地区出土遺物図(3)



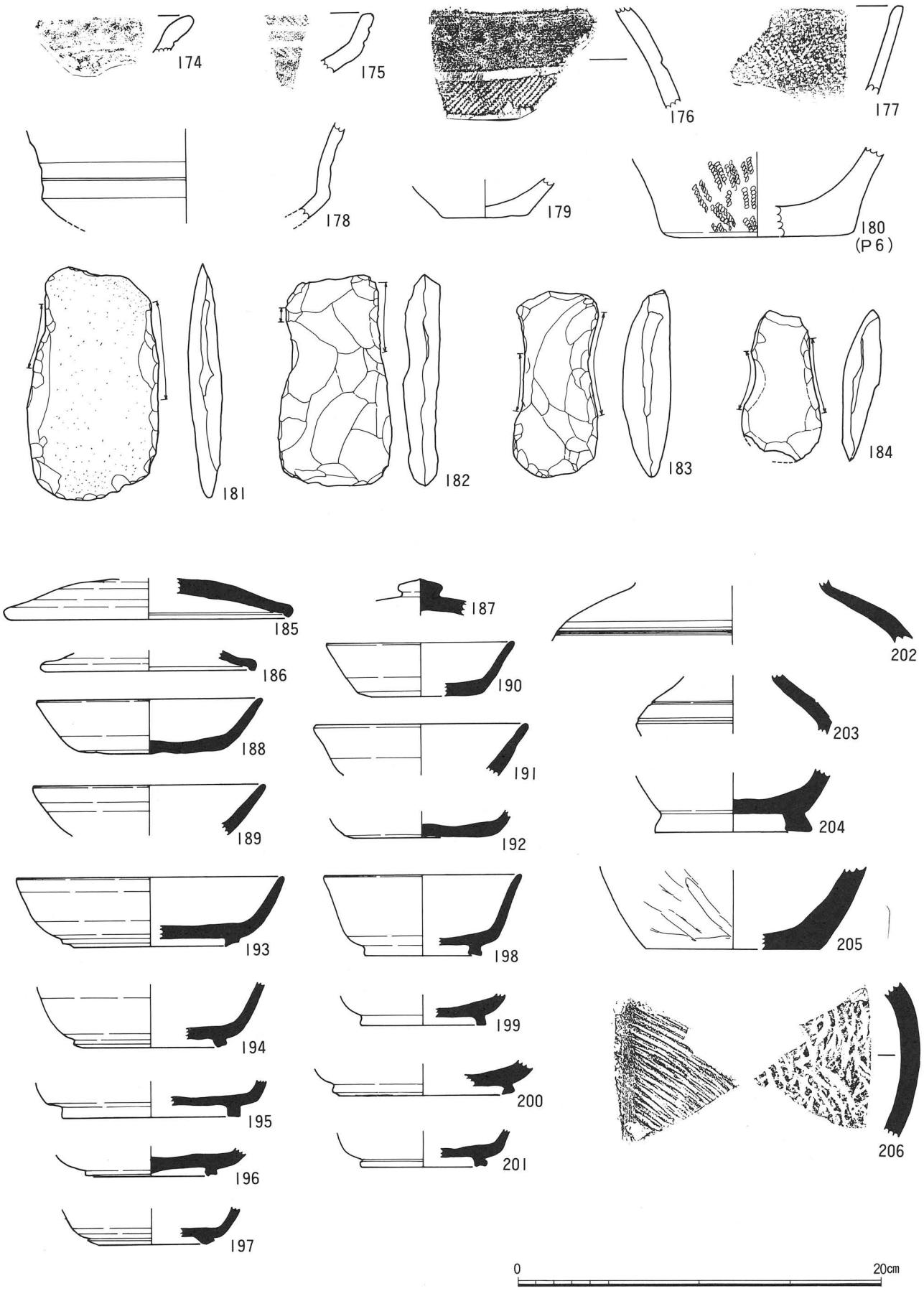
第20図　3 地区出土遺物図(4)



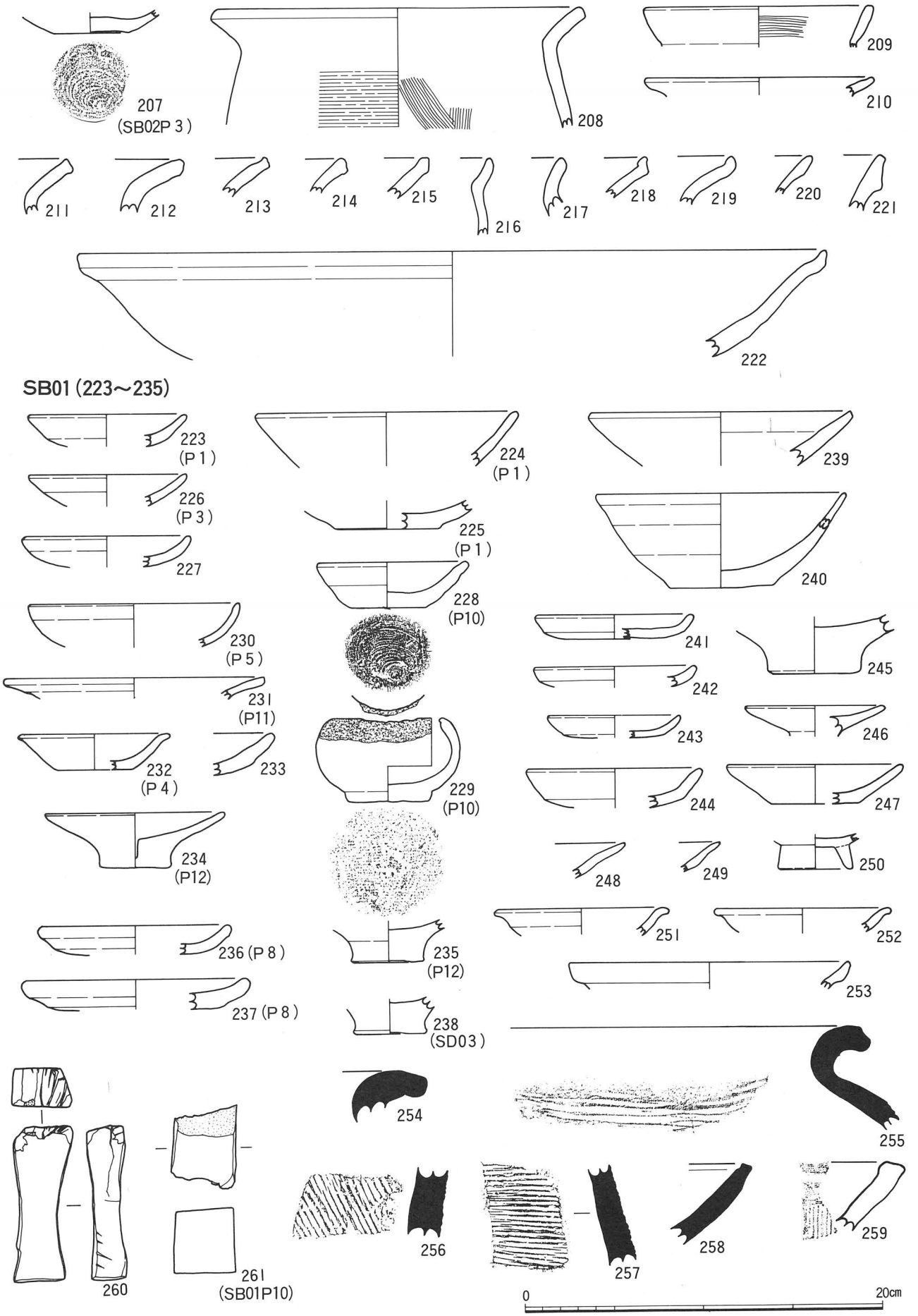
第21図　3 地区出土遺物図(5)



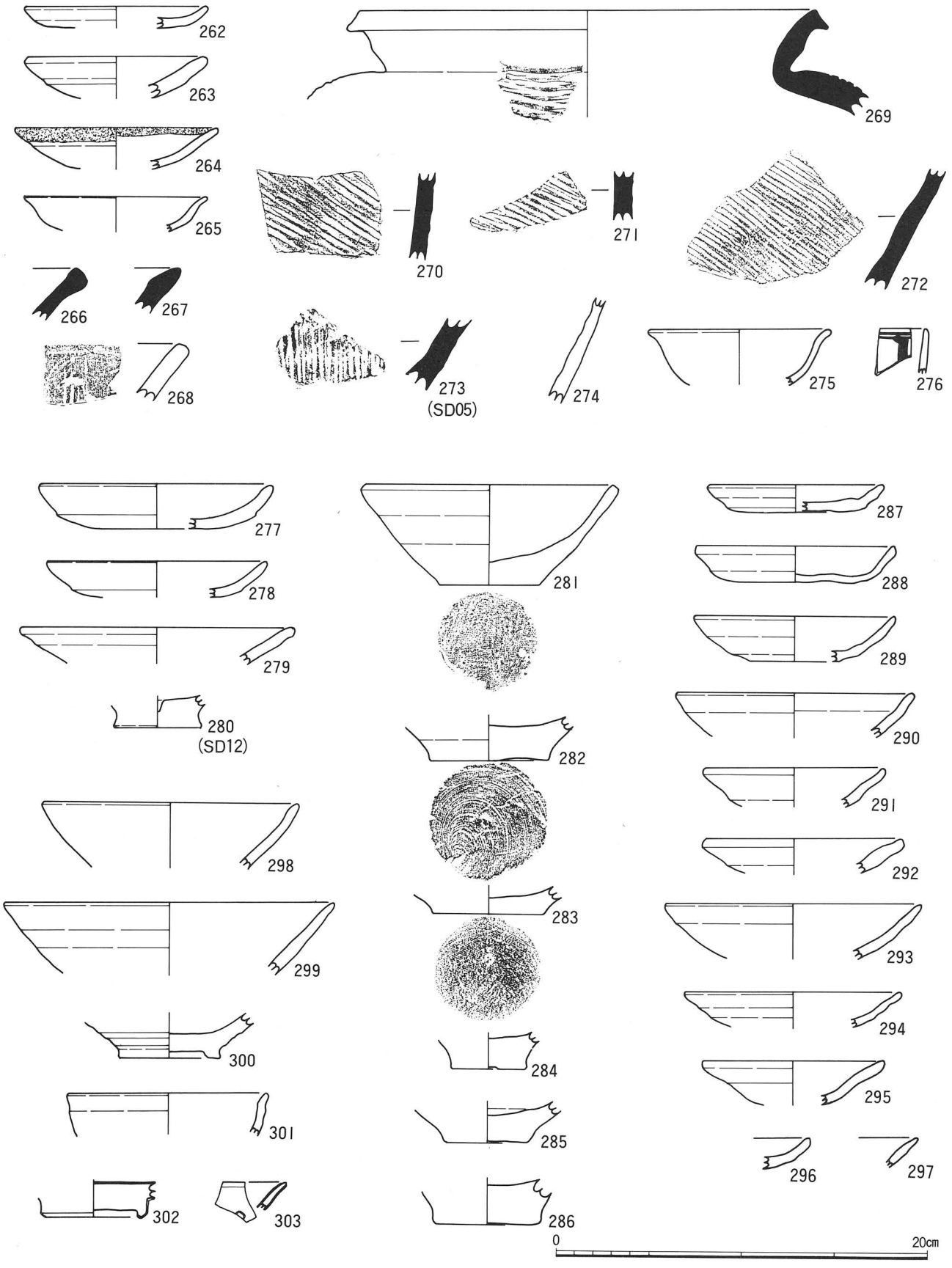
第22図　3地区出土遺物図(6)



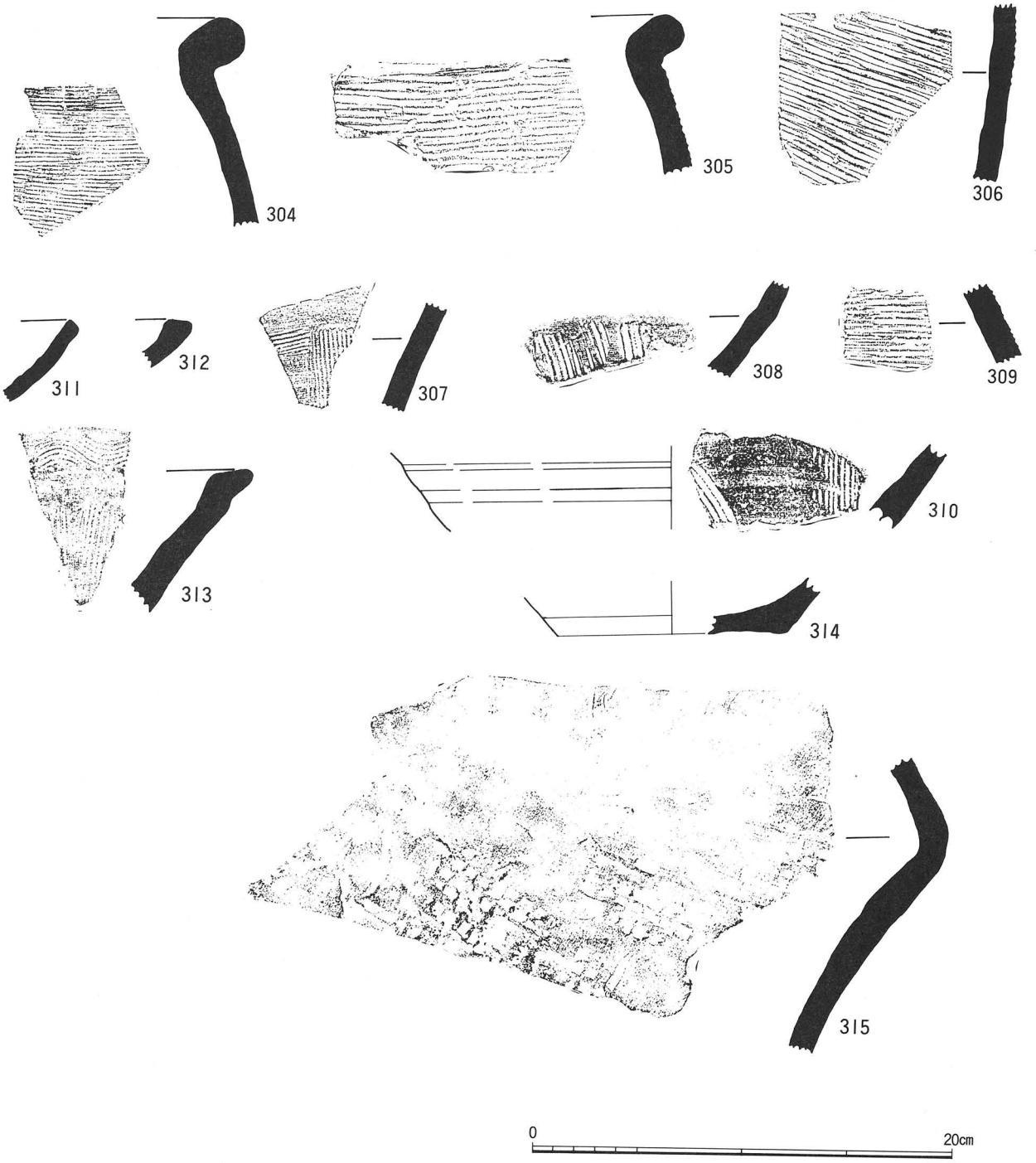
第23図　4地区出土遺物図(1)



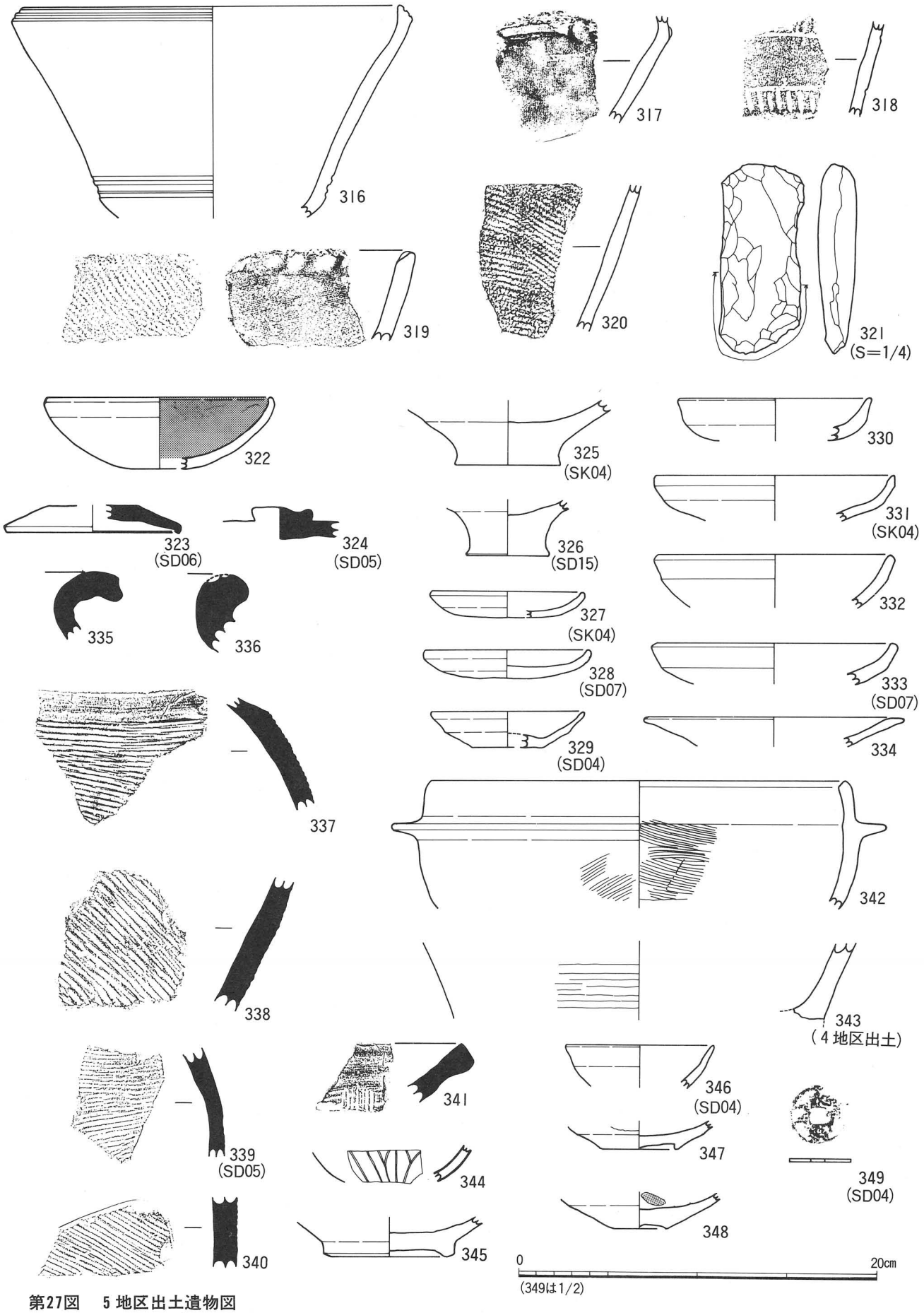
第24図　4 地区出土遺物図(2)



第25図　4 地区出土遺物図(3)



第26図　4 地区出土遺物図(4)



第27図　5地区出土遺物図

第28図　試掘調査位置と遺跡範囲（S＝1/2,000）

別表　平成６年度　県営ほ場整備（福光町梅原地区）にかかる埋蔵文化財包蔵地試掘調査結果一覧

対象遺跡名	調査対象面積	発掘面積	試掘調査結果			
			時代・性格	出土遺物	検出遺構	遺跡名・確認面積
梅原No.11遺跡	約46,000㎡	約1,166㎡	縄文 古代～中世 近世 集落跡	縄文土器（後期・晩期） 須恵器・土師器 中世土師器・珠洲 白磁 伊万里ほか近世陶磁器	掘立柱建物・土坑 溝状遺構・河川跡	梅原加賀坊遺跡 約18,500㎡
梅原No.12遺跡	約141,500㎡	約2,274㎡	縄文 古代～中世 近世 集落跡	縄文土器（後期） 須恵器・土師器 灰釉陶器・中世土師器 珠洲・越前・瀬戸美濃 青磁・白磁・瓦質陶器 越中瀬戸・伊万里ほか 近世陶磁器・石臼 近代陶磁器	掘立柱建物・土坑 竪穴状土坑・井戸 溝状遺構・河川跡	梅原落戸遺跡 約105,750㎡ 梅原胡摩堂遺跡 約61,000㎡
計	約187,500㎡	約3,440㎡				約185,250㎡

※1　調査対象面積は宅地・道路等を含めた区域全体を表す。このうち、ほ場整備の工事対象区域の面積は約130,000㎡である。
※2　遺跡の確認面積は、平成６年度調査対象地内における各遺跡の広がりであり、当該遺跡全体の面積を表すものではない。

図　　版

図版 1

3 地区の遺構(1)

1.遺跡遠景
(上空北から)

2. 3 地区全景(南から)

3. SB05・SK04
(西から)

図版 2

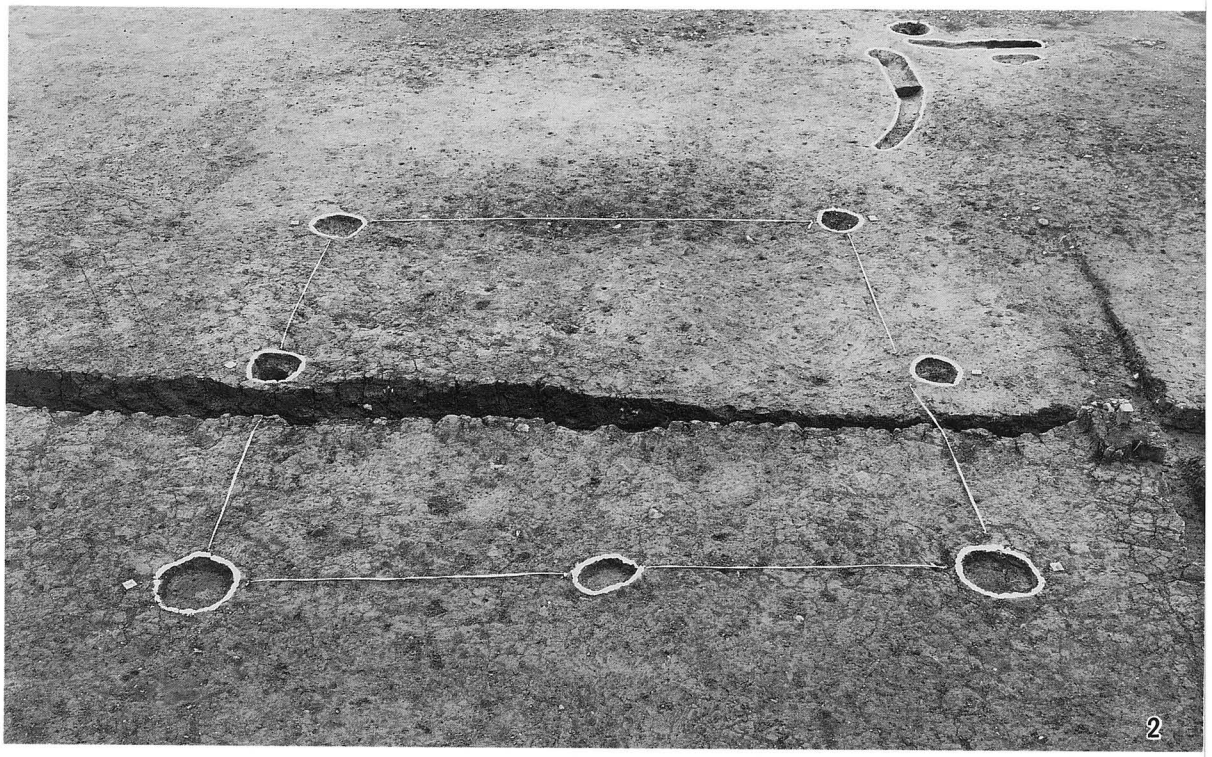
3 地区の遺構(2)

1.全景(上空から)

図版 3

3 地区の遺構(3)

1. SB01(西から)



2. SB06(西から)

3.縄文土器集中地区と
古代穴群(西から)

図版 4

3 地区の遺構(4)

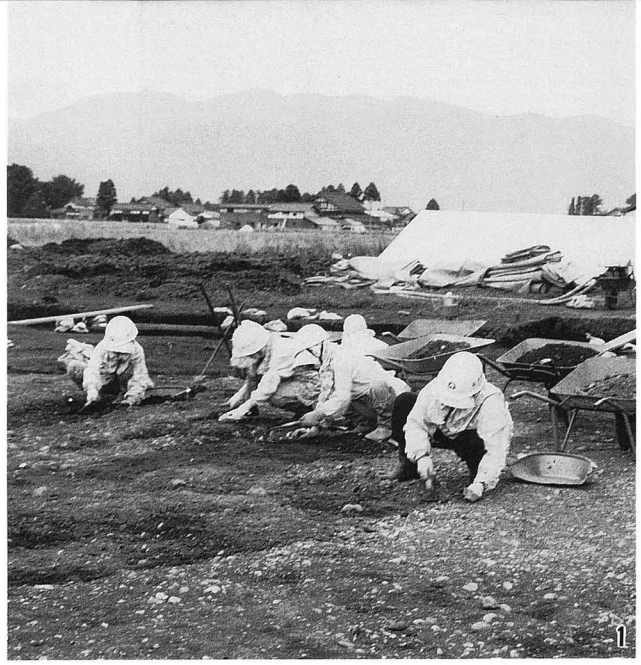
1. SB03・04
(西から)

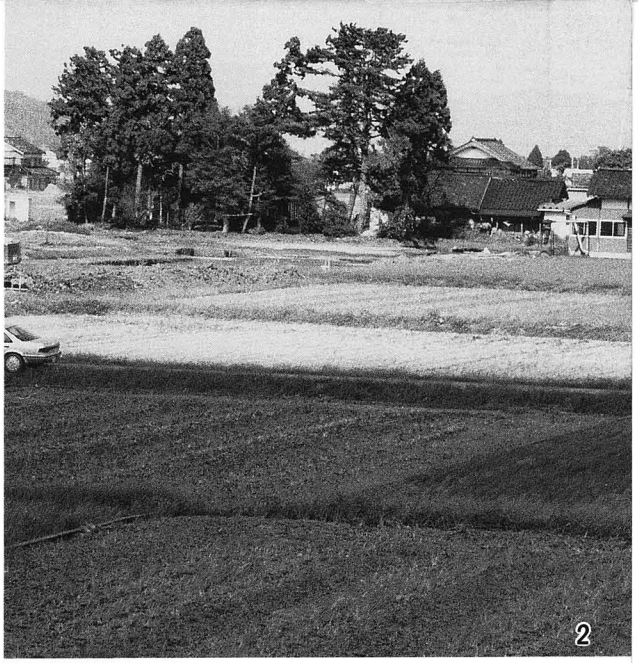
2. SB02・SK01
(西から)

3. 縄文時代の川跡
(南から)

図版 5

3 地区の遺構(5)





1.調査風景

2.遺跡近景
(南東から)

3. SK04の土層
(北から)

4. SK04近景
(西から)

5. SK01の土層
(南から)

6. SK01近景
(北から)

7. SK03の土層
(東から)

8.縄文時代川跡の
土層(南から)

図版 6

4 地区の遺構(1)

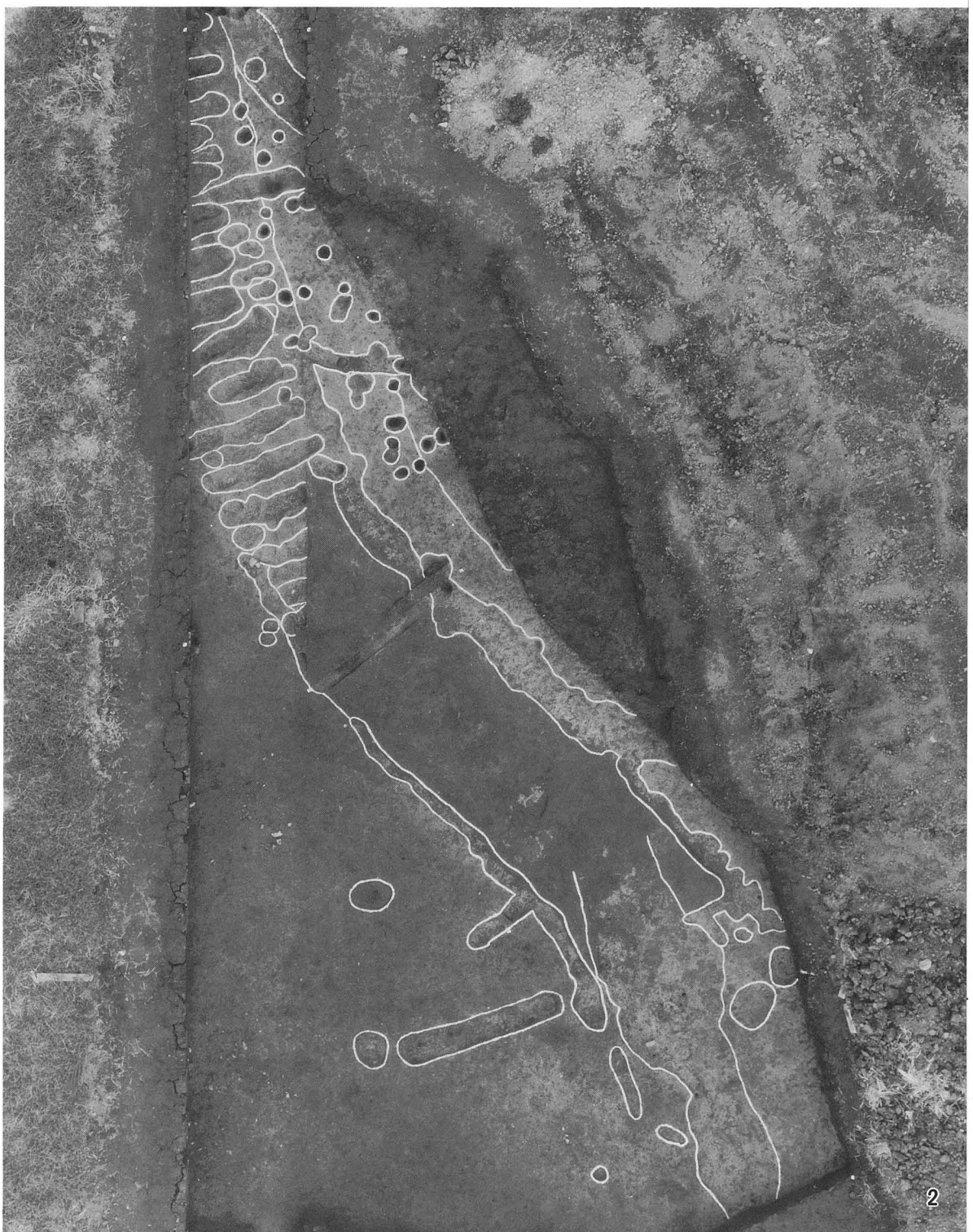
1.4地区遠景(南から)

2.道路跡(南東から)

図版 7

4 地区の遺構(2)

1. SB01・SD01・02
近景(南から)



2.道路跡(上空から)

図版 8

4 地区の遺構(3)

1. SB01(上空から)

2. SD10～13、P5・6
付近(上空北から)

3. SD10～13近景
(南から)

4. P6 近景(北から)

図版 9

4 地区の遺構(4)

1.調査風景

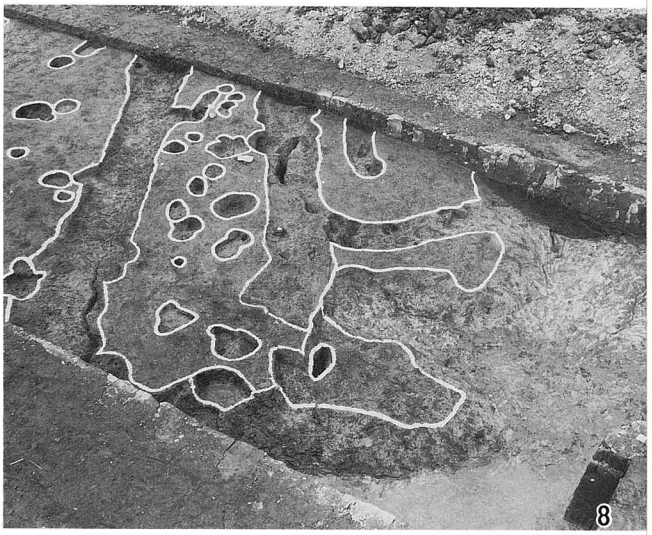
2. SB01 P6 柱の出土状況

3.道路跡の土層

4.道路跡(北西から)

5.噴砂

6.ラジコンヘリによる撮影



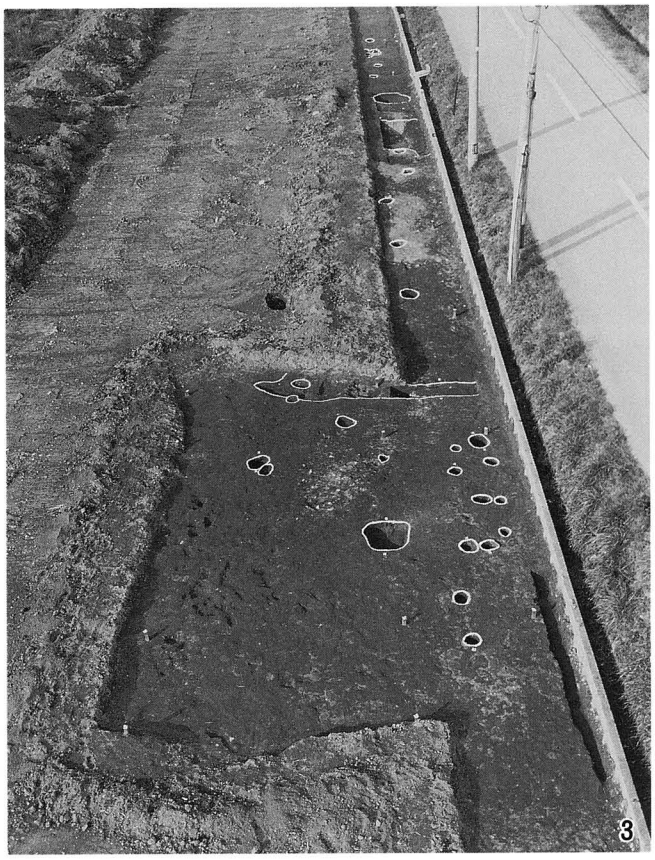
7.噴砂の土層

8. SD11・12・13(東から)

図版10

5 地区の遺構(1)

1. 5 地区遠景
(上空南から)



2. SK04、SD15付近
(上空北から)

3. SK05、SD16付近
(上空南から)

4. 道路跡、SD03・04付近(上空から)

図版11

5 地区の遺構(2)

1. SD07(南から)

2. SD05・08(南から)

3. SD07土器出土状況

4. SD08土器出土状況

図版12

5 地区の遺構(2)

1. X181～198 Y25～70
付近(南西上空より)

2. X150 Y55～70付近
の近代の穴と溝群
(上空より)

3. SD15の土層
(東から)

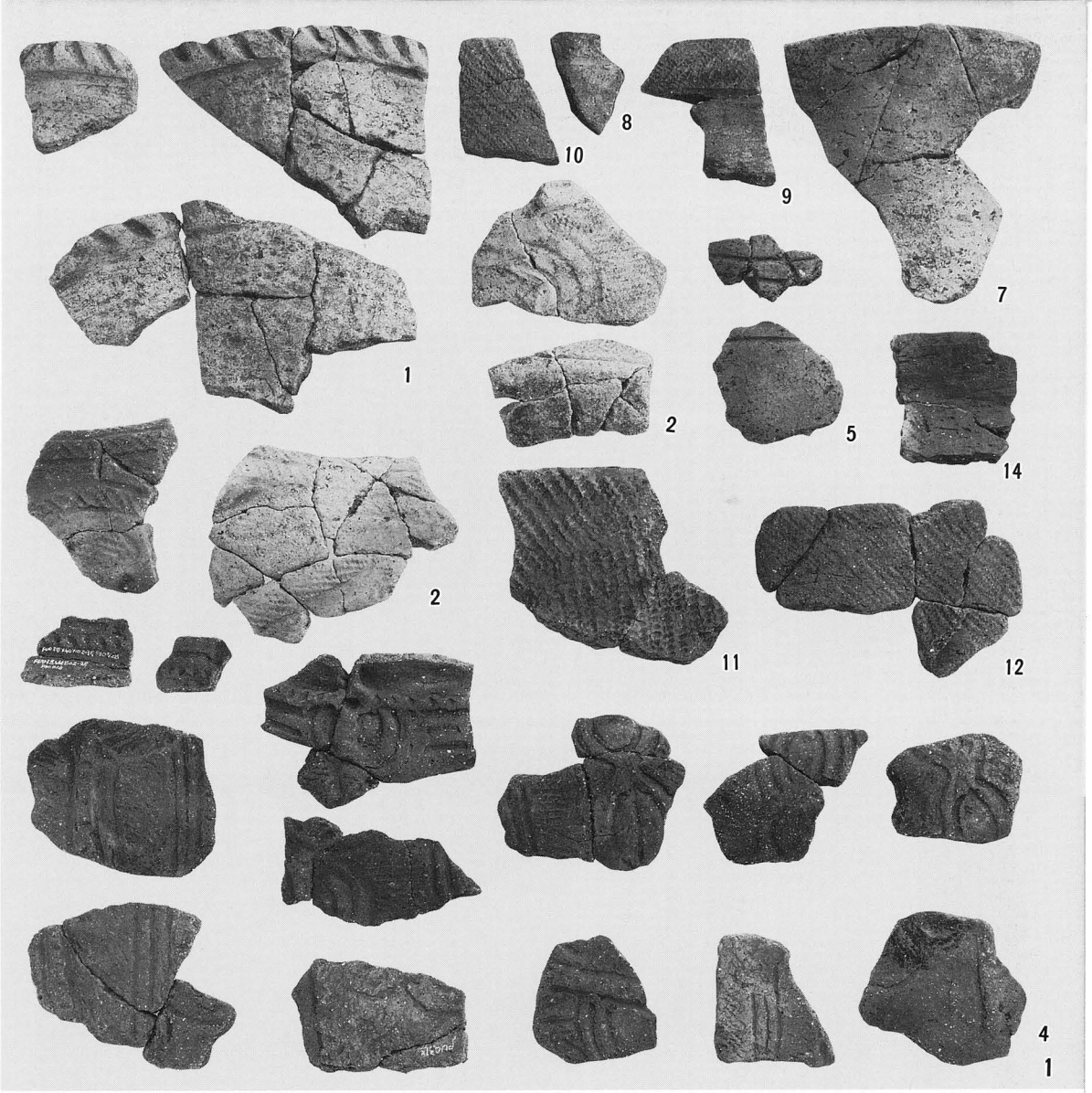
4.作業風景

図版13

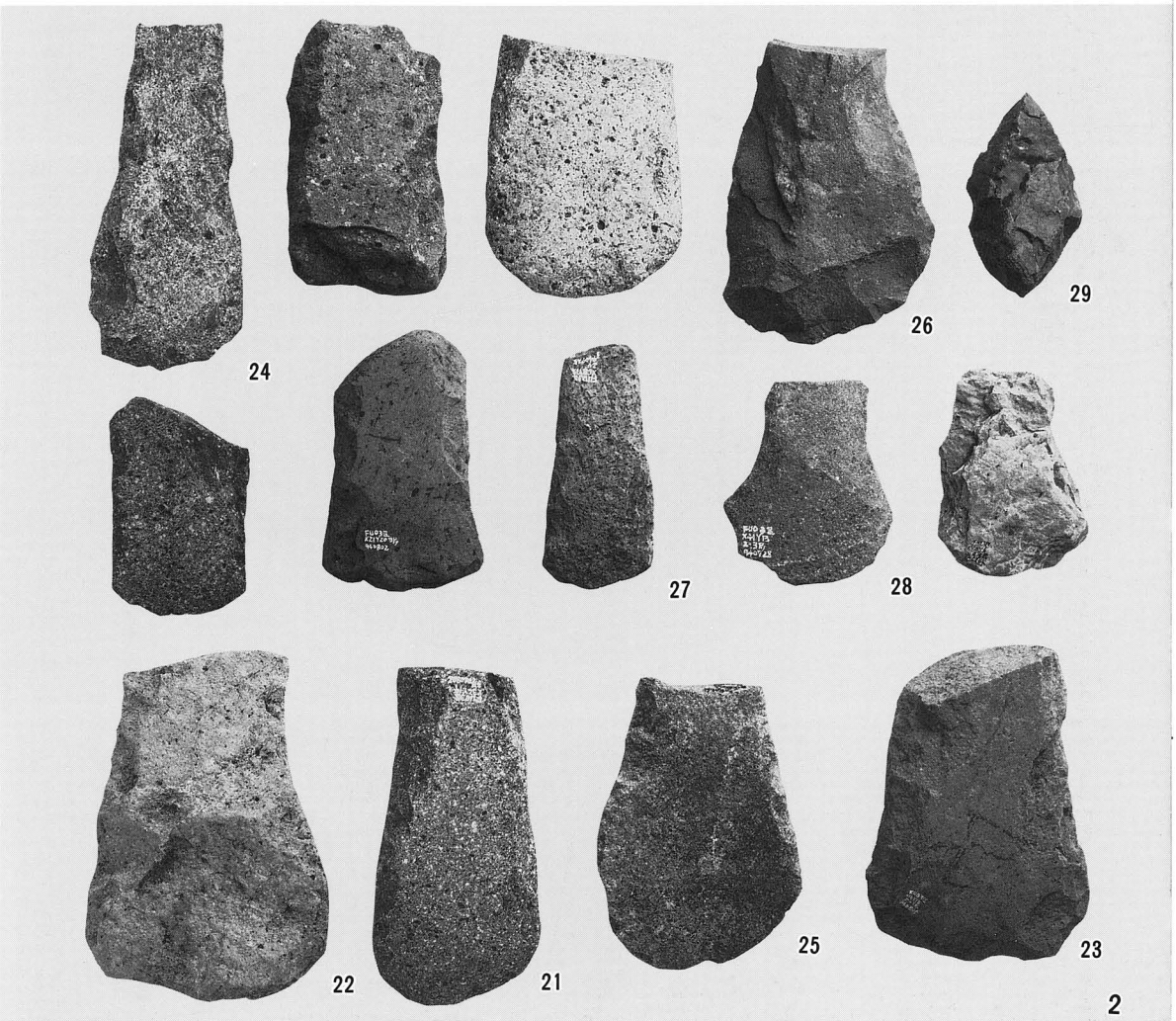
3 地区の遺物(1)

1：3

縄文土器

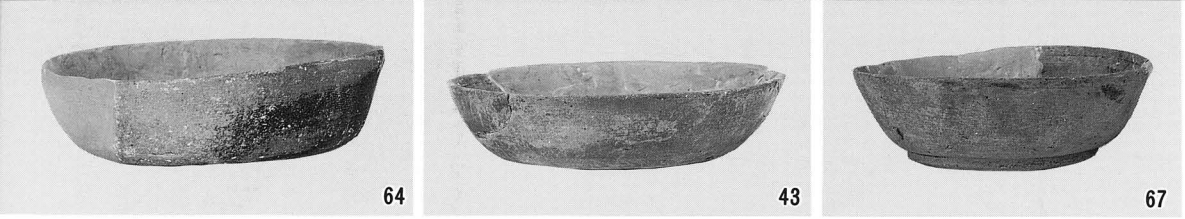


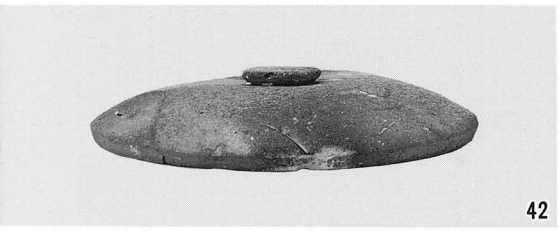
打製石斧・削器

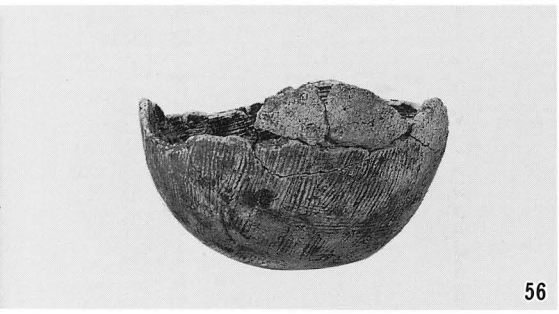


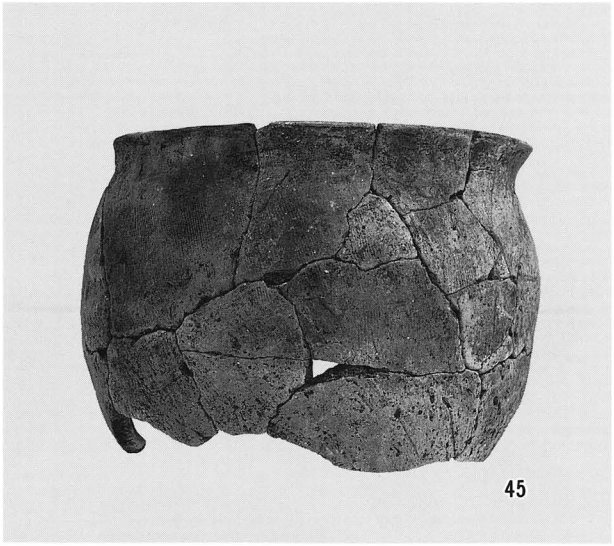
図版14

3 地区の遺物(2)
1：3





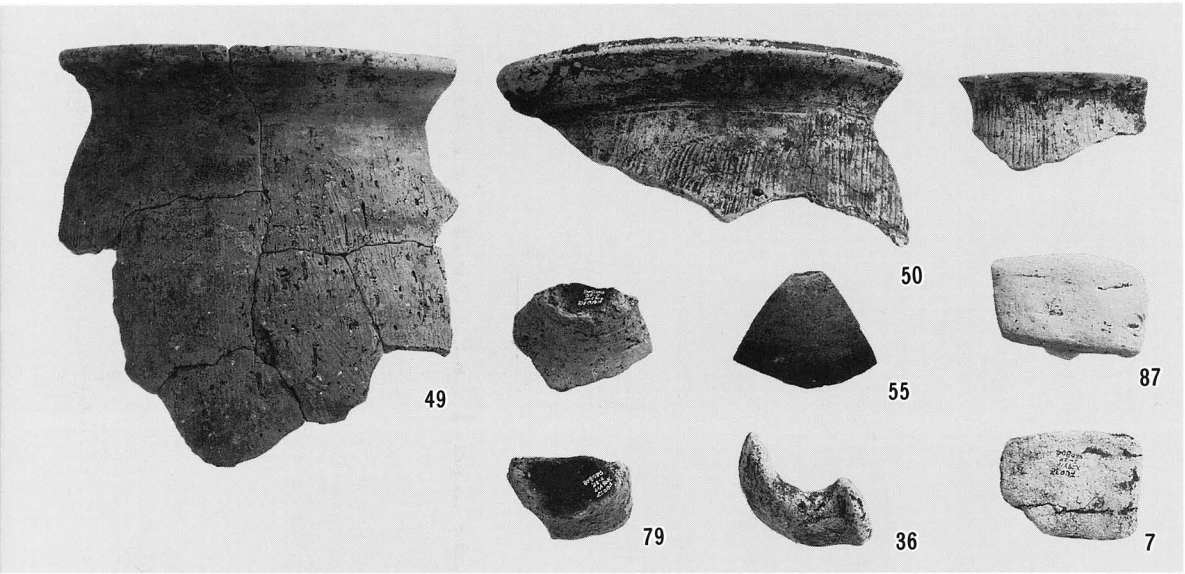




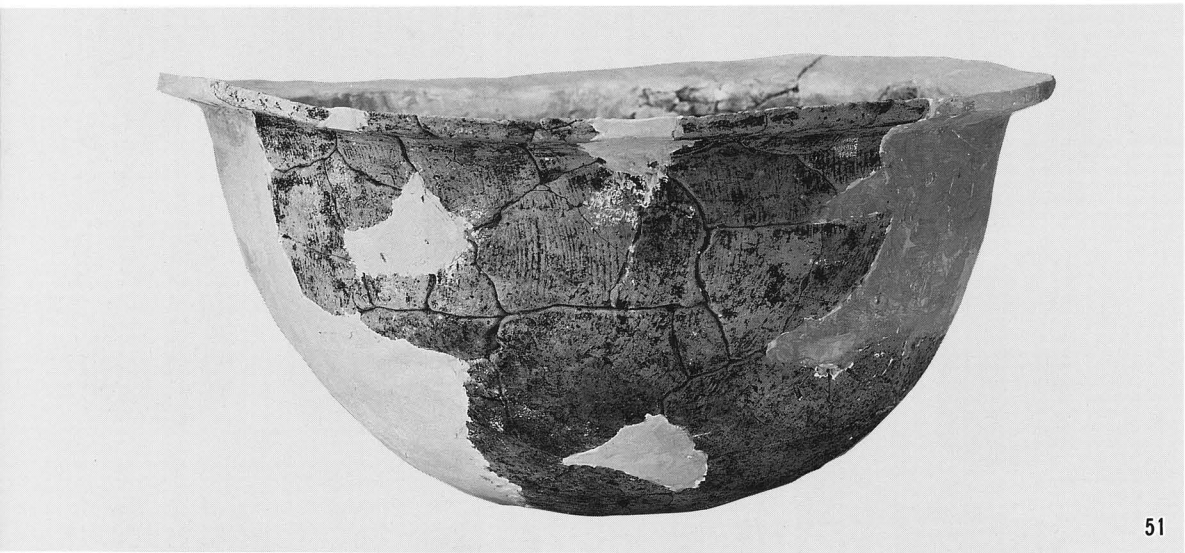
上、須恵器杯

左上、須恵器杯蓋

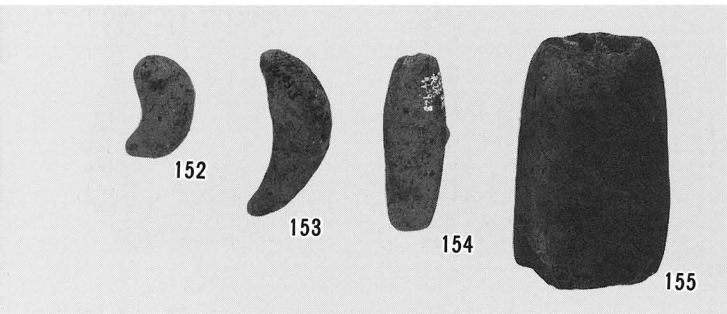
左下・右、土師器小型甕

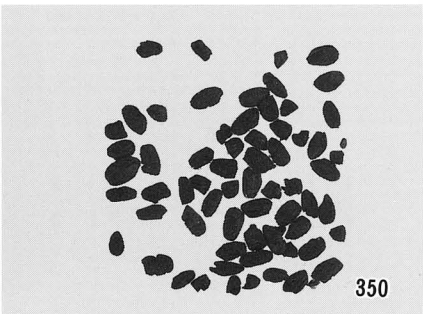


土師器甕ほか



土師器鍋





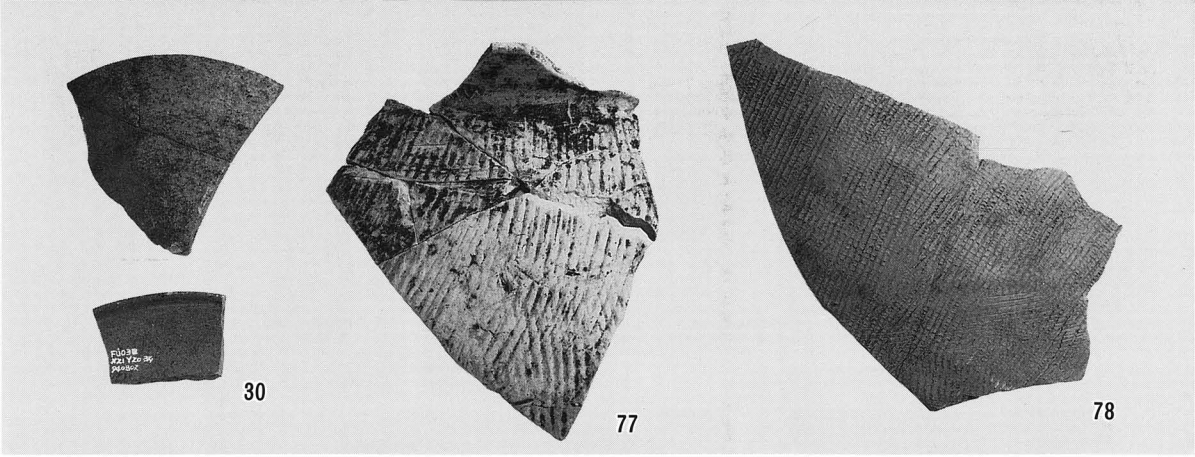
左、土製勾玉・土錘
（1：2）
右、炭化米（1：1）

図版15

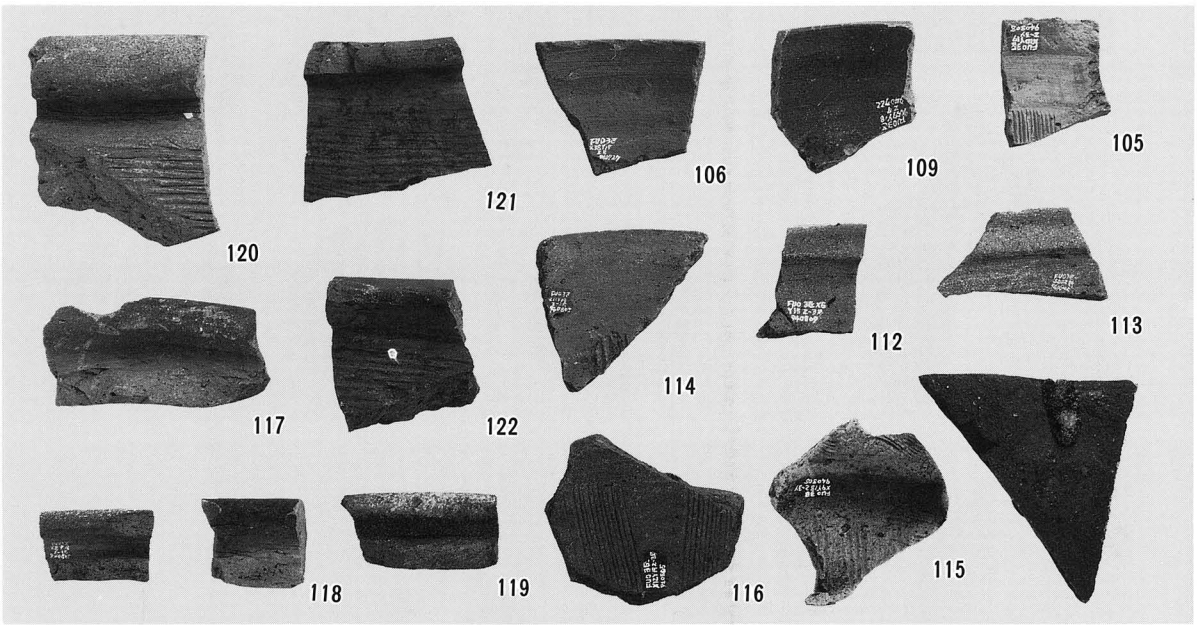
3 地区の遺物(3)

1：3

須恵器

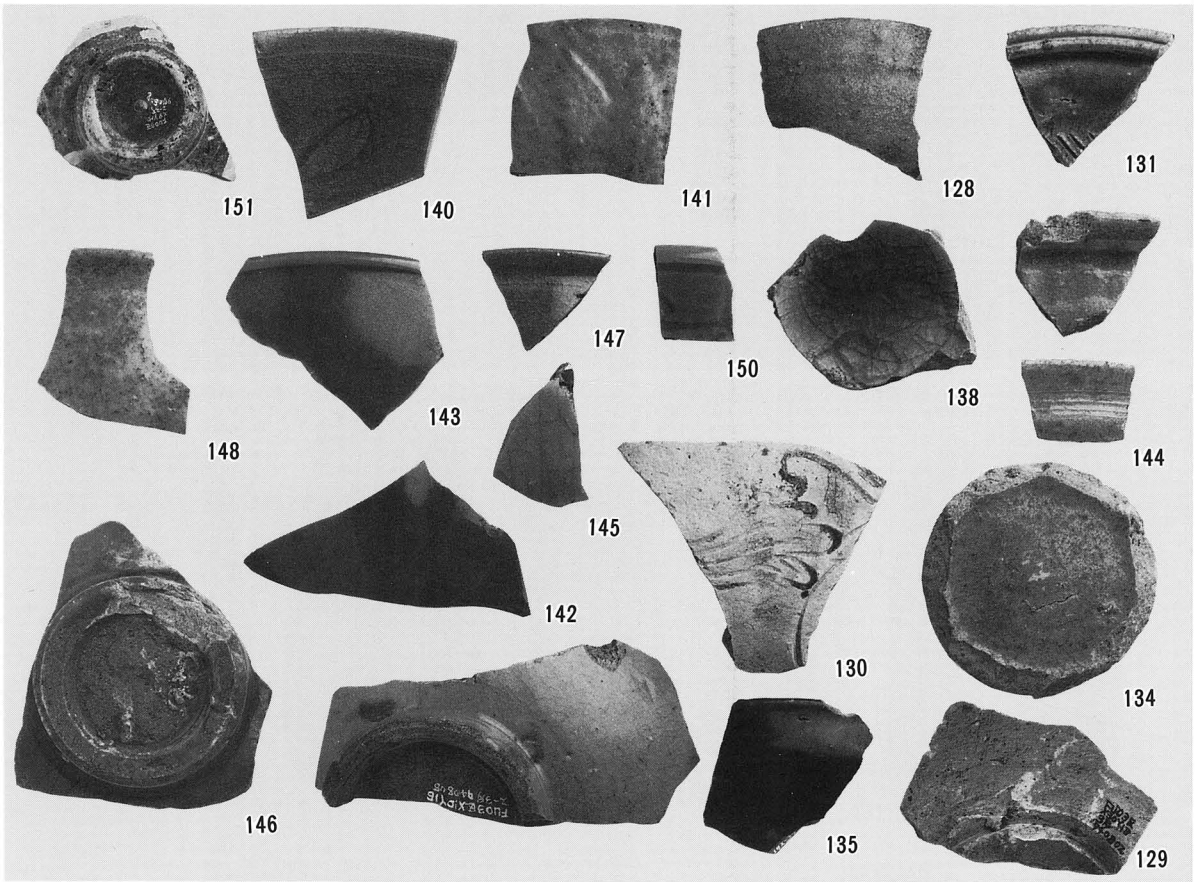


珠洲・越前

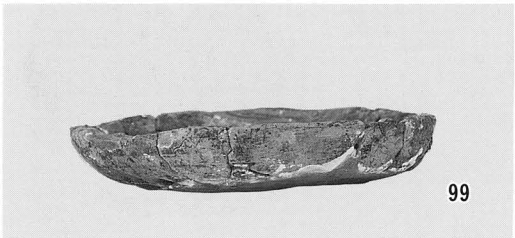


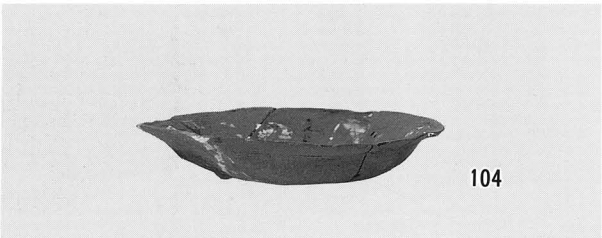
白磁・青磁、瀬戸美濃

(1：2)



土師質小皿





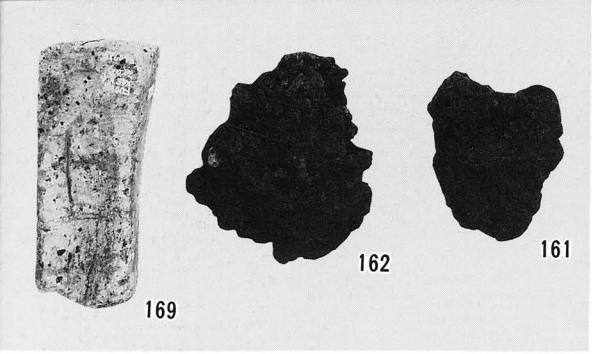
図版16

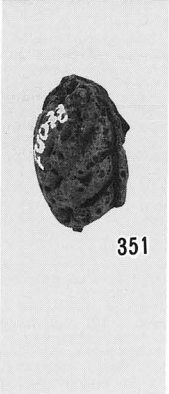
3 地区の遺物(4)

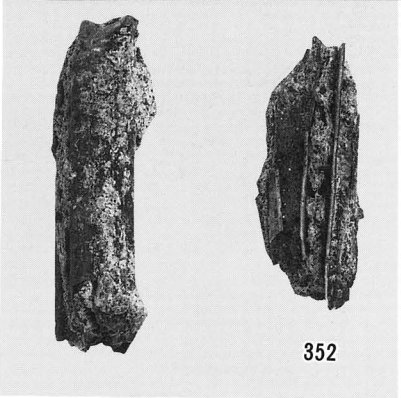
左、砥石・鉄滓(1：3)

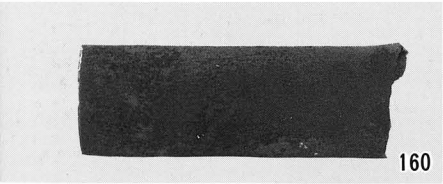
中、桃の核(1：1)

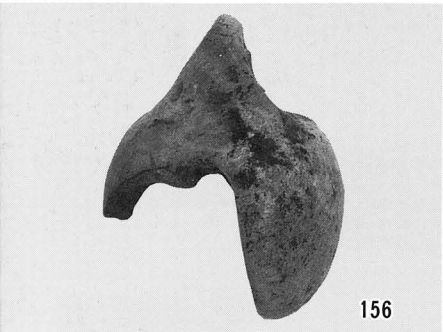
右、馬と思われる歯
(1：1)

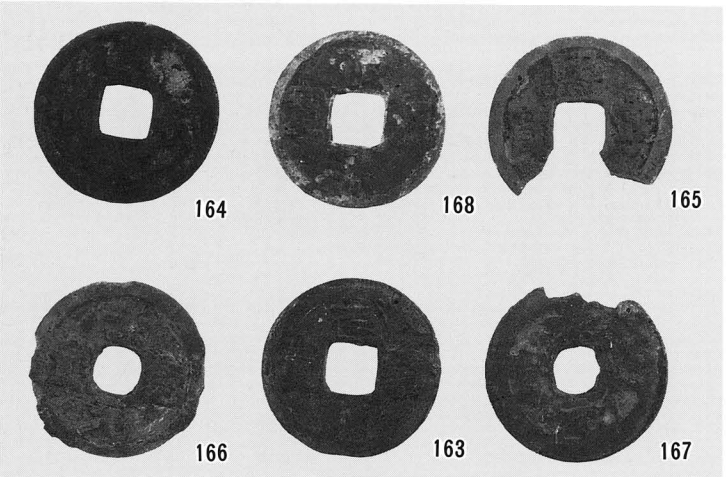








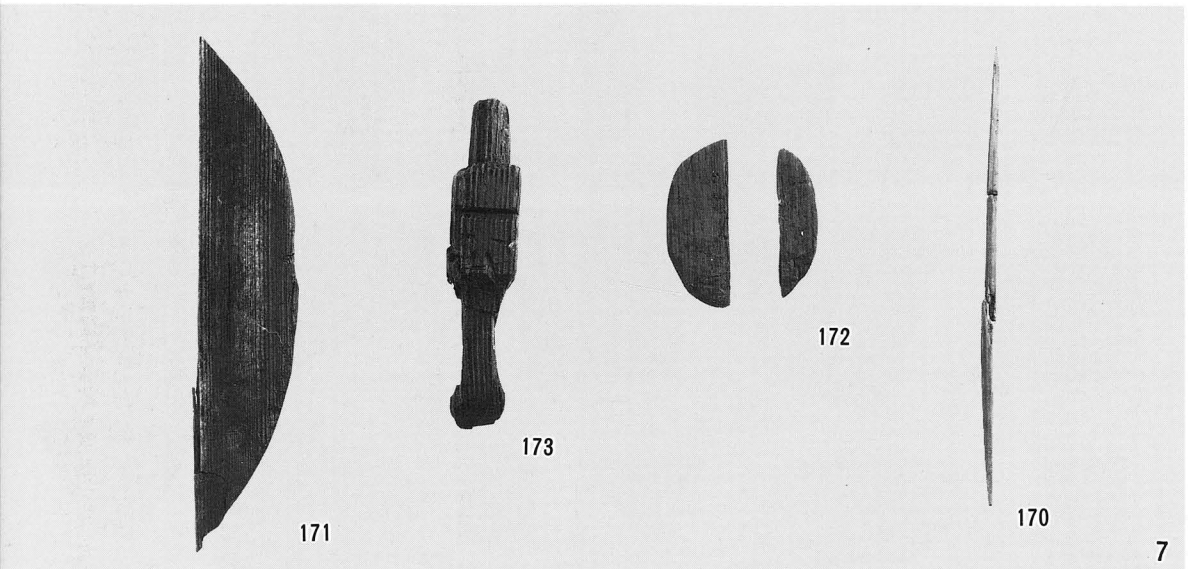




左上、小柄(1：1)

左下、土鈴(1：1)

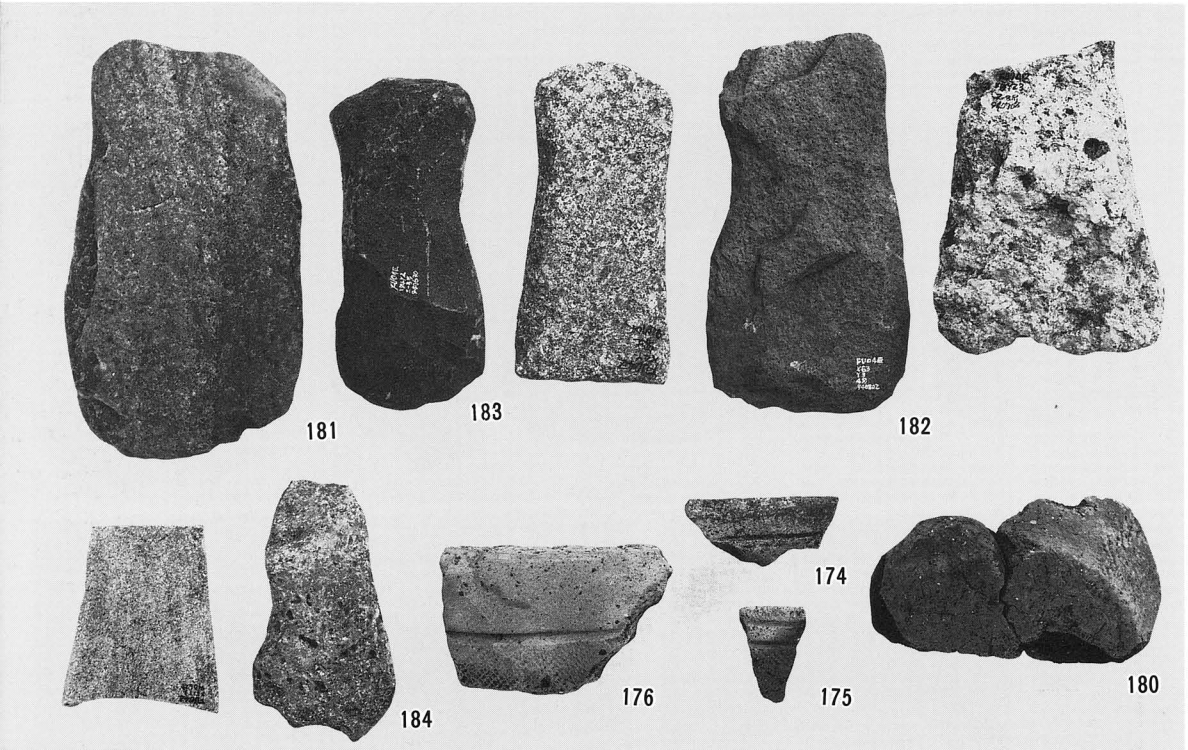
右、銭(1：1)



木製品(1：3)

4 地区の遺物(1)

1：3

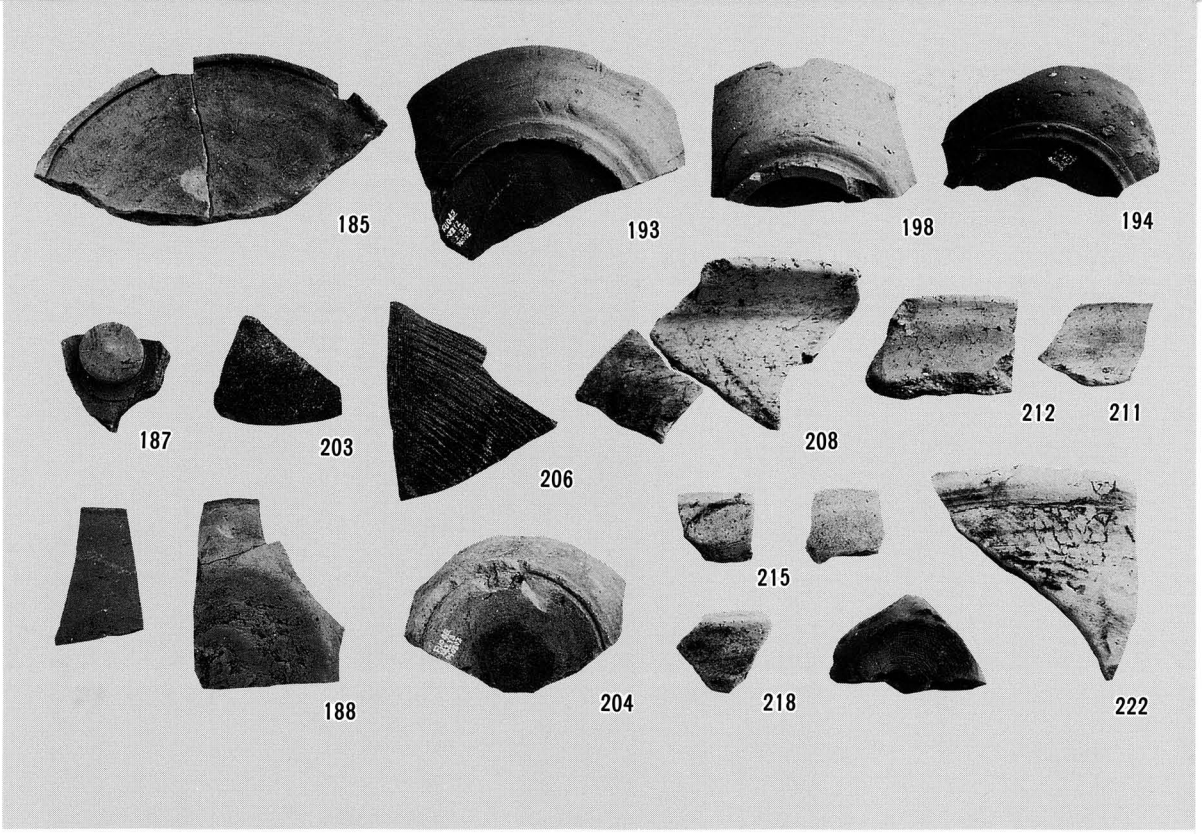


打製石斧・縄文土器

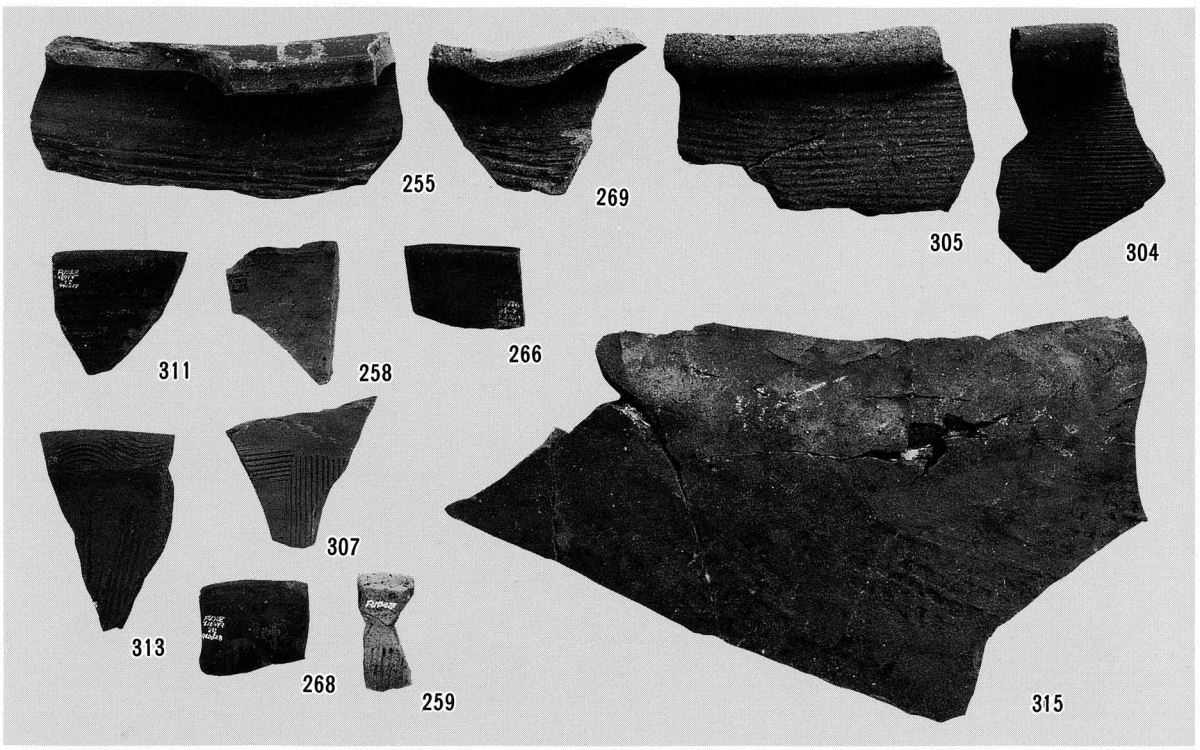
図版17

4 地区の遺物(2)

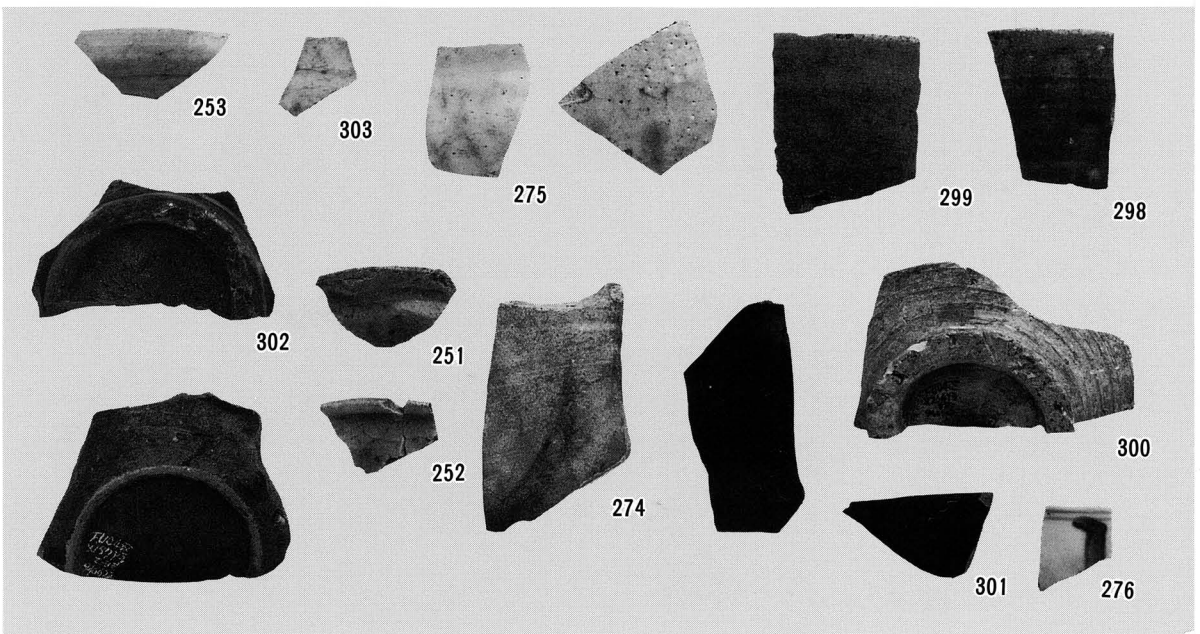
1：3



須恵器・土師器



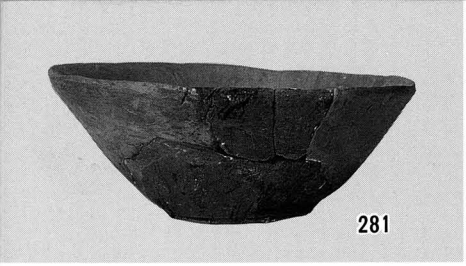
珠洲・越前

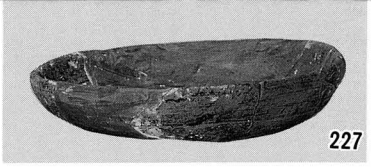


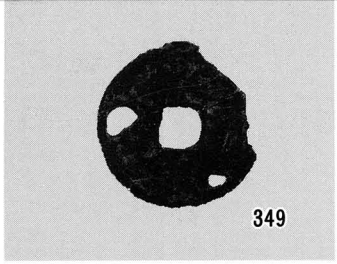
白磁・青磁・瀬戸美濃
越中瀬戸・青花
(1：2)

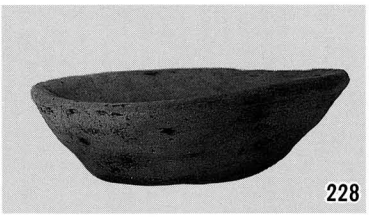
図版18

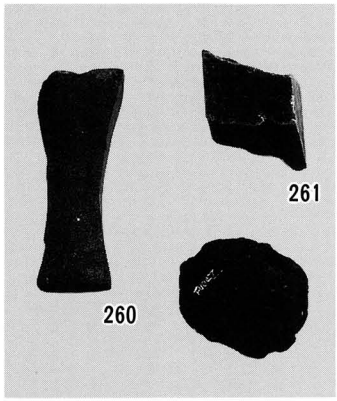
4 地区の遺物(3)









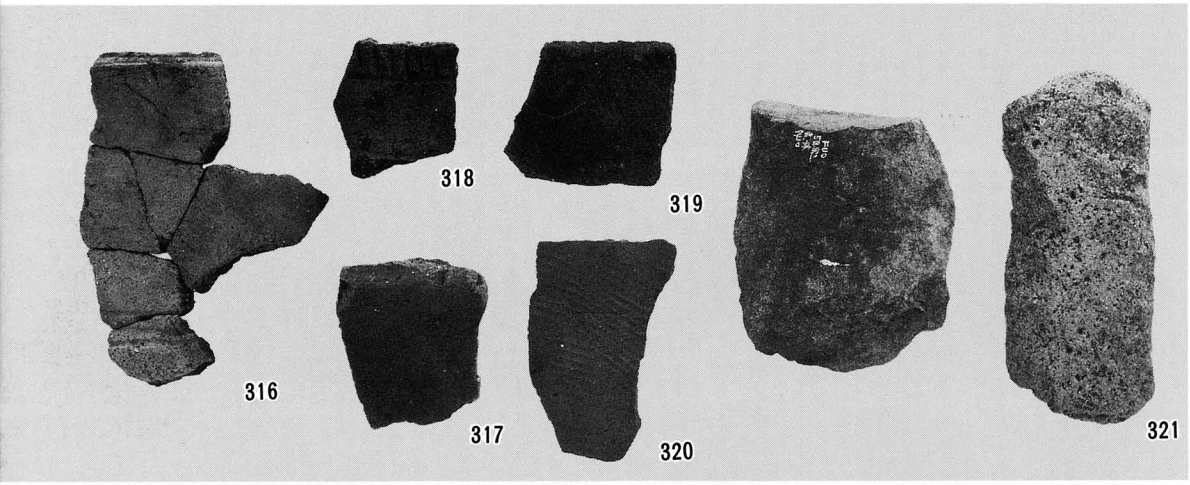


左・中、土師質小皿
(左1：3、中1：2)

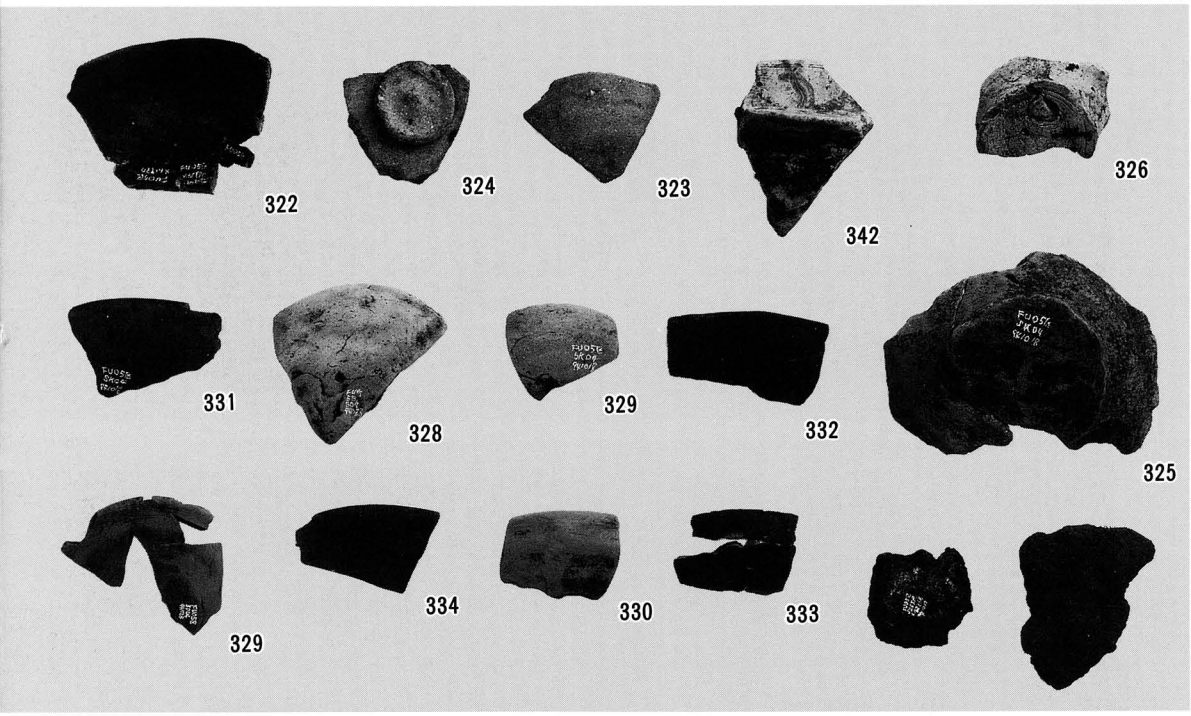
右上、銭（1：1）5地区
右下、砥石・鉄滓（1：3）

5 地区の遺物

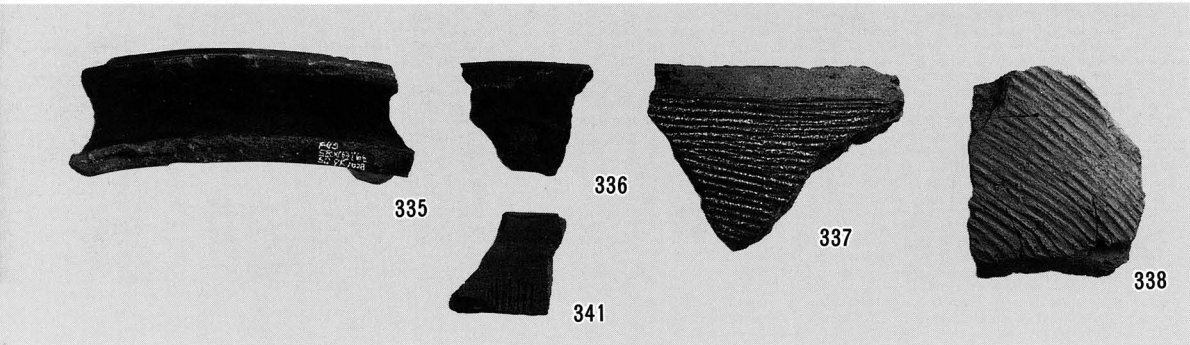
1：3



縄文土器・打製石斧



土師器・須恵器
土師質小皿・羽口
鉄滓



珠洲

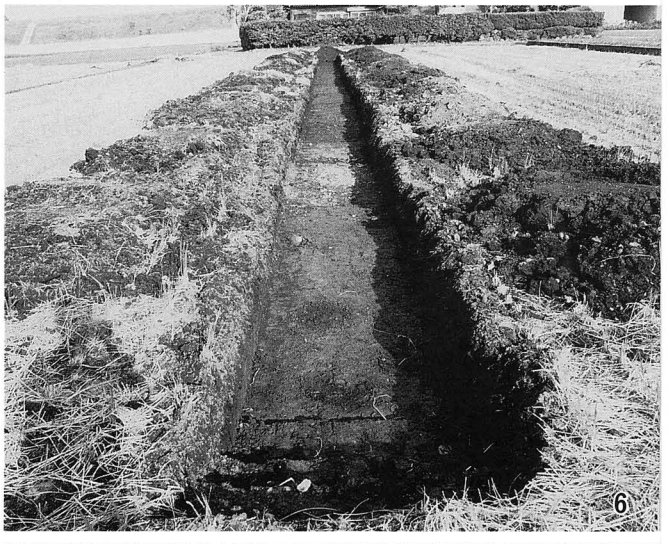
図版19

1.作業風景

2.遺構検出状況
(柱穴：4T)

3.遺構検出状況
(柱穴：9T)

4.遺構検出状況
(噴砂：24T)



5.遺構検出状況
(掘立柱建物
：27T)

6.遺構検出状況
(土坑：32T)

7.遺構検出状況
(掘立柱建物
：43T)

8.遺構検出状況
(掘立柱建物
：44T)

図版20

1.遺構検出状況
(掘立柱建物
：55T)

2.遺構検出状況
(掘立柱建物
：66T)

3.遺構検出状況
(風倒木痕
：74T)

4.遺構検出状況
(土坑：80T)

5.遺構検出状況
(柱穴、土坑
：89T)

6.遺構検出状況
(柱穴：92T)

7.遺構検出状況
(竪穴遺構
：92T)

8.遺構検出状況
(柱穴・土坑
：93T)

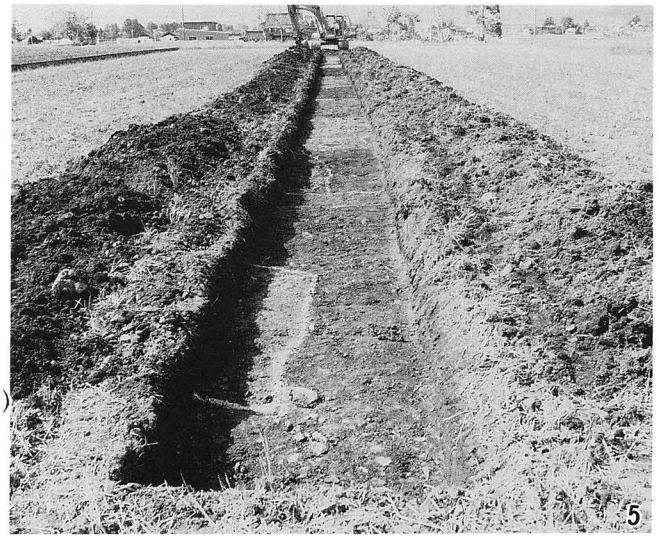
図版21

1.遺構検出状況
(柱穴、竪穴遺構
：94T)

2.遺構検出状況
(焼土跡：99T)

3.遺構検出状況
(土坑：102T)

4.遺構検出状況
(土坑：103T)



5.遺構検出状況
(溝、土坑：104T)

6.遺構検出状況
(土坑：108T)

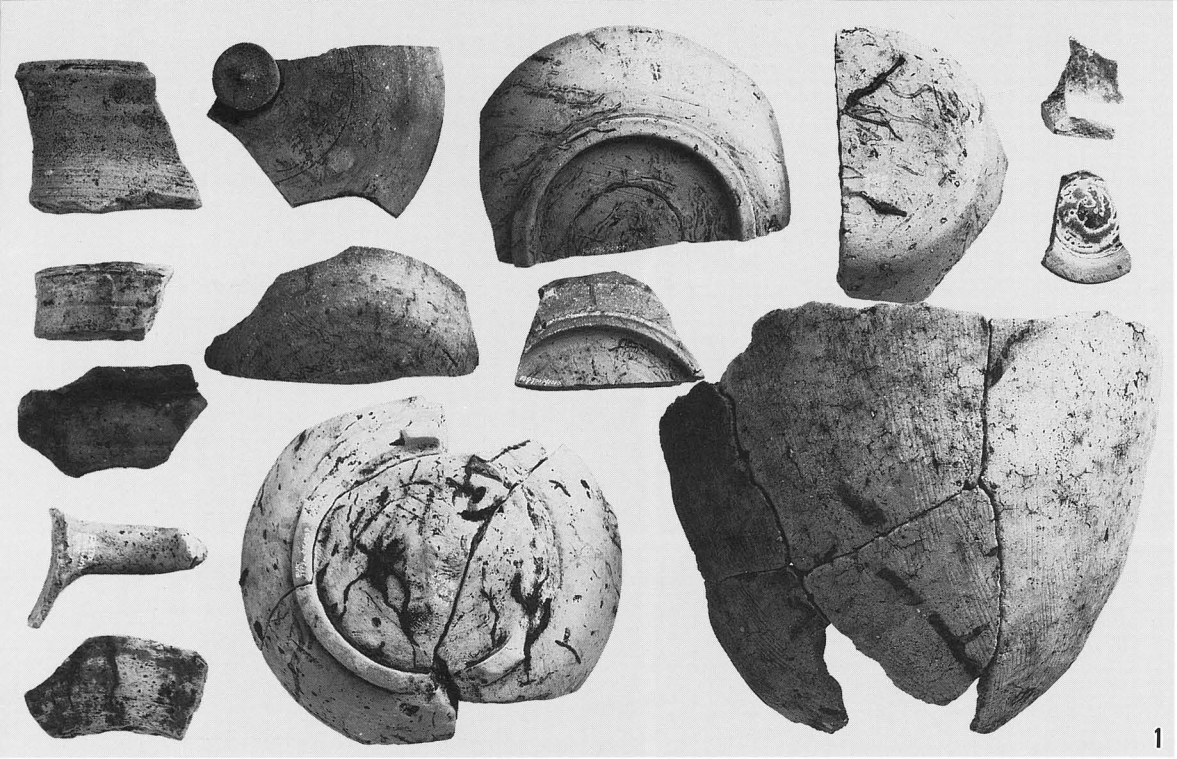
7.遺構検出状況
(土台立建物
：108T)

8.遺構検出状況
(イロリ跡：108T)

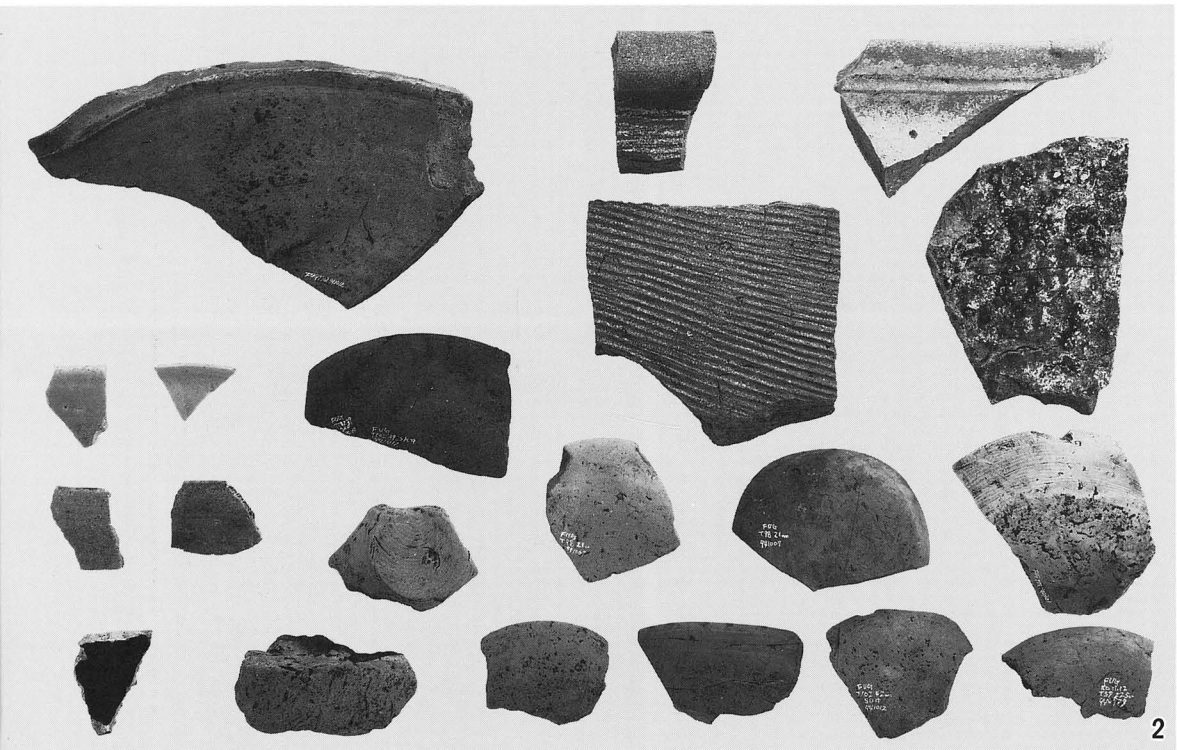
図版22

試掘調査出土遺物

1：3

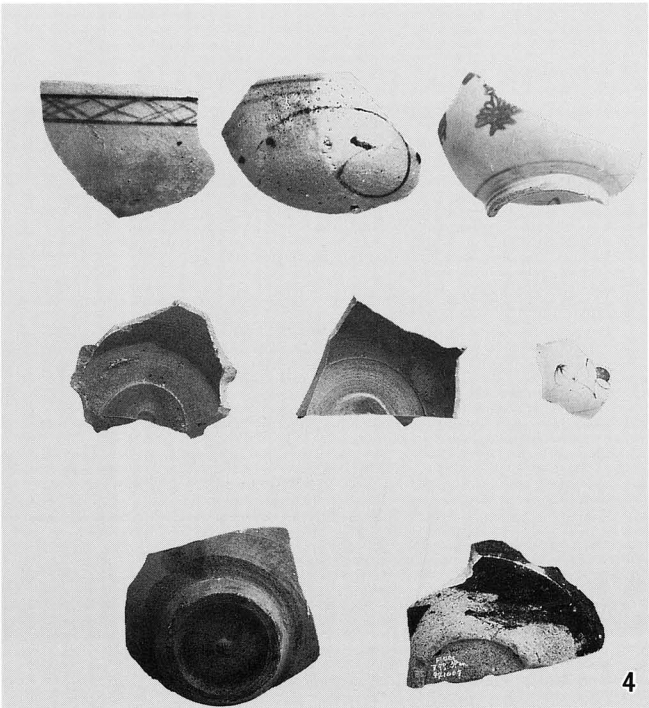


1.須恵器・土師器



2.珠洲・越前・瀬戸美濃
青磁・土師質小皿

3.縄文土器



4.瀬戸・伊万里・唐津・
越中瀬戸

報告書抄録

ふりがな	とやまけんふくみつまちうめはらおとしどいせきぐん
書名	富山県福光町梅原落戸遺跡群II
副書名	県営低コスト化水田農業ほ場整備事業（梅原地区）に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(5)
編著者名	久々忠義、島田修一、河西健二、境　洋子
編集機関	富山県福光町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター
所在地	〒939-01　富山県西砺波郡福光町荒木1550　TEL(0763)52－1111
発行年月日	西暦1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
梅原落戸	富山県 福光町梅原	16421	177	36度 33分 30秒	136度 54分 10秒	19940613 ～ 19941028	3,450	県営ほ場 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
梅原落戸	集落	縄文時代 奈良・平安時代 鎌倉・室町時代 近世	穴 掘立柱建物6棟、土坑、溝、穴 掘立柱建物1棟、柱列、道、土坑、溝、穴、噴砂 土坑、溝、穴	縄文土器・石器、古墳時代の内黒土器、土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、越前、瀬戸・美濃、青磁、白磁、陶磁器、土製品、鉄滓、馬歯、炭化米、種子、骨片、木製品、小柄、銅銭、柱根	砺波地方の南部では初めて古代集落跡を確認、礪波郡川上郷との関連が想定できる。 中世の道路を確認、排水のために道路下に長円形の溝を並行して設け、その上に細砂を敷き固める。付近には同時期のものと思われる掘立柱建物も検出

県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業（梅原地区）
に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(5)

富山県福光町梅原落戸遺跡群II

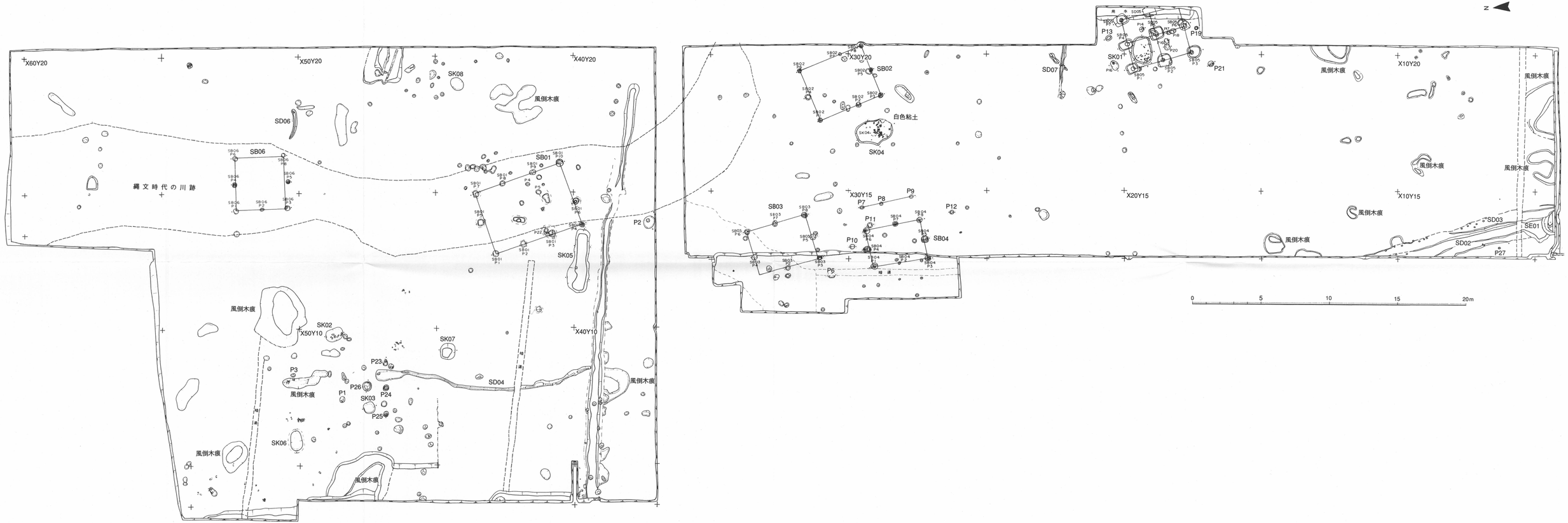
平成7年3月31日

編　集　福光町教育委員会
　　富山県埋蔵文化財センター

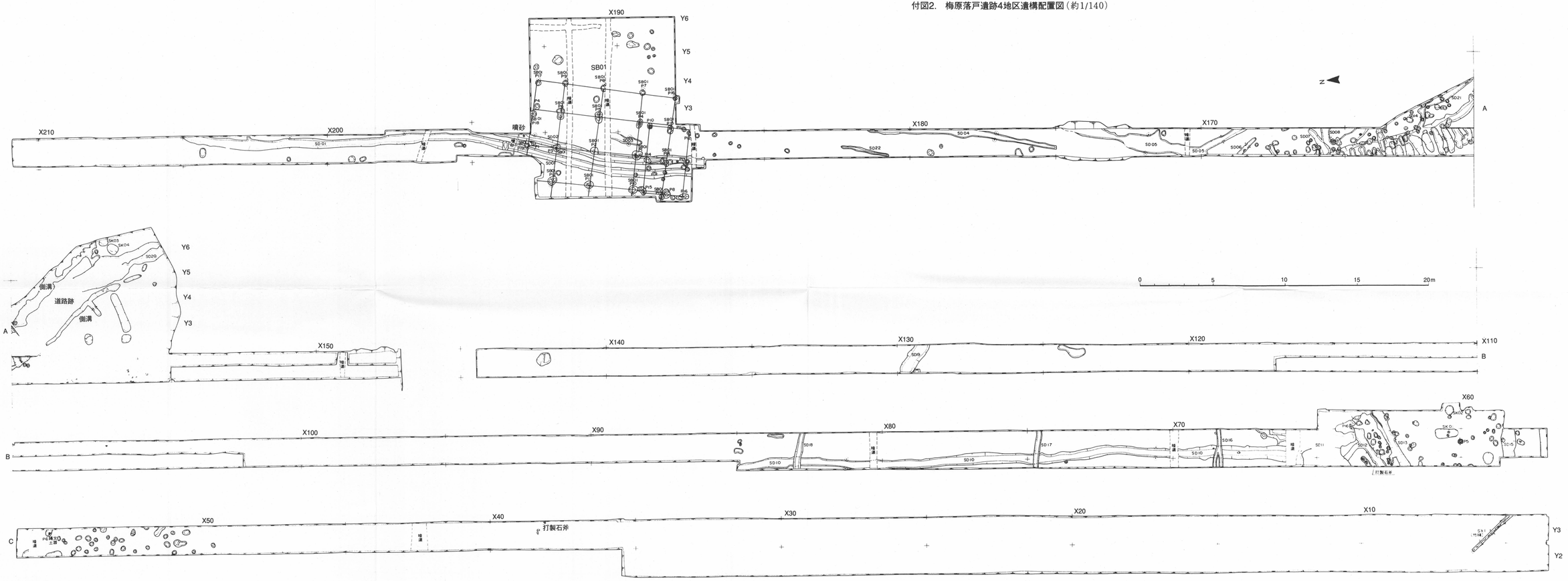
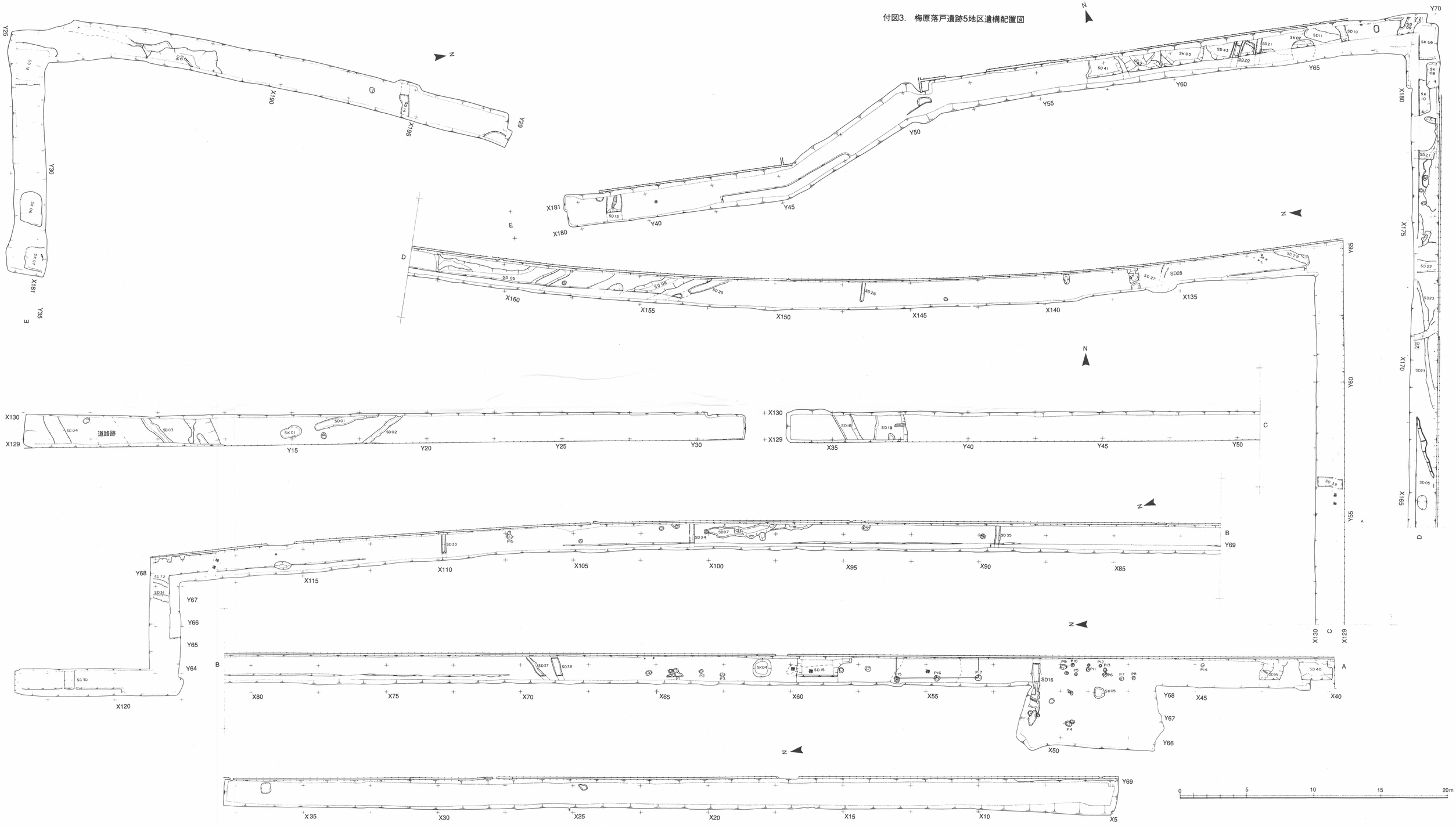
発　行　福光町教育委員会

印　刷　日興印刷株式会社

付図1. 梅原落戸遺跡3地区遺構配置図



付図2. 梅原落戸遺跡4地区遺構配置図（約1/140）



付図3.　梅原落戸遺跡5地区遺構配置図